大阪府埋蔵文化財調査報告2006－4

西　大　井　遺　跡

－大井水みらいセンター建設に伴う－

２００７年３月

大阪府教育委員会

西　大　井　遺　跡

－大井水みらいセンター建設に伴う－

２００７年３月

大阪府教育委員会

序　　文

ここに報告する西大井遺跡は、藤井寺市に位置する大井水みらいセンター（旧称大井処理場）建設に伴う発掘調査により、発見された遺跡であります。約20年間にわたり、下水処理施設の拡充とともに発掘調査が実施されてきました。これらの調査の結果、旧石器時代より近世に至る当地の歴史的地理的環境が判明し、貴重な資料として活用されています。

本書で報告する調査は、処理された汚水を浄化するために設けられる塩素混和池と、放流渠の建設に伴い実施されました。これまで、西大井遺跡で調査された中では最も北西側に位置します。調査成果の詳細は本文に譲りますが、その成果は新たな西大井遺跡の性格を明らかにしたといえます。

本書がこれまでの調査成果とあわせて周辺の歴史を解明するとともに、多くの方々に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、現地での発掘調査を実施するにあたり、ご協力をいただいた関係機関の方々に感謝するとともに、発掘調査とその後の整理作業に専念いただいた多くの方々に深くお礼申し上げます。

平成19年３月30日

大阪府教育委員会

文化財保護課長　丹上　務

例　　言

1．本書は、平成16・17年度に大井水みらいセンター（旧称大井処理場）建設に伴い実施した、藤井寺市西大井に所在する西大井遺跡の発掘調査報告書である。なお、調査番号は04061と05058である。
2．本調査は、大阪府土木部（旧都市整備部）から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。発掘調査、整理作業及び報告書作成に要した経費は全て大阪府土木部が負担した。
3．現地の発掘調査は、平成16年度から17年度にかけて調査第２グループ技師関　真一を担当者として実施した。整理作業は調査管理グループ技師林　日佐子、藤田道子を担当者として実施した。出土した木製品の樹種同定は調査第１グループ技師岡田　賢が、動物の骨の鑑定は大阪府立近つ飛鳥博物館学芸員宮崎泰史（現：財団法人大阪府文化財センター）が行った。
4．本調査における写真測量は株式会社富士測量に委託した。写真撮影フィルムについては、受託会社で保管している
5．本調査で出土した遺物の写真撮影は有限会社阿南写真工房に、木製品の保存処理は株式会社京都科学に委託した。
6．出土遺物及び記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7．本書の執筆・編集は関が行った。
8．現地調査にあたっては、大阪府土木部、藤井寺市教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々から御指導、御協力を賜った。ここに記して謝意を表します。
9．本書は300部作成し、一冊当たりの単価は966円である。

凡　　例

1．本書に用いた座標は全て世界測地系平面直角座標（第Ⅵ系）、方位については座標北、標高は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ.）を使用した。
2．遺構番号は、Ⅰ区では遺構の種類別に付した。Ⅱ・Ⅲ区については遺構種類を区別せず20番台から通しで付した。
3．遺物の実測図番号と写真図版中の番号は対応している。
4．遺物スケールは土器類：１／３、石器：１／２を基本とし、それ以外のものは各図中のスケールを参照されたい。

本　文　目　次

第１章　西大井遺跡周辺の環境について……1
第２章　調査に至る経緯……2
第３章　既住の発掘調査による成果……2
第４章　基本層序……4
第５章　各遺構面の遺構と遺物……8
まとめ……40

挿　図　目　次

第１図　西大井遺跡周辺主要遺跡分布図……1
第２図　調査区平面図（Ｓ＝１/500）……2
第３図　調査区位置図（Ｓ＝１/2,500）……3
第４図　調査区土層図（Ｓ＝１/80）……5～6
第５図　第１遺構面直上砂層出土遺物……8
第６図　第１遺構面平面図（S=1/250）……9～10
第７図　第１遺構面畦畔断面図（Ｓ＝１/30）……11
第８図　第１遺構面出土遺物……11
第９図　第１遺構面と既調査区の平面図（Ｓ＝１/500）……12
第10図　有機物堆積層出土遺物……13
第11図　第２遺構面直上砂層出土遺物……13
第12図　第２遺構面畦畔断面図……14
第13図　第２遺構面出土遺物……14
第14図　第２遺構面平面図（Ｓ＝１/250）……15～16
第15図　第２遺構面と既調査区の平面図（Ｓ＝１/500）……17
第16図　第17層出土遺物……18
第17図　地山直上遺物包含層出土遺物１……19
第18図　地山直上遺物包含層出土遺物２……20
第19図　地山直上遺物包含層出土遺物３……21
第20図　地山直上遺物包含層出土遺物４……22
第21図　溝５出土遺物……24
第22図　溝５と既調査区の平面図（Ｓ＝１/500）……24
第23図　第３～６遺構面平面図（Ｓ＝１/250）……25～26
第24図　溝１出土遺物……27
第25図　溝１・２・３断面図（北部分・Ｓ＝１/30）……27

第26図　溝１・２・３平面図（S＝1/50）……28
第27図　溝20出土遺物……29
第28図　土坑１出土遺物……29
第29図　土坑５・17・18実測図（S＝1/30）……30
第30図　土坑５出土遺物……30
第31図　土坑６実測図（S＝1/30）……31
第32図　土坑６出土遺物……31
第33図　土坑38出土遺物……31
第34図　土坑44実測図（S＝1/20）……31
第35図　溝７断面図（S＝1/30）……32
第36図　溝７出土遺物……32
第37図　第４遺構面出土遺物……32
第38図　溝２断面図（S＝1/30）……33
第39図　溝２出土遺物……33
第40図　溝３遺物出土状況図（S＝1/30）……33
第41図　溝３出土遺物（土器溜りを除く）……33
第42図　溝３土器溜り実測図（S＝1/30）……34
第43図　溝３出土遺物……34
第44図　溝３土器溜り出土遺物……35
第45図　溝１・溝３出土遺物……36
第46図　溝25断面図（S＝1/30）……36
第47図　溝25出土遺物……36
第48図　土坑17･18出土遺物……36
第49図　土坑23出土遺物……37
第50図　土坑23実測図（S＝1/30）……37
第51図　溝４断面図（S＝1/30）……37
第52図　土坑11実測図（S＝1/30）……38
第53図　土坑12実測図（S＝1/30）……38
第54図　土坑３実測図（S＝1/30）……38
第55図　Ⅱ区東部分遺構実測図（S＝1/50）……39
第56図　溝２～４と既調査区の平面図（溝・土壙墓群S＝1/1200）……43～44

表　目　次

第１表　西大井遺跡発掘調査一覧表……4

写 真 図 版 目 次

図版１　遺構（１）
Ⅲ区南壁土層
土坑５遺物出土状況
土坑18遺物出土状況
土坑44遺物出土状況

図版２　遺構（２）
溝１～３検出状況
溝３遺物出土状況

図版３　遺構（３）
土坑23完掘状況
土坑27・31・32完掘状況
土坑41完掘状況

図版４　遺物（１）
第１遺構面直上砂層
第１遺構面
第２遺構面直上砂層（９層）
第２遺構面
第17層

図版５　遺物（２）
地山直上遺物包含層（18層）

図版６　遺物（３）
地山直上遺物包含層（18層）

図版７　遺物（４）
溝１　溝５　溝20

図版８　遺物（５）
溝20

図版９　遺物（６）
土坑５

図版10　遺物（７）
溝２　溝３（土器溜り除く）

図版11　遺物（８）
溝３土器溜り

図版12　遺物（９）
溝３土器溜り

図版13　遺物（10）
溝１・３　土坑18

図版14　遺物（11）
第１遺構面直上砂層（２層）
第17層
第２遺構面直上砂層（９層）
第２遺構面
地山直上遺物包含層（18層）
溝１

第１章　西大井遺跡周辺の環境について

西大井遺跡は藤井寺市西大井に所在し、すぐ北側を大和川が西流している。西側を羽曳野丘陵に、東を国府台地に挟まれた谷地形の西側肩に西大井遺跡は位置する。

これら台地と丘陵には、考古学史上において重要かつ著名な遺跡が群集している。国府台地には、後期旧石器時代のナイフ型石器の標式遺跡として著名な国府遺跡（国指定史跡）がある。同遺跡ではその他にも、縄文時代の屈葬人骨墓や弥生時代のほぼ全期間にわたる遺物の出土、古代寺院である衣縫廃寺の存在が挙げられる。

国府遺跡の北側には縄文時代晩期の船橋式土器で知られる船橋遺跡が位置し、瓦など古代の遺物も数多く出土するため古代寺院などの存在が想定されている。他にも古墳時代の集落跡である林・土師の里・古室遺跡が広がり、仲津山古墳・市野山古墳など古市古墳群を構成する古墳もある。これらの遺跡は引き続き古代にも存続したようであり、企画性の高い建物群も検出されている。

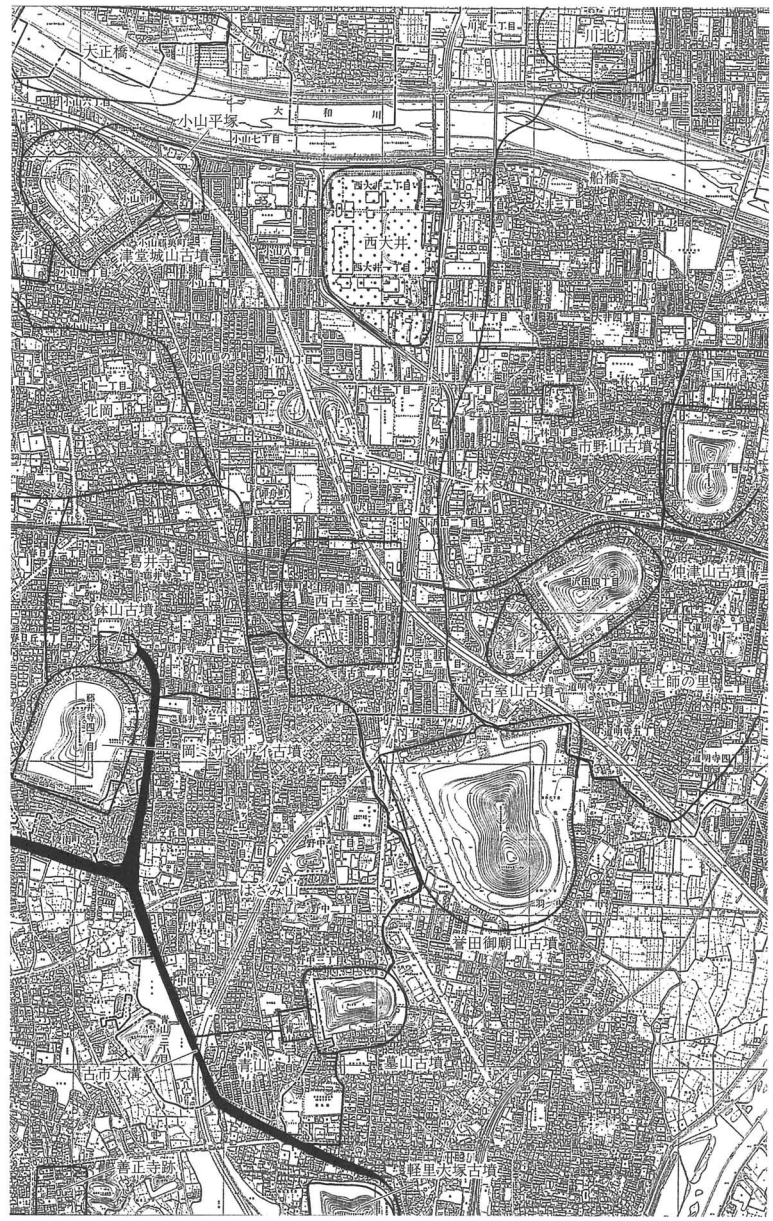
一方、西側の羽曳野丘陵にも遺跡は数多く存在する。旧石器・縄文時代は北岡遺跡で認められ、縄文時代中期の土器も出土している。それに隣接する小山遺跡でも同じ様相を呈す。

古墳時代に入ると、小山遺跡で４世紀代の焼失住居が確認されており、近接して位置する津堂城山古墳との関連でも注目される。南に位置するはざみ山遺跡では円筒埴輪棺が出土しており、その西側には岡ミサンザイ古墳が位置する。

古代になると、開削時期が７世紀ごろと考えられる古市大溝が軽里大塚古墳付近から発し、岡ミサンザイ古墳付近まで開削された。その途中の西側には塚穴古墳・小口山古墳・ヒチンジョ池西古墳・徳楽山古墳などの終末期古墳や、古代寺院である善正寺跡や野中寺が位置する。

古代の人々の活動は、北岡遺跡やはざみ山遺跡で検出された掘立柱建物群の存在から知る事ができる。

このように、西大井遺跡は、府下において特筆すべき地域に位置する。



第１図　西大井遺跡周辺主要遺跡分布図

第２章　調査にいたる経緯

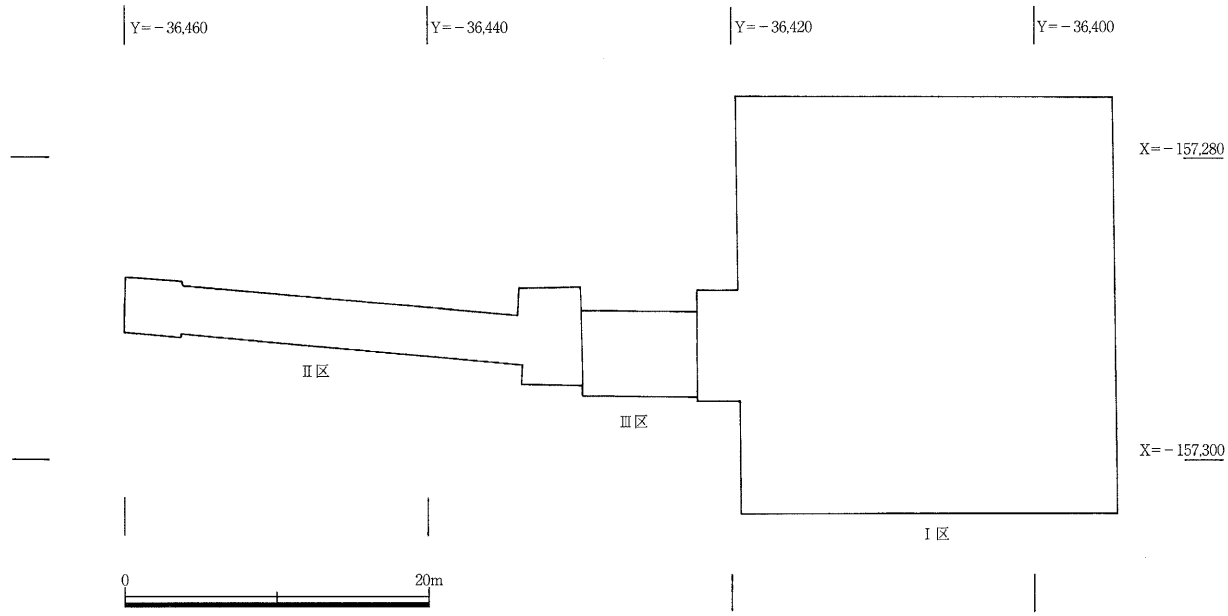
大阪府土木部は、公共下水道整備の一環として、大和川下流東部流域下水道事業を推進し藤井寺市西大井に下水処理場を建設することとした。当時、建設地において遺跡の存在は未確認であり、土木部と大阪府教育委員会との協議の結果1979年度に試掘調査が実施され、遺跡であることが確認された。

今回の調査までに、過去約20年にかけて断続的に大阪府教育委員会および（財）大阪府埋蔵文化財協会（現財団法人大阪府文化財センター）によって調査が実施されている。

1994年度までの調査は下水処理施設の第Ⅰ期供用開始のためのものであった。続いて、大阪府土木部南部流域下水道事務所では、下水処理施設の増築工事を立ち上げ、1998～2000年度まで再び発掘調査が実施された。

今回の調査は、これまでに建設された施設で処理された下水を浄化し、川に放流するための施設である塩素混和池（以下：Ⅰ区）と放流渠（以下：Ⅱ区）、及びその接合部（以下：Ⅲ区）の建設に伴う発掘調査であり、Ⅰ区からⅡ区、Ⅲ区と順に発掘を行った。

尚、Ⅰ・Ⅱ区は調査対象地を矢板で囲み発掘を行い、Ⅲ区は矢板を使用せず掘削を行った。



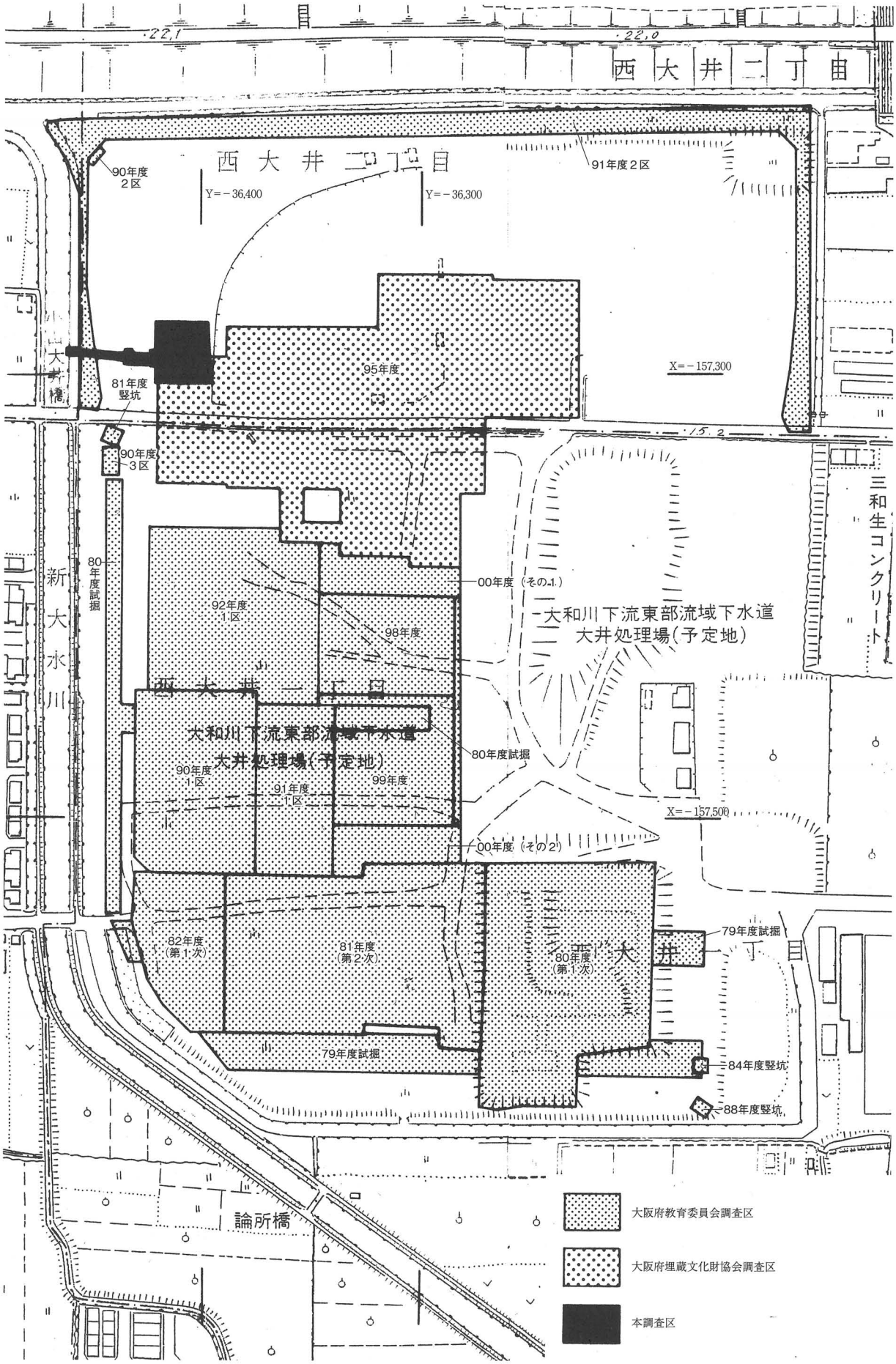
第２図　調査区平面図（S＝1／500）

第３章　既住の発掘調査による成果

西大井遺跡の調査は断続的に実施され、約5.5万㎡が発掘されている。その結果、旧石器時代から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認され、当地域周辺の歴史的環境を考える上で重要なデータを提供している。

旧石器時代では複数の地点で石器ユニットが確認され、南河内における貴重な資料となっている。縄文時代には晩期の突帯文土器と弥生第Ⅰ様式の土器が遺構から共に出土している。

庄内期に入ると方形周溝墓や竪穴住居が確認される。弥生時代後半から古墳時代にかけては数千基という土坑も検出され、調査者により墓と想定されている。しかし、そのような墓に見合うだけの住居跡は検出されておらず、古墳時代の西大井遺跡は、生産域と墓域にあたると考えられ、近接する場所に居住域が展開することが指摘されていた。



第３図　調査区位置図（S＝1／2,500）

古代になると主に水田が確認されており、同じ様相が近代まで続くようである。検出された平安時代の水田条理が現行条理と重複することから、条理研究に新たなデータを提供することとなった。

以上のように、多くの成果があげられており、周辺では例を見ないほど広範囲かつ掘削深度が深い発掘調査により得られた土層データは、旧地形を復元する上でも非常に重要であり活用価値が高い。

調査年度	調査機関	調査面積	備　　考
1979	府教委	約22,000㎡	
1980	府教委		『南河内における遺跡の調査』Ⅰ大阪府教育委員会1990に旧石器のみ報告 調整池調査箇所で方形周溝墓・竪穴住居など検出
1981	府教委		『南河内における遺跡の調査』Ⅰ大阪府教育委員会1990に旧石器のみ報告
1982	府教委		『西大井遺跡第３次発掘調査概要』大阪府教育委員会1983
1984	府教委		「西大井遺跡」『石川左岸幹線管渠築造遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会1986
1988	府教委		「西大井遺跡」『石川左岸幹線管渠築造遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会1989
1989	府教委		「西大井遺跡」『石川左岸幹線管渠築造遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会1990
1990	府教委	約4,000㎡	『西大井遺跡発掘調査概要1990年度』大阪府教育委員会1992
1991	府教委		『西大井遺跡発掘調査概要1991年度』大阪府教育委員会1993
1992	府教委	5,600㎡	『西大井遺跡発掘調査概要1992年度』大阪府教育委員会1994
1993	府埋文協会	9,790㎡	『西大井遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター1995
1994	府埋文協会	220㎡	
1998	府教委	3,370㎡	『西大井遺跡ー縄文時代・後期旧石器時代石器群の調査』大阪府教育委員会2003
1999	府教委	3,787㎡	
2000	府教委	2,736㎡	
2004	府教委	840㎡	本　　書
2005	府教委		

第１表　西大井遺跡発掘調査一覧表

第４章　基本層序

今回の調査は過去の調査で得られた成果を基にT.P. 12.5mから調査掘削をおこなった。その結果、検出できた遺構面は計６面であり（上から順に第１遺構面･第２遺構面とする）、最終の第６遺構面は地山での検出となった。しかし、両調査区の大部分は第１・２・６遺構面であり、Ⅰ区東端で部分的に第３～５遺構面が確認されたに過ぎない。それは、後述するように地山が西から東へ標高を減じていることによる。

以下、上層より述べていく。

第１遺構面直上砂層と第１遺構面

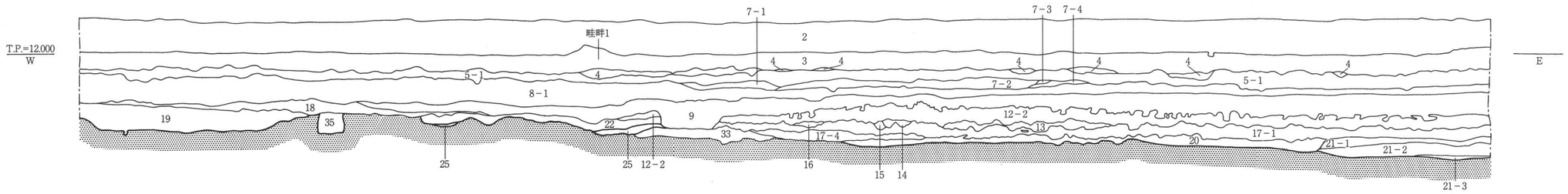
今回の調査では、Ⅰ・Ⅱ区の調査区を矢板で囲み、調査開始レベルであるT.P. 12.5mまで機械掘削を行った。そのため、それより上のレベルの土層を確認できなかった。Ⅰ・Ⅱ区は一面砂層であり、0.5ｍほどその砂層を掘削して第１遺構面を検出した。そのため、この砂層を第１遺構面直上砂層と呼称していた。

しかしⅢ区で矢板を使用せず調査した結果、T.P. 12.6mにおいて南北方向の畦畔（畦畔10）を土層断面で確認した。そのため、平面では畦畔10を確認できなかったものの、当調査地において第1遺構面より上に遺構面が存在したと考える。畦畔10はわずかにシルトが混ざる砂層で形成されていた。つまり、第１遺構面直上砂層は畦畔10のある遺構面のベース層と考えられる。ここで、畦畔10のあった遺構面について検討したい。

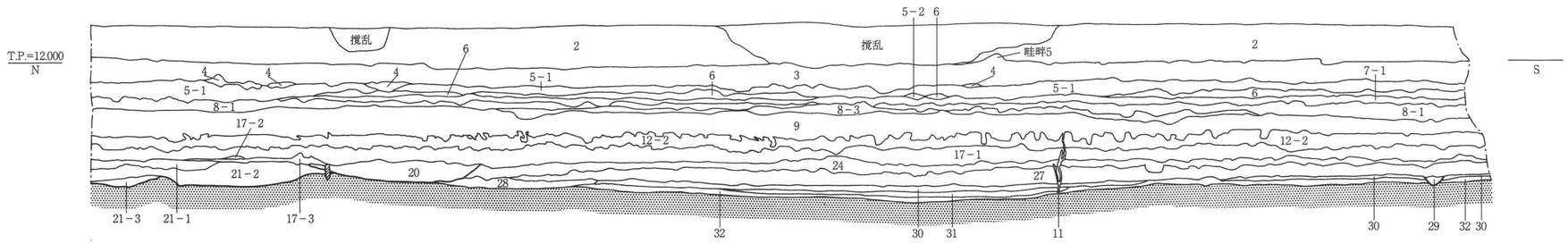
今回の調査地の隣接地を調査した（財）大阪府文化財協会の発掘成果（以下：協会1995）を参考にすると、協会1995で第１遺構面及び第２遺構面と呼称している遺構面レベルの中間に畦畔10は存在する。

ベース層は前者がオリーブ灰色微砂～シルトで、後者が暗オリーブ灰色の微砂混粘質土と報告されている。この点については、前者と様相が似ている。そのため、現段階では協会1995で検出された第１遺構面と畦畔10の遺

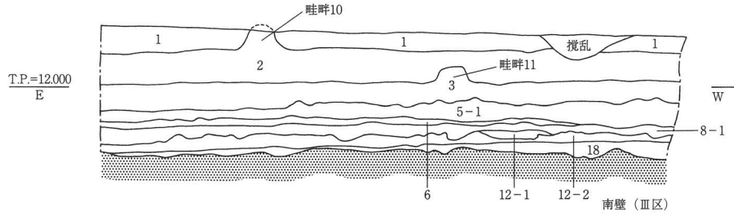
Ⅰ区　北壁土層断面図



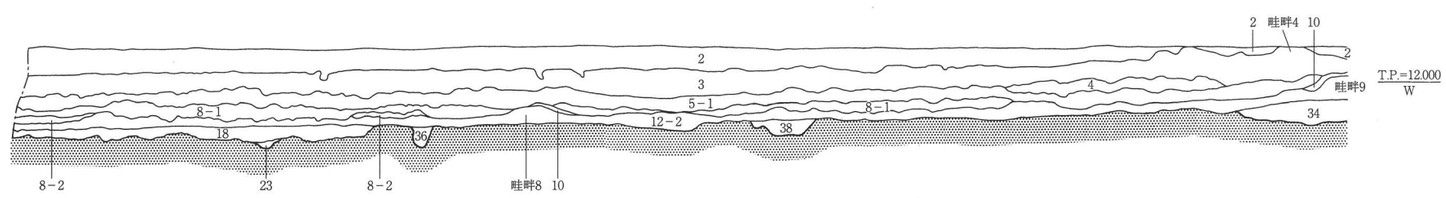
Ⅰ区　東壁土層断面図

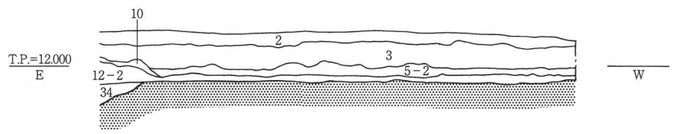


Ⅲ区　北壁土層断面



Ⅱ区　南壁土層断面図





番号		土色
	1	青灰褐色砂礫層
第１遺構面直上砂層	2	黄灰色褐色シルトまじり砂層
第１遺構面	3	オリーブ褐色粘質土層
	4	オリーブ灰褐色粘質土層（やや固くしまる）
植物堆積層上層	5－1	やや暗いオリーブ灰褐色粘質シルト
植物堆積層上層	5－2	やや暗いオリーブ灰色シルト
有機物が入らない層	6	オリーブ灰褐色シルト
植物堆積層中層	7－1	やや暗いオリーブ灰褐色粘質シルト
植物堆積層中層	7－2	オリーブ灰褐色シルト（やや粘質）
植物堆積層中層	7－3	オリーブ灰褐色粘質シルト
植物堆積層中層	7－4	やや暗いオリーブ灰褐色砂質シルト
植物堆積層下層	8－1	茶灰褐色砂礫まじりシルト
植物堆積層下層	8－2	茶灰褐色砂礫まじりシルト（砂多く入る）
植物堆積層下層	8－3	灰茶褐色砂質シルト（有機物多く入る）
第２遺構面直上砂層	9	黄褐色及び灰褐色粗砂層
	10	灰茶褐色微砂まじりシルト
	11	灰黄褐色砂層
第２遺構面	12－1	やや暗い灰褐色砂礫まじりシルト
第２遺構面	12－2	灰褐色砂礫まじりシルト
	13	茶灰褐色シルト（白色砂粒少し入る）
	14	茶灰褐色砂質シルト
	15	茶灰褐色砂質シルト（しまる）
	16	茶褐色砂質シルト
	17－1	やや暗い茶褐色砂礫まじりシルト（第２酸化鉄入る）
	17－2	茶灰褐色シルト（第２酸化鉄入る）
	17－3	茶灰褐色砂礫まじりシルト（第２酸化鉄入る）
	17－4	灰褐色砂礫まじりシルト（第２酸化鉄入る）
地山直上遺物包含層	18	暗灰褐色砂礫まじり土
土坑1	19	暗灰褐色砂礫まじり土
溝1	22	茶灰褐色砂礫まじりシルト
溝5	20	暗灰褐色粘質シルト
溝6	21－1	灰褐色シルト（粗砂入る）
溝6	21－2	灰褐色砂礫まじりシルト（灰褐色シルトブロック入る）
溝6	21－3	灰褐色シルト（炭入る）
溝20	23	暗灰褐色砂礫まじりシルト
第３遺構面	24	やや暗い灰褐色粘質シルト（白色砂粒わずかに入る）
溝2	25	暗灰褐色粘質シルト（わずかに砂入る）
溝3	26	茶灰褐色シルト（わずかに砂礫入る）
第４遺構面	27	暗灰褐色粘質シルト
	28	暗灰褐色シルト
土坑14	29	暗灰褐色粘質シルト
第５遺構面	30	緑灰色粘土（青ベルト）
	31	暗灰褐色粘質シルト（白色砂礫わずかに入る）
	32	やや暗い灰褐色砂礫まじりシルト
	33	暗灰褐色シルト（白色砂礫入る）
土坑16	35	暗灰褐色砂礫まじりシルト
溝22	37	暗灰褐色砂礫まじり土
溝24	34	暗灰褐色砂礫まじりシルト
土坑34	36	暗灰褐色砂礫まじり土
地山	38	オリーブ青灰褐色砂礫まじりシルト

第４図　調査区土層図（Ｓ＝1/80）

構面が対応すると考え、15世紀以降の遺構面と考える。

尚、今回の調査で第１遺構面とした水田面は、協会1995の第３遺構面に対応する。

有機物堆積層（第５～８層）

木の枝などを多く含み、ラミナ状に堆積している。検出レベルはT.P. 11.7m～12.0mであり、層厚は0.2m～0.5mである。土質から大きく上中下の３層（第５・７・８層）に区分できる。

上層はやや暗いオリーブ灰褐色粘質シルト（第５層）であり、中層はオリーブ灰褐色シルトを基調とする（第７層）、下層は茶灰褐色砂礫まじりシルト層（第８層）であった。東壁及び南壁では、上層と中層の間に有機物が全く入らないシルト層（第６層）が薄く堆積する状況を観察できたが、北へ行くに連れ断続的になり、北壁では観察できなくなる。

協会1995の調査では有機物堆積層中のレベルにおいて、第４遺構面と呼称される水田面が当調査区より東側で検出されている。しかし、今回の調査では畦畔の痕跡や人の足跡などを確認することは出来なかった。

第２遺構面直上砂層（第９層）

植物堆積層を除去すると認められた砂層である。第１遺構面直上砂層と異なり、地山が高くなるＩ区西側より以西では確認されなかった。層厚も第１遺構面直上砂層に比べ薄く、西側は約0.2m、東側で約0.4ｍである。検出レベルがT.P11.0ｍ～11.3ｍであることから、協会1995の第５遺構面直上砂層に対応すると考える。

第２遺構面

第２洪水砂層を除去すると現れる水田面である。検出された遺構上面のレベルは、T.P. 10.8ｍ～11.8ｍであり、当遺構面は西側から東側へ下る地形を呈す。特にⅡ区においては、東西のレベル差が約0.5m生じている。これは後述する地山面の傾斜と同じ様相を呈し、その影響で生じているものと考える。そのため、地山が隆起するＩ区西側においては、遺構面そのものが認められない。

このように、第２遺構面は第１遺構面と比較し、傾斜が目立つ様相であった。当遺構面のベース層は厚さ0.2mほどである。レベルとの対応では協会1995の第５遺構面に相当すると考える。

第２遺構面を除去すると、Ｉ区西側とⅡ区で第18層（地山直上遺物包含層）が、Ｉ区東側では第17層が確認される。いずれも遺物を含み、遺構の掘削は確認されていない。これらの層を除去すると、第３遺構面あるいは地山面が検出される。

第３遺構面

第３～５遺構面は、Ｉ区東端でのみ確認されており、各層毎に遺構が認められた。それ以外の箇所での遺構検出面は、全て地山であった。第３遺構面は、第２遺構面除去後にＩ区東半で確認されたやや暗い茶褐色砂礫まじりシルト層（第17層）を除去すると検出された。第３遺構面のベース層はやや暗い灰褐色粘質シルト（第24層）で、検出したレベルはT.P. 10.5m、層の厚さは約0.2mであった。対応関係では協会1995の第８遺構面に相当すると考える。

第４遺構面

第３遺構面と同じくＩ区東端で確認された。暗灰褐色粘質シルト（第27層）をベース層とする。検出レベルはT.P. 10.3～10.4mであり、協会1995の第９遺構面に相当すると考えられる。

第５遺構面

協会1995の調査時に「青ベルト」と呼称された緑灰色粘土層（第30層）に対応する。色調が特徴的であり鍵層として扱えた。但し、唯一確認されたⅠ区東壁においても断続的な様相であり、北壁では認められなかった。検出レベルはT.P. 10.2mで層厚約0.1ｍである。協会1995では第10遺構面とされている。

なお、この層から地山面までに２層（第31・32層）堆積しており、協会1995では遺構面を設定しているが、今回の調査区では遺構を検出できなかった。

第６遺構面

地山面であり、今回の遺構の大部分がこの面で検出された。Ⅱ区西端ではT.P. 11.8mで検出され、Ⅰ区東端の最も低いところでT.P. 10.0mであった。

このことから、今回の調査区は地山が大きく傾斜する地形であることがわかる。そのため、第２遺構面は西から東へ傾斜する様相を呈しているが、第１遺構面はほぼ水平な様相を呈し、様相が異なる。

第５章　各遺構面の遺構と遺物

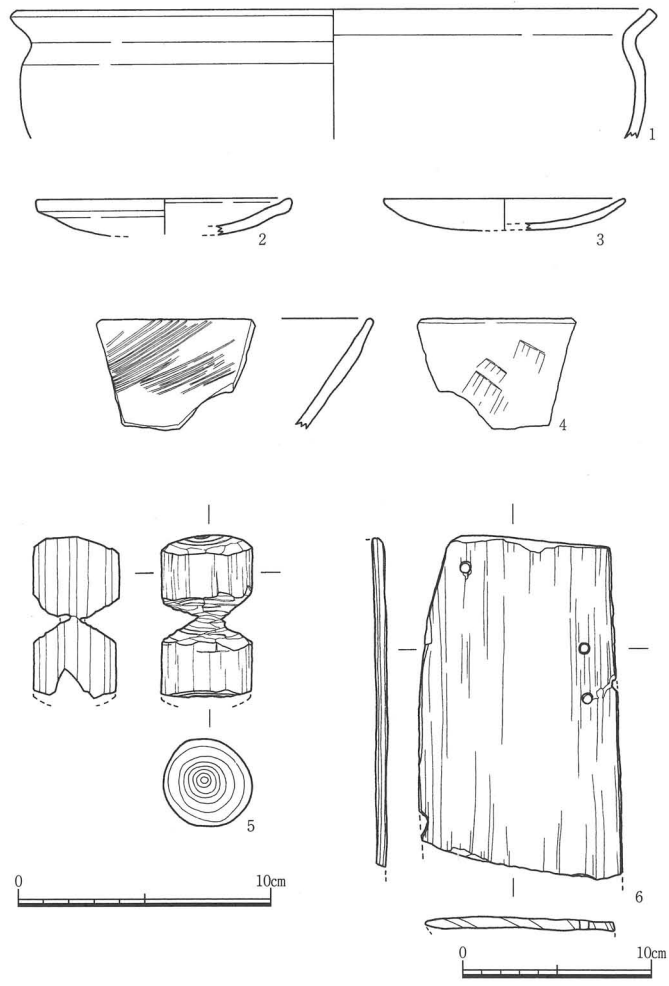
今回の調査によって検出された遺構と遺物について述べる。ただし、今回の調査では、ほとんどの遺構が地山面で確認されたため、検出状況や、出土した遺物から時期を判断せざるを得ない。そのため、遺物により時期が判明した遺構は対応する遺構面で述べ、それ以外の遺構については、第６遺構面（地山面）で述べる。

第１遺構面直上砂層出土遺物（第５図　図版４）

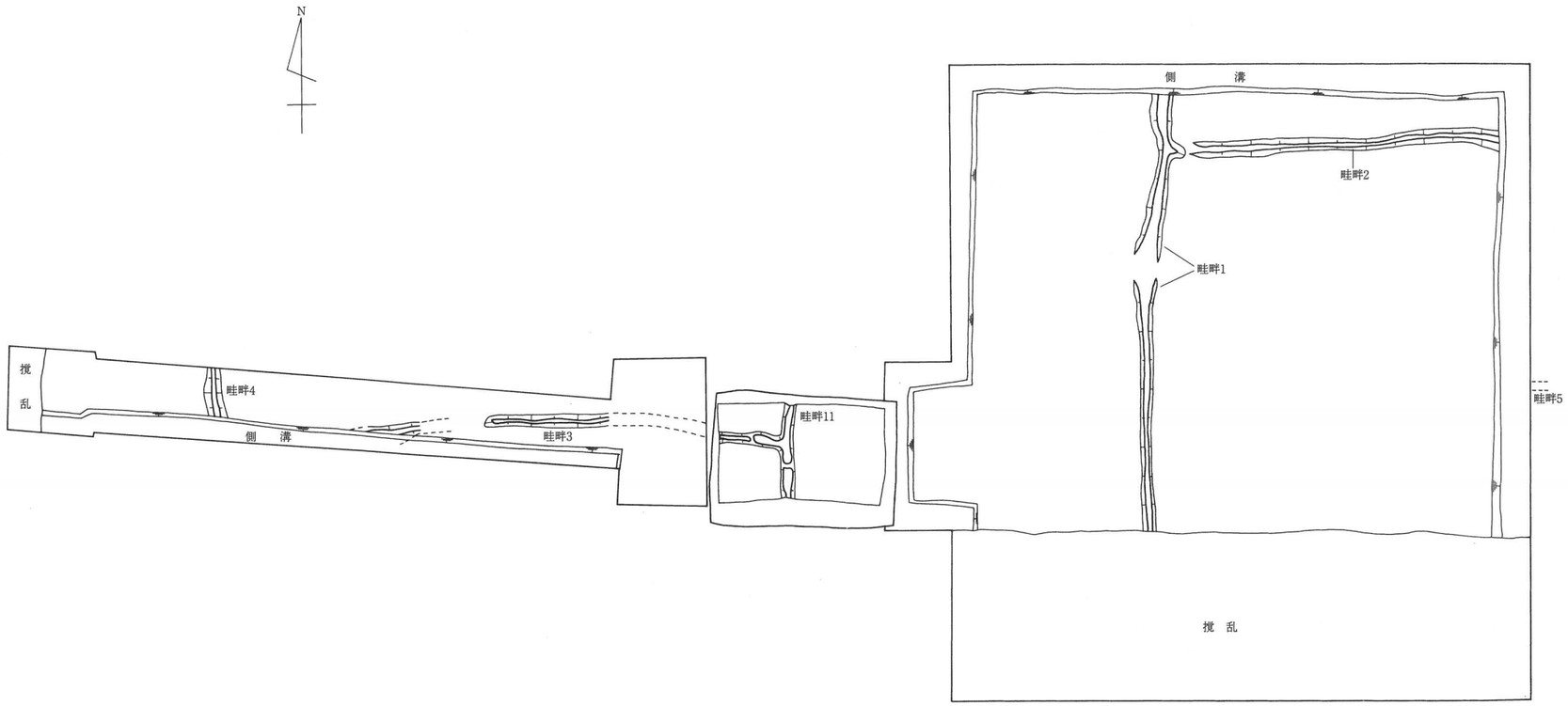
第１遺構面直上砂層（第２層）は、基本層序で述べたとおり遺構面のベース層である可能性が高い。しかし、それは人為的な堆積ではなく、洪水などによる自然堆積を利用したものと考える。

この砂層中から細かい土器片が出土した。図化できたものについて述べる。

１は土師質の甕で、奈良時代後半頃のものと思われる。２と３は土師器皿の口縁部であり、前者は「ての字」口縁が退化しており、11世紀代頃のものであろう。４は土師器椀か坏の口縁部であり、口縁端部付近に煤が付着



第５図　第１遺構面直上砂層出土遺物



第６図　第１遺構面平面図（Ｓ＝1/250）

し黒色である。外面は横方向のヘラ削り、内面はミガキが認められる。

５は木錘であり、２つに別れているが本来は同一個体であった。６は厚さ約１cmの木の板に穴が３ヶ所穿孔されている。長辺の一端は刃のように加工されていることから、本来は鋤先などの掘削用具で、それを転用した物と思われる。これら木製品の樹種はマツ属複維管束亜属（クロマツやアカマツなどの二葉マツ類）である。

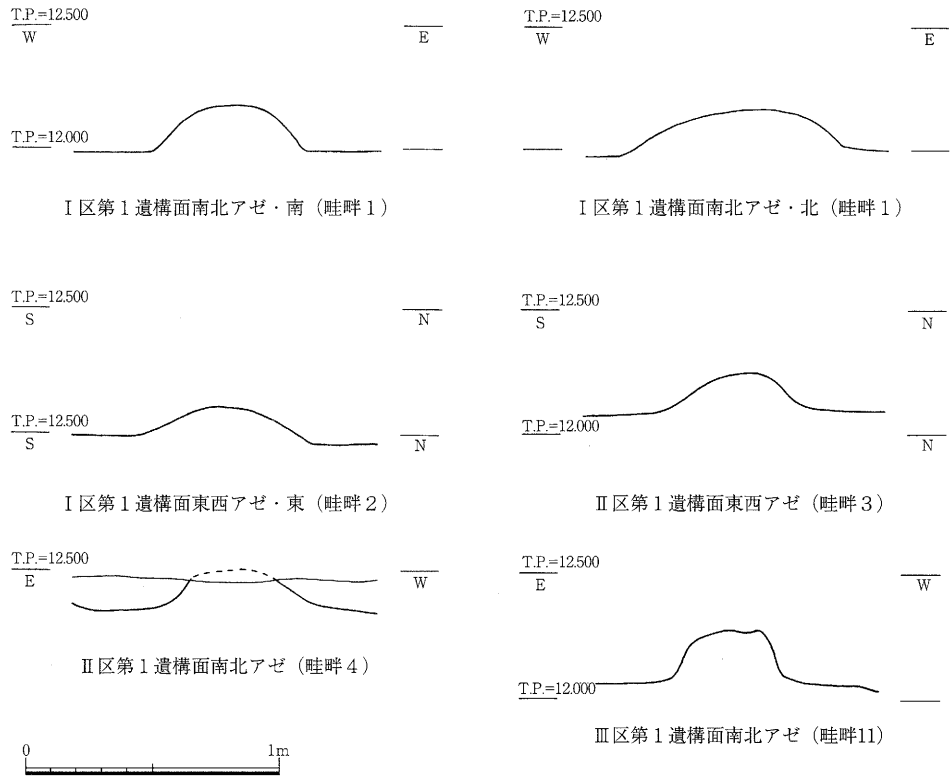
第１遺構面の遺構と遺物（第６～９図　図版４）

Ⅰ区では南北方向の畦畔１と東西方向の畦畔２を検出した。

Ⅱ区ではやや南に曲がる東西方向の畦畔３と、南北方向の畦畔４を確認した。

Ⅲ区では畦畔３の東部分とそれにつながる南北方向の畦畔11を確認した。

畦畔１は調査区を南北に貫き水口を有している。水口の北側で畦畔２とつながっている。水口より南側は幅約0.6m、高さ約0.15m、水口より北側では幅約１ｍ、高さ約0.1ｍと平たくなる。検出された位置より、協会1995の７区第３遺構面で検出されている南北方向の畦（遺構名45-OZ）と同一と考えられる。

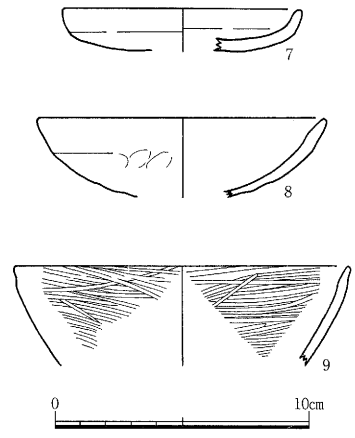


第７図　第１遺構面畦畔断面図（S=1/30）

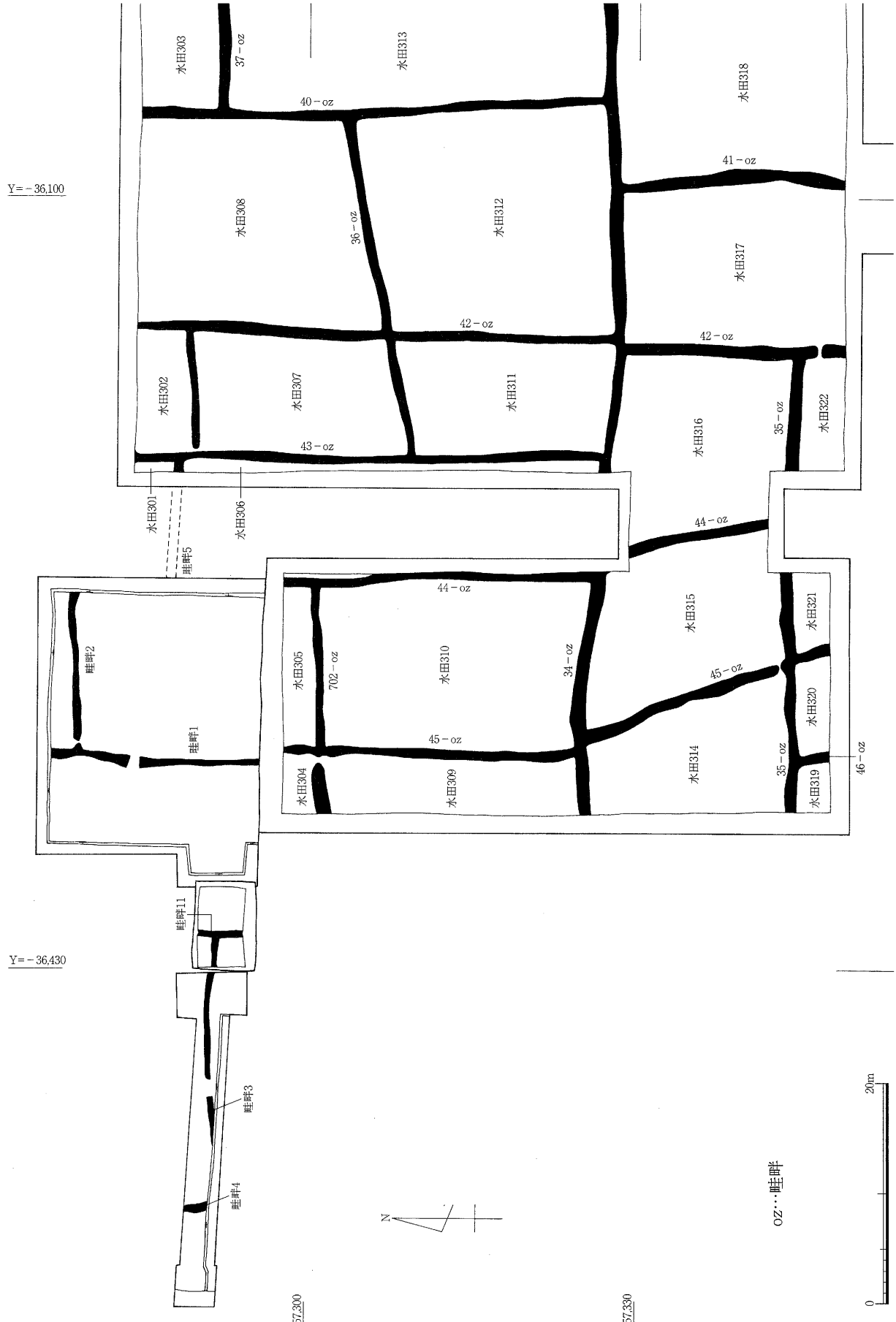
畦畔２は畦畔１とつながっている箇所で水口を有している。東へ向かって延びているものの、緩やかに蛇行している。幅約0.5m、高さ約0.15mを測り、東に向かうに連れて低くなり東壁土層では認められなかった。

Ⅰ区東壁土層の南側で畦畔（畦畔５）の断面が観察され、平面検出を行った。しかし、畦畔の痕跡は確認されず、畦畔１にも畦畔５と接続するような痕跡は認められなかった。

畦畔２のように平面に現れながらも土層に現れず、逆に土層で観察されながらも平面で検出されなかった畦畔５の状況から、東壁に沿って側溝を掘削した際に、南北方向の畦を破壊してしまった可能性も考慮した。つまり、協会1995の第３遺構面で検出された畦畔44-OZが当調査区まで



第８図　第１遺構面出土遺物



第９図　第１遺構面と既調査区の平面図（Ｓ＝1/500）

延びていた可能性である。このように考えると、畦畔２や畦畔５の状況も理解しやすくなる。

その場合、畦畔44-OZは北壁東側の土層で確認できないため、畦畔２より以北には延びないと考えられる。一方、畦畔５も畦畔44-OZにつながり西へは延びなかったため、プランが検出できなかったことになる。

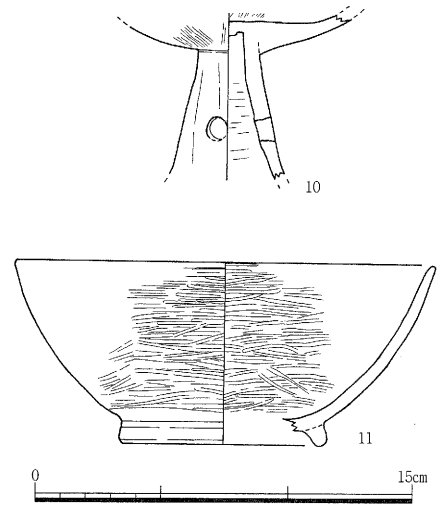
この結果、協会1995で南限を確認された水田305は、北限を今回検出した畦畔２で画されることになり南北約22ｍ、東西約15mの大きさを測る。同じく水田301は東西12ｍの水田と考えられる。

出土した遺物は非常に少ない。畦畔１から土師器皿（７）が出土し、他にベース層からも土師器椀（８）や瓦器椀（９）が出土している。これらから、第１遺構面の時期を鎌倉時代頃と考える。以上より第１遺構面は協会1995の第３遺構面の時期に該当すると考える。

有機物堆積層（第５～８層）出土遺物（第10図）

第１遺構面と第２洪水砂層の間に堆積した有機物を多く含む層であり、0.4ｍ堆積している。レベルを対応させると協会1995の第４遺構面がこの層の間に存在するはずであるが、今回は確認されなかった。層中から出土した遺物のうち、図化できたものは２点である。

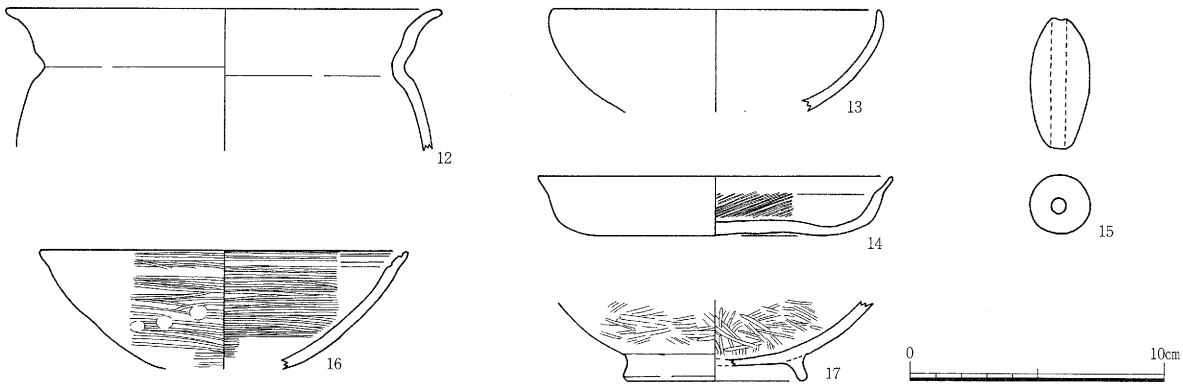
10は高坏で、中空の脚部に三方向の円形透かしを施している。古墳時代前期中葉から後葉と考える。11は、植物堆積層下層（８層）から出土した両黒の黒色土器である。底部から口縁部までやや内湾しながら立ち上がり、体部外面は横方向の磨きが高台付近まで施される。体部内面は、横方向の磨きを基調としながらも部分的に斜め方向の磨きが認められる。高台はやや丸みがあり、しっかりと張り出しており11世紀代のものと考える。



第10図　有機堆積層出土遺物

第２遺構面直上砂層（第９層）出土遺物（第11図　図版４）

砂層中より出土した遺物として、土師器甕（12）、土師器皿（14）、瓦器椀（16･17）や土錘（15）が挙げられる。他に、獣骨が計４片出土している。最大のものはイノシシの大腿骨（骨幹・図版４-ｄ）であり長さ11cm、幅３cmを測る。イノシシの骨はもう１片（大腿骨・図版４-ｂ）出土しており、加工痕が認められる。残る２片はいずれもシカの骨であり、肩甲骨（図版４-a）と第６頸椎の左前間接面（図版４-ｃ）である。



第11図　第２遺構面直上砂層出土遺物

第２遺構面の遺構と遺物（第12～15図　図版４）

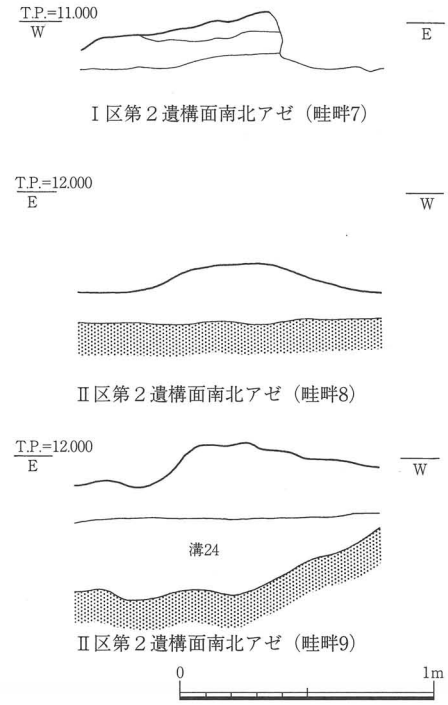
遺構はⅠ区で南北方向の畦畔が２本（畦畔６・畦畔７）と足跡、流路が検出された。Ⅱ区でも南北方向の畦畔２本（畦畔８･畦畔９）を検出した。東西方向の畦畔は認められなかった。

この遺構面は、後の洪水が大規模であったためか、凹凸が目立つ状況であった。さらに、洪水により生じたと思われる流路（自然流路）がⅠ区北東部分で畦畔６を寸断した状況で検出された。

畦畔７も非常に残りが悪く一部が残存していたにすぎない。畦畔７の西に接して幅約４ｍの溝状のようなくぼみが検出された。

この西側では地山が検出されており、地山と畦畔７の間を南北に貫いていた。深さは0.1m～0.15ｍと非常に浅く、第２遺構面直上砂層と同じ粗砂で埋没していた。

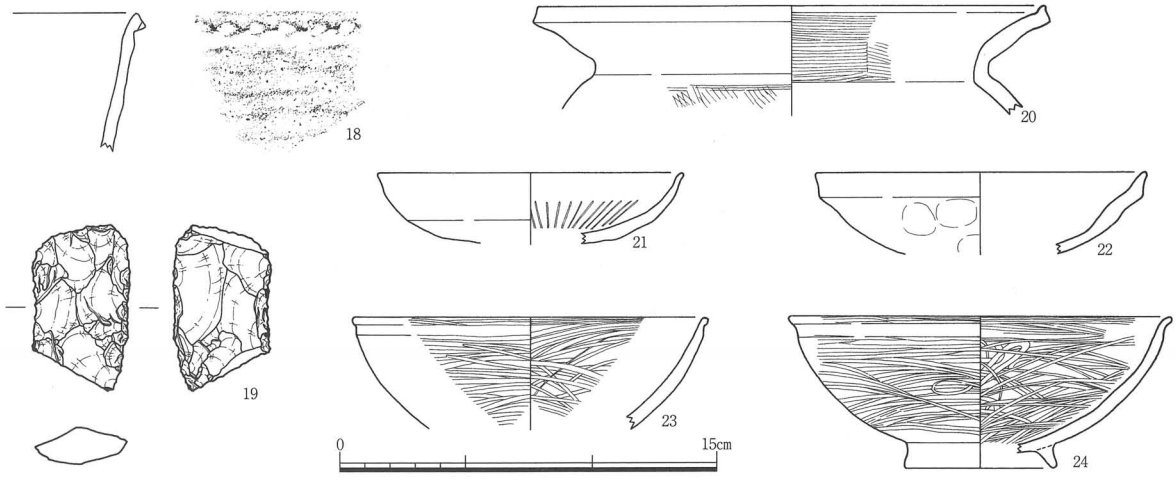
第２遺構面は検出されたレベルから協会1995第５遺構面に対応すると考えられる。その場合、畦畔６は協会1995第５遺構面で検出された畦畔437-OZと、同じく畦畔７は畦畔708-OZと同一と思われる。しかし溝状の地形に対応するものは検出されていない。



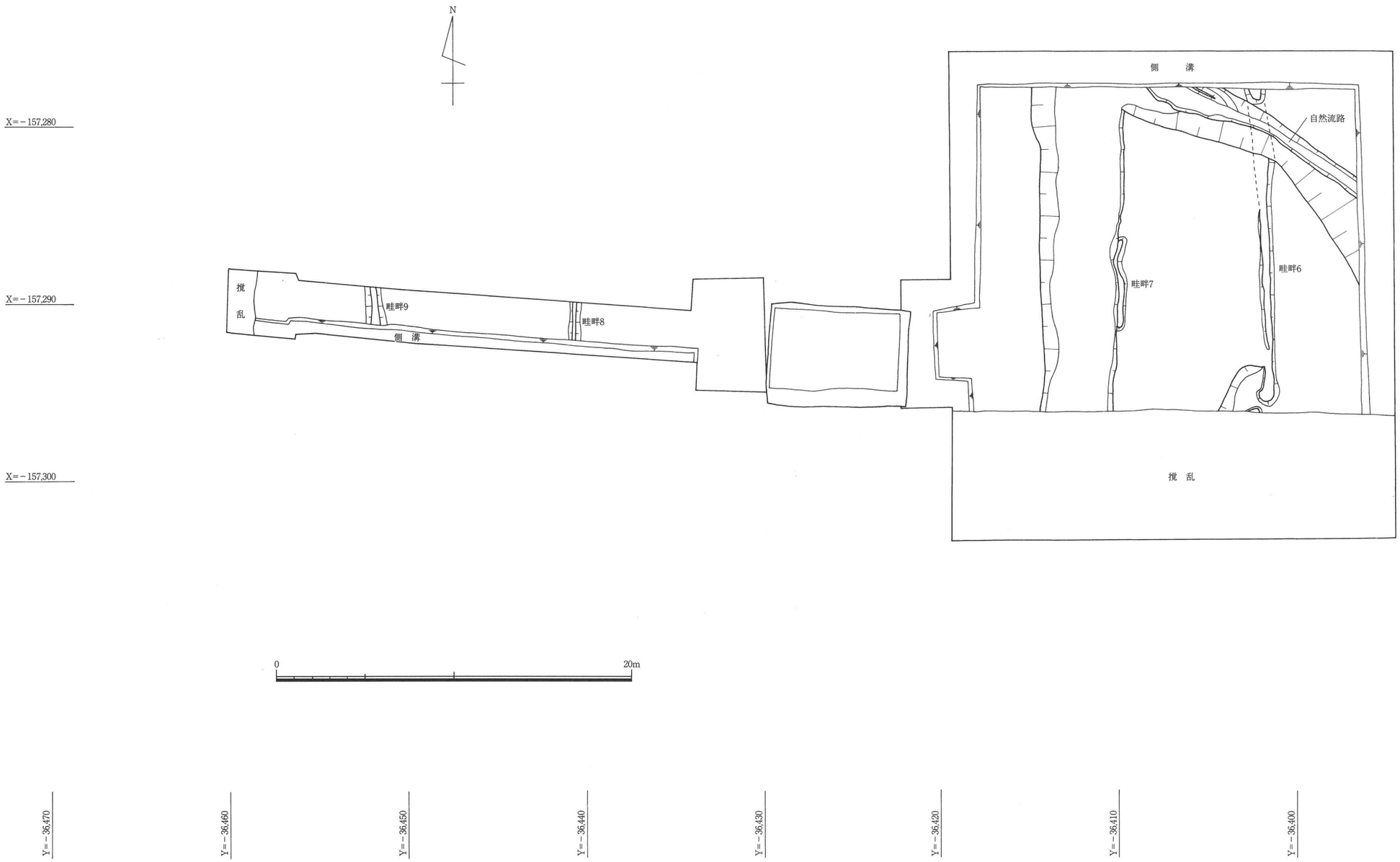
第12図　第２遺構面畦畔断面図（S=1/30）

第２遺構面ベース層（第12層）は厚さ0.2ｍ程度で縄文から中世まで幅広い時期の遺物が出土している。

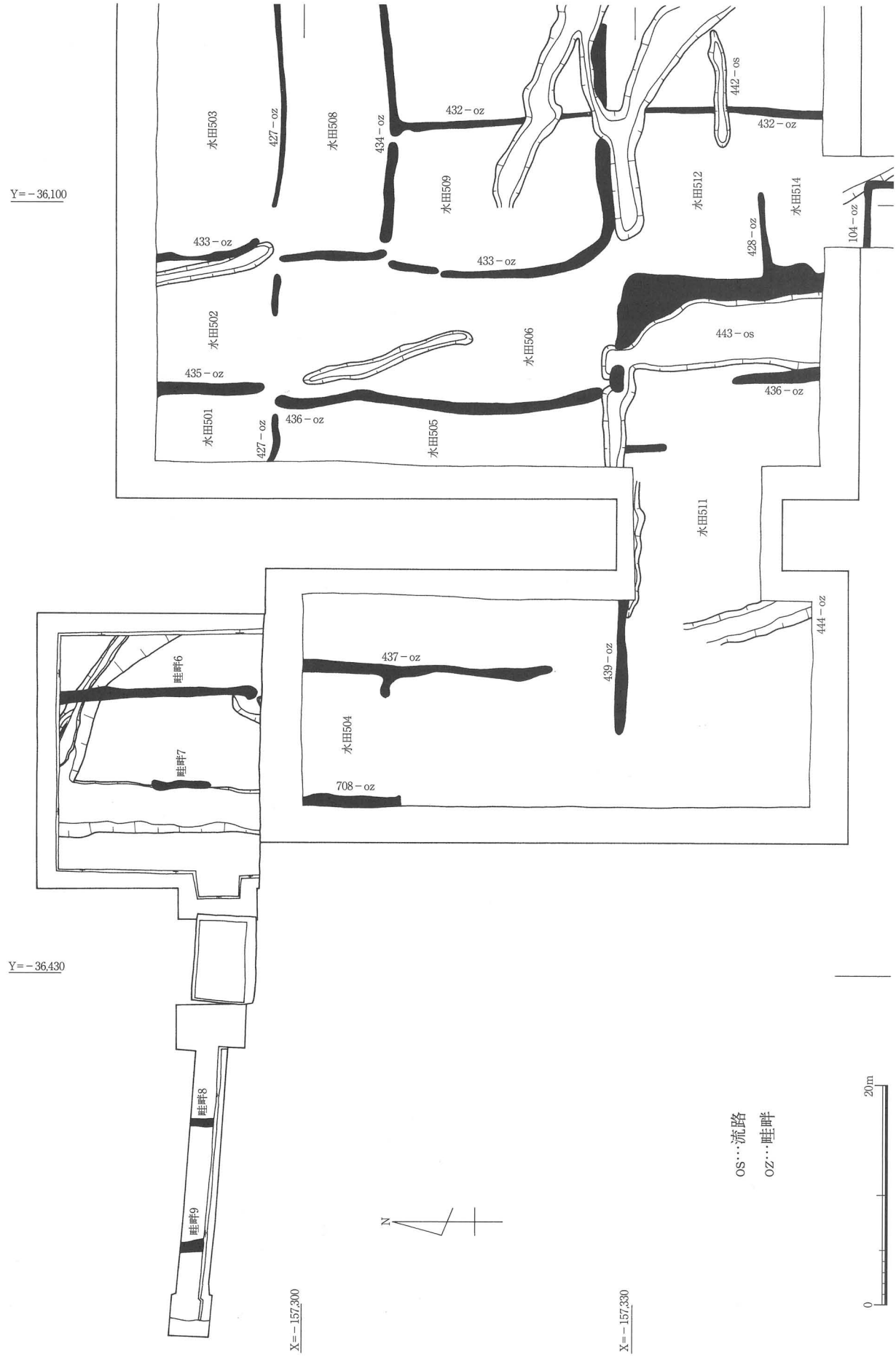
18は縄文時代晩期の長原式土器の口縁部片である。19は、長さ6.6cm幅3.8cmのサヌカイトの石器であり、長辺の片側に使用したような痕跡が残る。20は土師器甕の口縁部、21は土師器坏で内面に放射状の細い暗文が認められる。いずれも奈良時代の所産と考える。22は口縁部外面に強い横ナデが、体部には押圧痕が認められ平安時代前期の坏であろう。24は自然流路の南側の肩付近で遺構面上に貼りついた状態で出土した、和泉型の瓦器椀で、尾上編年Ⅰ型式１段階と思われ11世紀末頃と考える。23も同時期の瓦器椀と考える。これらのうち、最も時期が下るのは初現期の瓦器椀（23・24）であり、第２遺構面は11世紀末ごろの遺構面と考えた。



第13図　第２遺構面出土遺物



第14図　第２遺構面平面図（Ｓ＝1/250）



第15図　第２遺構面と既調査区の平面図（Ｓ＝1/500）

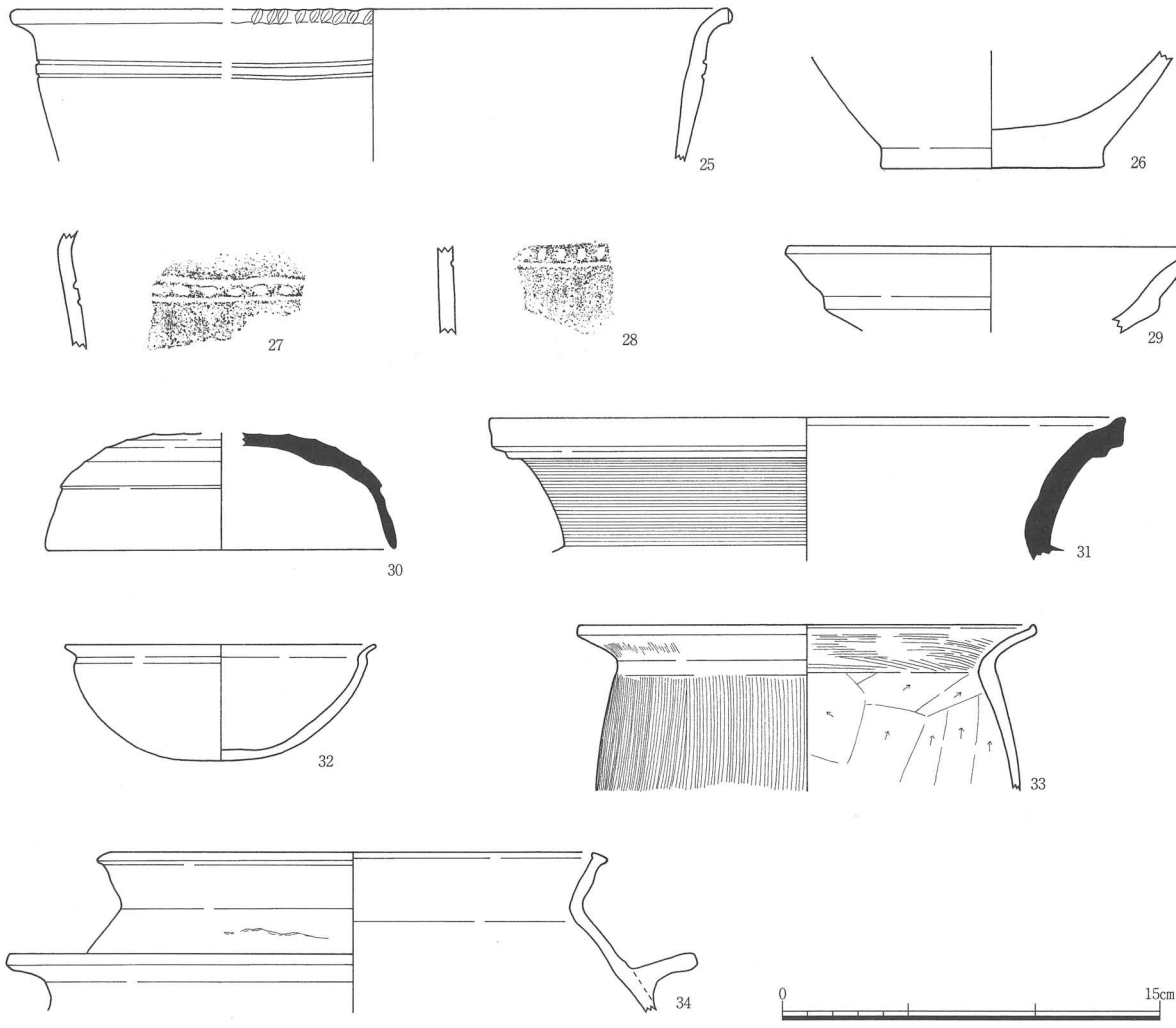
しかし、ここで一つ大きな齟齬が生じる。第２遺構面と対応する協会1995第５遺構面は９世紀前半～10世紀中頃として報告されている。その上層である第４遺構面（協会1995）でも瓦器が出土しておらず、下限を11世紀中頃とされている。第３遺構面（協会1995）において和泉型瓦器椀のⅠ型式とⅡ型式が出土しているため、11世紀中頃から12世紀後半と報告されている。そのため、今回の第２遺構面と協会1995の第５遺構面の時期に違いが生じる結果となった。

ここで第２遺構面から出土した瓦器以外の遺物を見ると、古代の遺物が多く出土していることがわかる。つまり、今回の調査で出土した瓦器を除くと、第２遺構面の上限は10世紀ごろと考えることができる。

そうすると、瓦器を含んだ自然流路が11世紀末ごろに形成され、第２遺構面が廃絶したと考える。そのため、瓦器がベース層中でなく、上面から出土したことも理解できる。

一方協会1995第４遺構面は、当調査区より東へ400ｍ離れた地点よりさらに東側で遺構が確認されている。今回の調査区周辺では協会1995の７区で遺構が検出されているものの、広がりは認められない。そのため、協会1995の第４遺構面は今回の調査区に及んでいないか、既に削平されて検出されなかったと考える。

この結果、今回の調査区で確認された第１遺構面と第２遺構面は、協会1995の第３遺構面と第５遺構面に対応すると考えられ、遺構の連続性や出土遺物が示す年代についても矛盾はなくなる。



第16図　第17層出土遺物

第17層出土遺物（第16図　図版４）

第２遺構面を除去すると、Ｉ区の東半分でやや暗い茶褐色砂礫まじりシルト層（第17層）が0.2mの厚さで堆積し、西半分では第18層（地山直上遺物包含層）が検出される。第17層中には、第２酸化鉄と呼称される黄茶褐色の粒状塊が多く混ざり、特徴的であった。第18層（地山直上遺物包含層）と第17層の上面がＩ区内においてほぼ等しく、レベルの差異はほとんど見当たらない。

25～28はいずれも弥生時代前期から中期前葉にかけての遺物である。25は甕の口縁部で、口縁部直下に２条の平行沈線が施される。27・28も甕の胴部に施された文様で、上下２条の沈線間に刺突が施されており前期に属するものであろう。26は甕か壺の底部である。29は布留期の土師器高坏の坏部分であり、外面に段を有する。30は須恵器の坯蓋で、31は内外面に自然釉が認められる壺の口縁部である。32はほぼ完形の土師器の坏である。33は長胴甕の口縁部であり奈良時代前半におさまると思われ、34は羽釜であり平安京期に属する。このように、層中に含まれる遺物を見ると、その下限は平安時代までにおさまると考える。

地山直上遺物包含層（第18層）出土遺物（第17～20図　図版５・６）

第18層は、全調査区で認められる暗灰褐色砂礫まじり土であり、遺物が多く含まれていた。この層を除去すると地山が検出されるため、調査中は地山直上遺物包含層と呼称した。

なお、Ｉ区東端では、第17層の下に第３～５遺構面が認められたが、各遺構面の時期より後出する遺物が第18層より出土しているため、先に第18層を報告する。

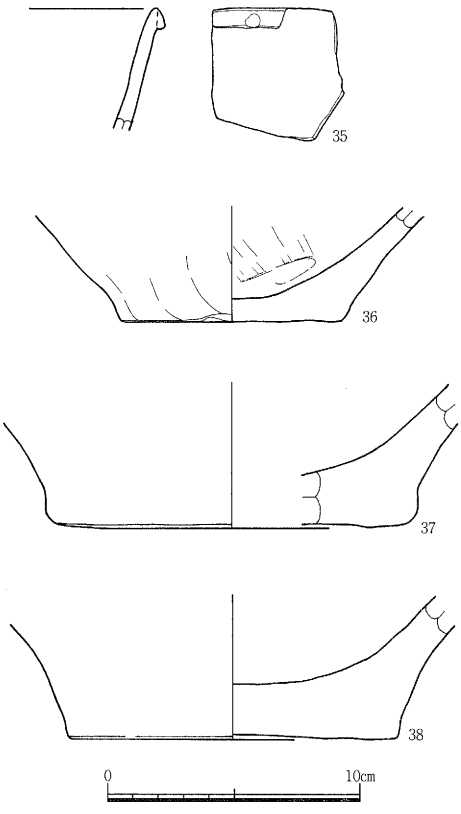
出土遺物は非常に多く、幅広い時期のものが出土した。35は縄文時代晩期に属する長原式土器の口縁部である。36～38はいずれも弥生時代前期から中期にかけての土器の底部であり、わずかに上げ底になっている。

土師器は主に布留式中段階以後のものが認められ、いわゆる布留甕や小型丸底壺、土師器の坏が認められる。51は口縁部を垂直に立ち上げており、二重口縁のようにも観察でき、器壁は非常に薄い。胎土からも在地ではなく他地域から運ばれたものと考える。土師器は甕の口縁部が多く出土したが、甑と思われる口縁部から胴部にかけての破片（57）も出土している。

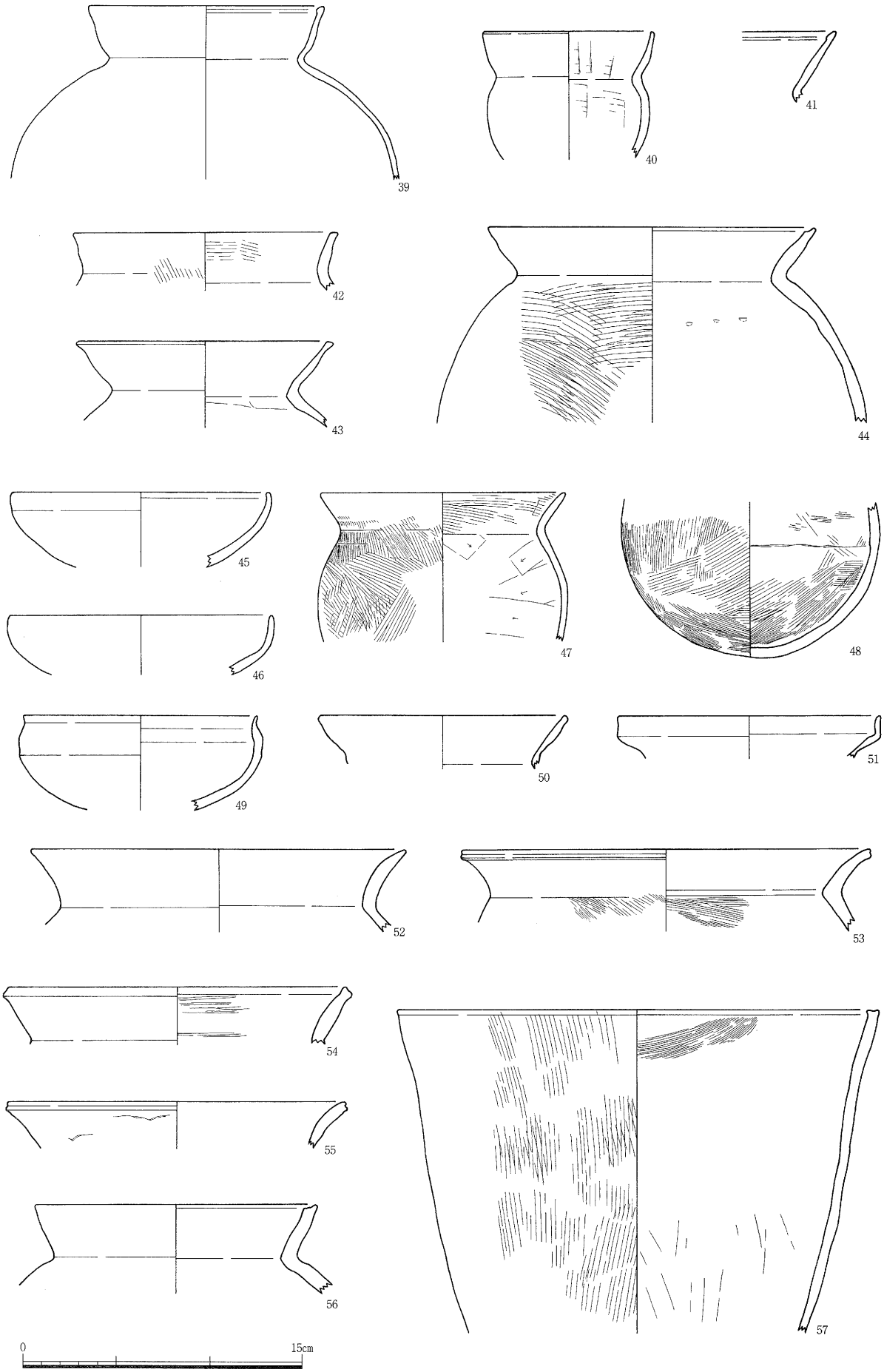
須恵器は坏身と坏蓋が多く出土した。TK23～TK47の時期に属すると考えるが、58のようにTK73～TK216ごろと考えられるものも認められる。高坏の坏部や脚部も多く出土しており、69の有蓋高坏と79～81の無蓋高坏が認められる。

なお、69は坏の形態から下ってもTK216と考える。他に82のように把手が付くコップ形容器も出土している。底部に静止ヘラ削りが施され、体部に櫛描文が施されており、TK73ごろと考える。

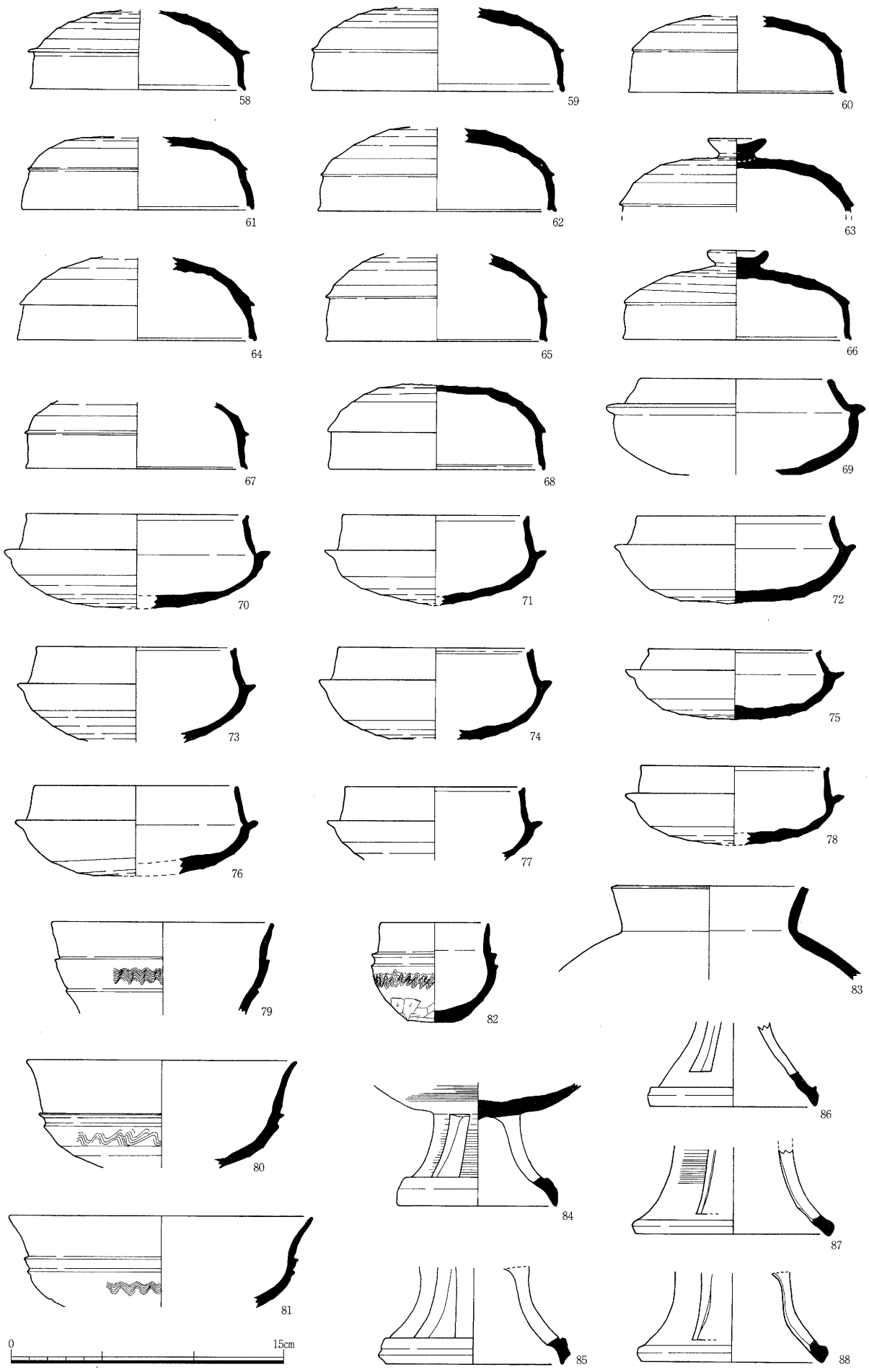
線刻を施している須恵器の破片も複数認められた。89は△状の線刻に横方向の線が入っている。90は非常に細い工具でジグザグ



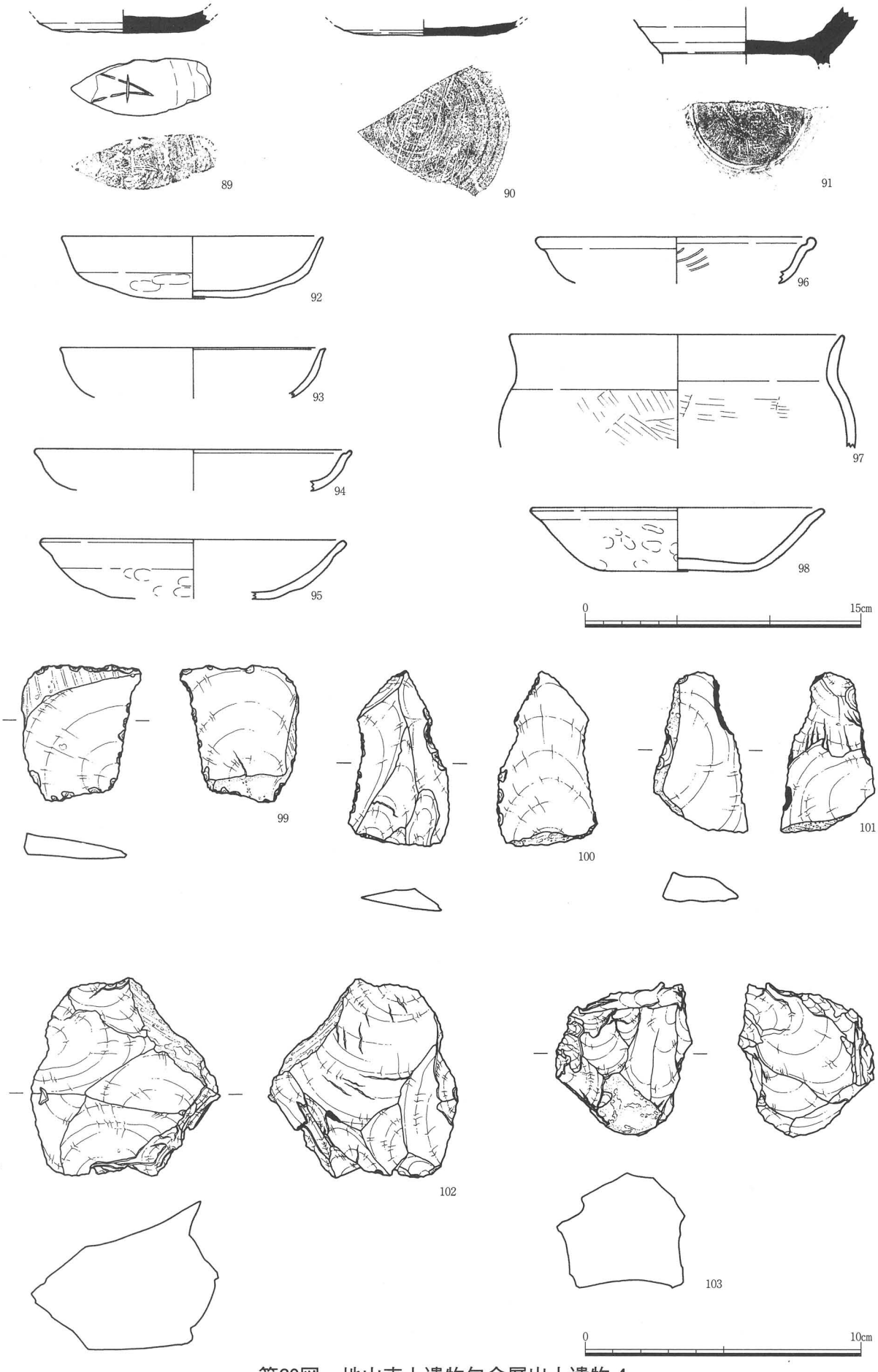
第17図　地山直上遺物包含層出土遺物１



第18図　地山直上遺物包含層出土遺物２



第19図　地山直上遺物包含層出土遺物３



第20図　地山直上遺物包含層出土遺物４

状の線をほぼ天井部全面に施している。これらは遺物の残存状況が悪いため時期が特定できない。91は古代の台付壺の底部部分で、底には円弧状に爪の圧痕が明瞭に残る。これは、高台を接着するときについたものであり、前者二点とは性格を異にするものであろう。

古代の土器は坏や椀と甕の口縁部が出土しており、一部時期が下るものもあるが、概ね奈良時代に属すると考える。以上のように、地山直上遺物包含層からは奈良時代を下限とする土器類が出土している。そして５世紀後半の須恵器が非常に多く認められるため、周辺に当該期の遺構が存在すると考えられる。

土器以外では石器が複数認められた。99は不定形刃器で弥生時代のものであろうか。翼状剥片を作った石核（102）も認められた。特筆すべき遺物として103を挙げることができる。これは佐渡産の赤玉石と呼称される鉄石英の石核である。何らかの製品を作ったのであろう、長軸方向に剥離痕跡が認められる。

大阪府下では、守口市の八雲遺跡で碧玉・赤玉・黄玉・メノウなど様々な種類の石材が出土している。今回出土した石核がほとんど磨耗していないことからも、八雲遺跡と同じく石製品の工房が付近に存在していたものと思われる。

以上のように、第18層出土遺物は第17層と時期的に重なる遺物があるものの、第17層より古相を示すものが多く、層序とも矛盾しない。

第３～６遺構面について

これまで述べてきたように、第２遺構面を除去すると第17層や第18層が認められ、部分的に地山も確認された。一方、Ｉ区東端では第３～５遺構面が確認できた。

今回の調査区において遺構の大部分は地山面で確認されており、層序から全ての遺構を区別することはできなかった。そのため、調査及びその後の遺物整理の成果から、遺構の時期が判明し、対応すると考えられる遺構面が求められた遺構については、各遺構面において述べる。それ以外の遺構については原則として第６遺構面で報告する。

なお、Ⅲ区において、非常に大きく浅い土坑のようなものと、そこからＩ区の溝１へ流入する自然流路が確認された。これらは、非常に浅くまた底面の凹凸も激しかったため、遺構ではなく地山面の窪みに第18層である地山直上遺物包含層が堆積したと考える。

第３遺構面の遺構と遺物

Ｉ区東壁土層ではT.P. 10.5ｍ付近で認められる、やや暗い灰褐色粘性シルト（第24層）をベース層とする。この層から掘削されていた遺構は溝５のみである。

溝５（第21～23図　図版７）

Ｉ区北東部分で確認された北西から南東方向の流路である。幅2.4mで深さ0.3mであった。北岸には約３ｍの間に杭が６本打ち込まれていた。このことから、人工的な流路と考える。北壁土層において断面が約9.6ｍにわたり確認できたことから、Ｉ区北端で東西方向に流路が曲がると考えている。

遺物は土師器甕の口縁部（104・105）、高坏の脚部（107）、須恵器甕の口縁部（106）が出土している。104は頸部から肩にかけて緩やかに移行するため長胴甕の口縁部と考える。105は他の甕より薄手で口縁部の形態などから在地産ではない印象を受ける。107は土師器高坏の脚部で円形の透かしを施している。108は甑の底部と思わ

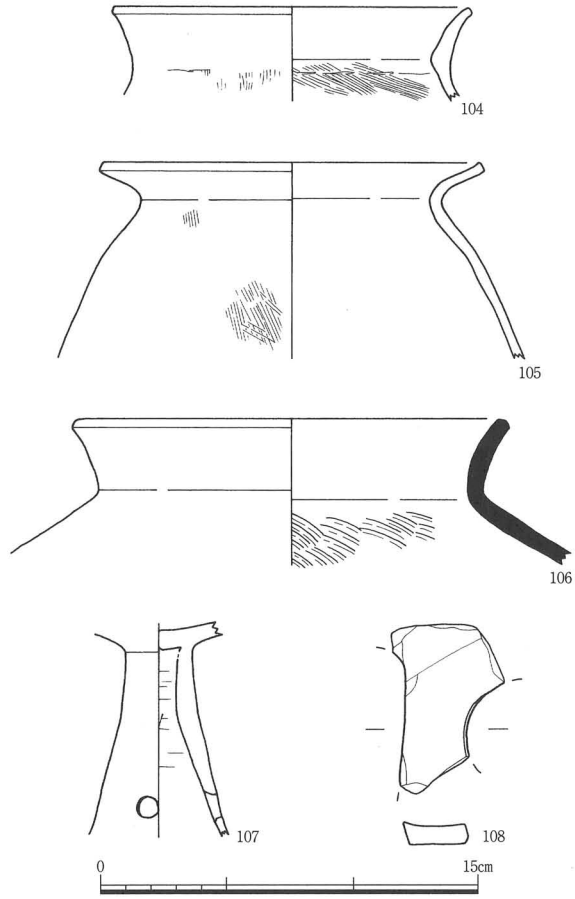
れる。これらは古墳時代中期以降の時期を示すと考える。

溝６（第21図）

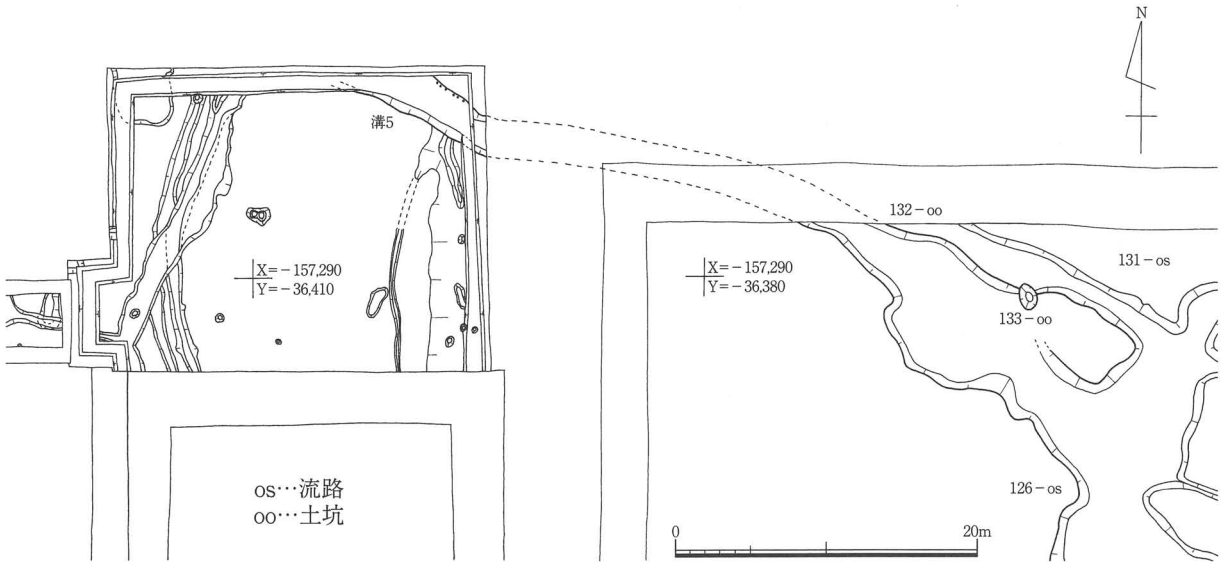
Ｉ区北東隅で溝５と重なり検出された。溝の肩は、溝５に切られ検出されなかったが、埋土が第17層直下で検出されており、第３遺構面として扱った。溝５と異なり溝の底は凹凸があり、溝埋土は３層に分かれるそのため複数の流路が重なりあった可能性もある。

ここで報告した溝５と溝６の検出された位置を東側へ延長すると、協会1995第8遺構面の131－OSとされる溝につながる。131－OS周辺では東西方向や南北方向の溝が確認されており、複数の流路が重なっているように観察される。今回の調査により溝５が人工的な流路と考えられるため、131－OSもその可能性が高い。

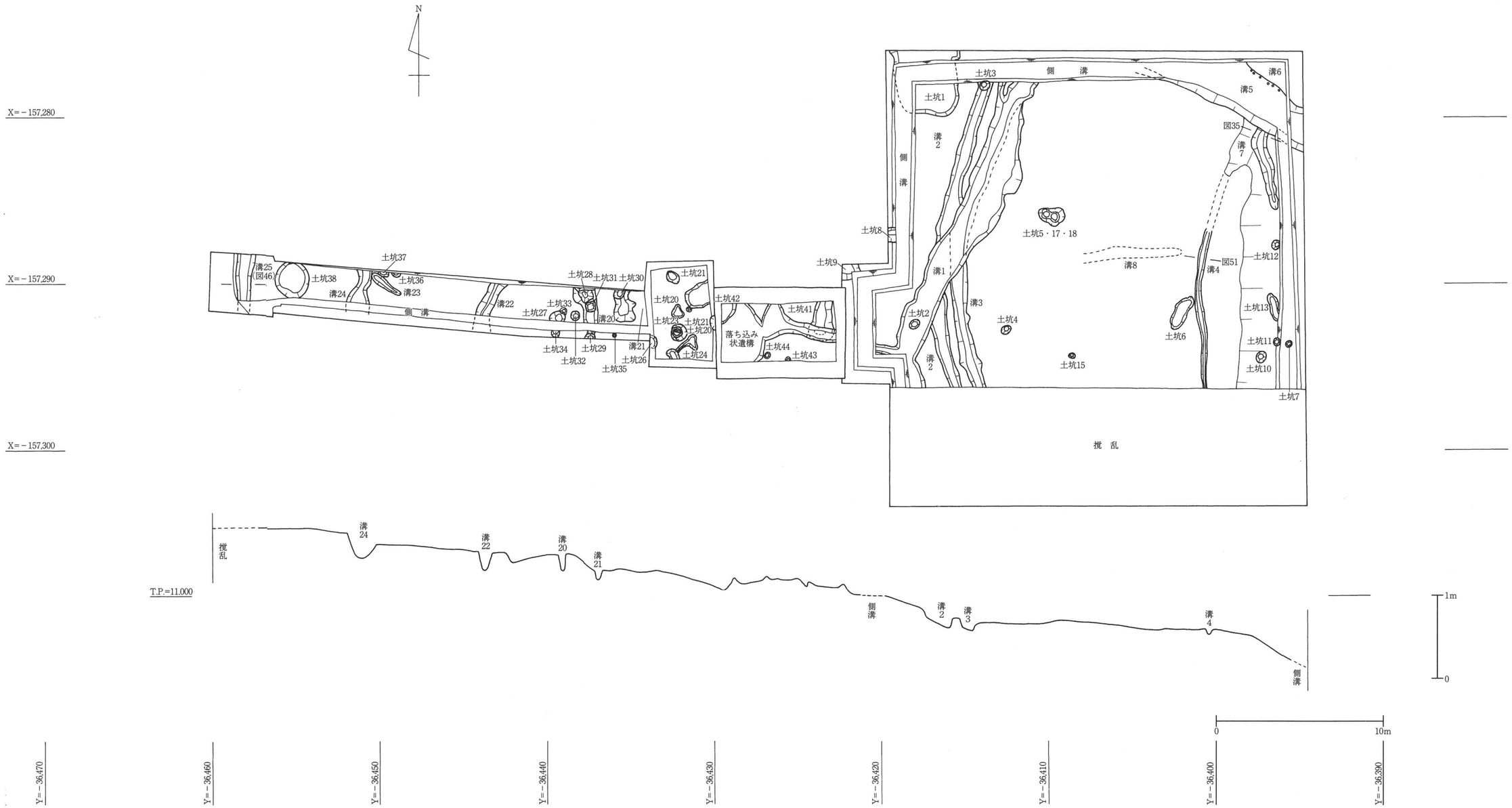
しかし、131－OS付近の様相は明確な遺構と認識しがたい形状を呈している。そこで２つの可能性を考える。一つは自然流路であったが、それに手を加えて人工的なものに作り変えた。もう一つは溝であったが、後に洪水などにより廃絶し、その後は自然流路と同じような状態のまま放置された可能性である。現段階ではどちらとも判断できないが、南北方向の溝２～４が溝と考えられ、それとはやや様相が異なる点は明らかであり、前者の可能性が高いと思われる。



第21図　　溝５出土遺物



第22図　　溝５と既調査の平面図（S＝1/500）



第23図　第３～６遺構面平面図（Ｓ＝1/250）

131-OSは古墳時代中期から後期ごろと報告されており、溝５とも時期的に矛盾しない。

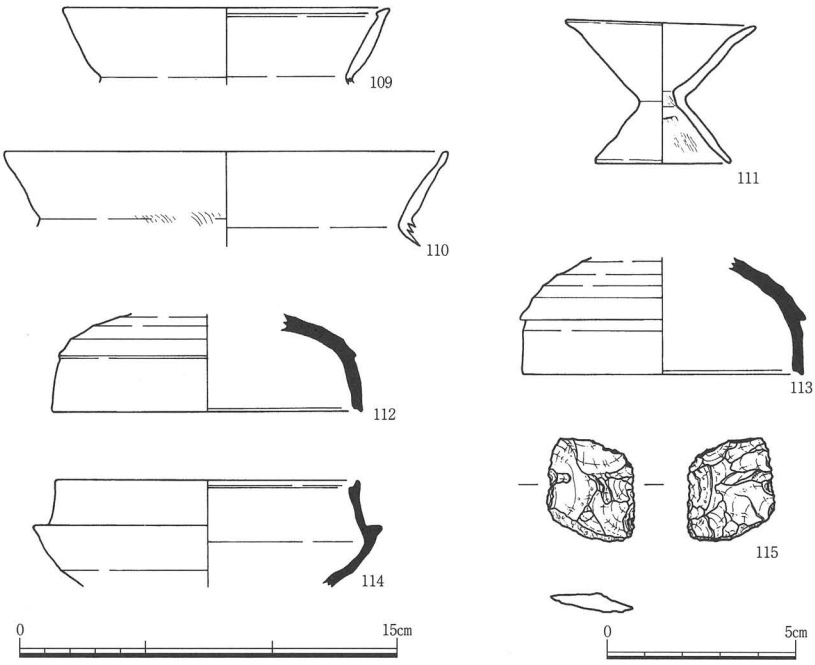
以上のように、溝５が古墳時代中頃の遺構と考えられ、上層である第17層には古墳時代後期の遺物が認められるため、第３遺構面は概ね古墳時代中期から後期までの遺構面と思われる。

さて、地山で検出された遺構で出土遺物などから当該時期近くに求められるものを挙げると、溝１、溝20、土坑１、土坑５、土坑38、土坑41、土坑42、土坑44が挙げられる。

溝１（第24～226図　図版２・７）

溝１はＩ区の西半部を南西から北東方向に向けて流れる流路で、溝２と溝３の流路を覆うように検出された。幅は１～２ｍと差があり、深さは北端で0.25mであった。幅の振幅が大きく北壁を観察すると、溝２と重なっている。このため溝１は、自然流路であると考える。

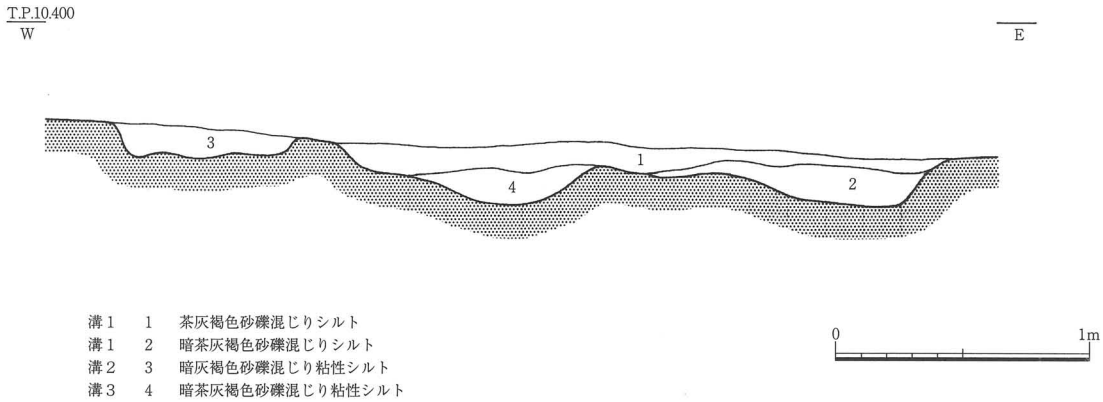
遺物は、各所から出土したが、最も多く出土したのは北端の土器溜りである。しかし、この地点は溝１と溝３が重複し、溝１の形成時に溝３の遺物が撹乱されたようで、溝１と溝３の遺物を土層から区別することはできなかった。



第24図　溝１出土遺物

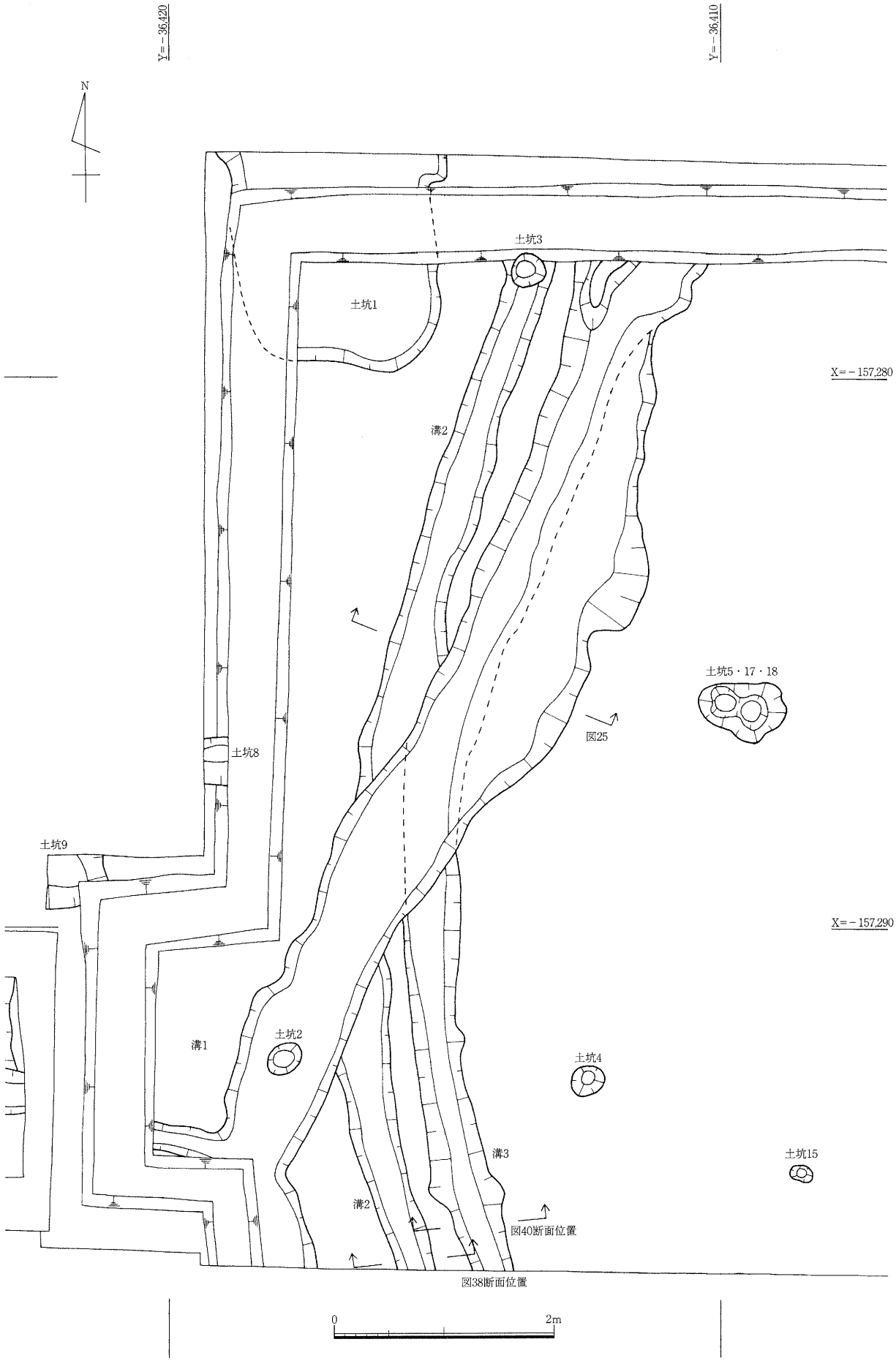
そのため、遺構が重複していない地点から出土した遺物で溝１の時期を考えたい。遺物は、小型高坏（111）、甕の口縁部（109・110）、須恵器の坏蓋や坏身（112～114）、石器（115）がある。111は完形の小型器台であるが非常に不整形で歪みが認められる。須恵器は坏身・坏蓋で、坏蓋の稜は退化している。これら須恵器は概ねTK23～47に該当するものと考える。

以上から、溝１は古墳時代中期ごろに形成されたと考える。なお、115は２cm四方のサヌカイトで、縄文時代の楔形石器と思われる。溝３については、第４遺構面で述べる。



溝１　１　茶灰褐色砂礫混じりシルト
溝１　２　暗茶灰褐色砂礫混じりシルト
溝２　３　暗灰褐色砂礫混じり粘性シルト
溝３　４　暗茶灰褐色砂礫混じり粘性シルト

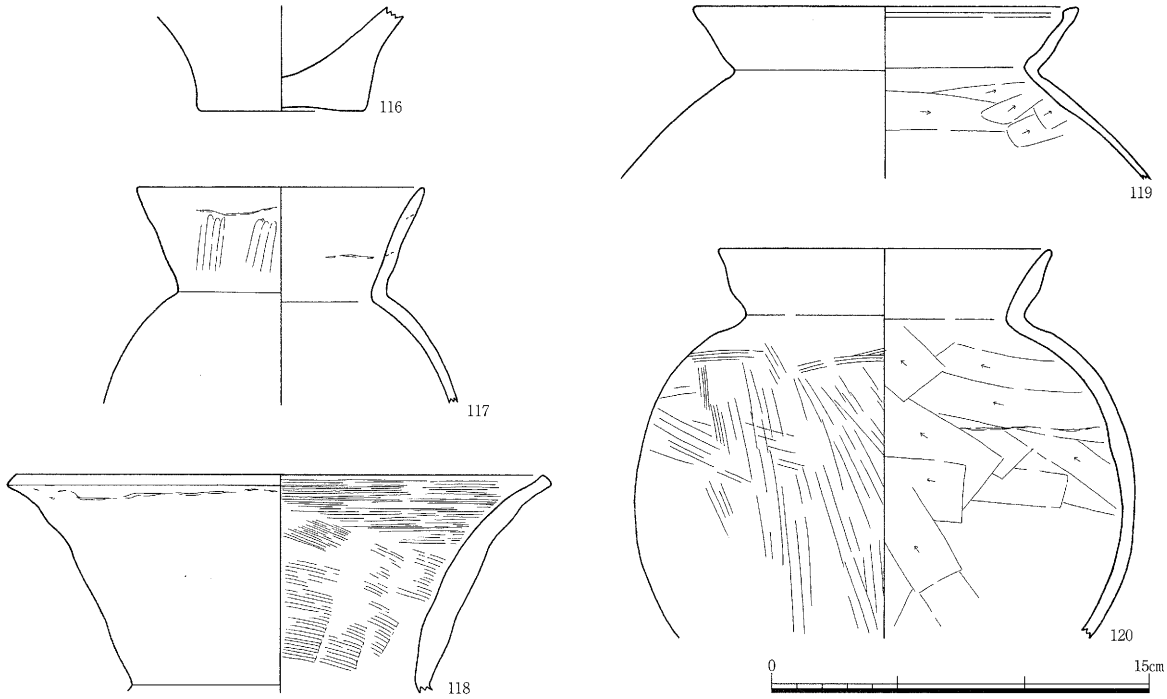
第25図　溝１・２・３断面図（北部分・S＝1/30）



第26図　溝１・２・３平面図（S＝1/50）

溝20（第21・27図　図版７・８）

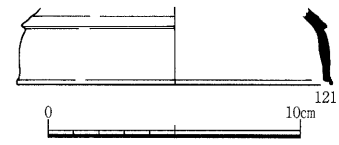
溝20はⅡ区の調査地のやや東側を南北に流れる幅約１ｍ、深さ0.25ｍの溝であり、弥生時代から古墳時代の前期にかけての遺物が出土している。116は弥生時代の土器の底部であり、前期頃の所産と思われる。117は直口壺の口縁部から胴部上半である。庄内期に属するものと思われる。118は壺の口縁部であり、布留期の古段階頃に該当する。119と120は甕の口縁部から胴部にかけて出土した。いずれも布留期の新段階以降と考えられ、特に120は古墳時代中期に下る可能性がある。そのため溝20は第３遺構面に該当すると考える。



第27図　溝20出土遺物

土坑１（図21・28図）

土坑１はＩ区北西部で検出された長方形に近い土坑で、東西1.8m、南北2m以上であり、調査区外に続いている。深さは0.4ｍである。埋土は暗灰褐色砂礫まじり土で、地山直上遺物包含層（第18層）とほぼ同じ土である。遺物は非常に少なく、唯一図化できたのは須恵器の坏蓋（121）でTK23と考える。



第28図　土坑１出土遺物

土坑５（第29・30図　図版１・９）

溝１の東側にあり、長軸1.6ｍ、短軸１ｍの不整形なプランで検出された。埋土中層から完形の甕や人頭大の石などが検出された。そのため、遺物の検出及び図化を行い、取り上げ後に断割を行った。その結果、土坑５は土坑17と土坑18の上に重複して存在することが判明した。

当初、土坑５と土坑17を同一遺構と考え、これらの遺物は土坑17が埋没する際に混入したものと考えた。しかし、土層を観察すると土坑17の西の肩は土坑5に壊されていることがわかる。さらに、土坑17の埋土（第29図土層３）の東側は西側の肩より高い位置にあるため、土坑17がほぼ埋没した段階で、土坑５が掘削されたと考えた。

つまり、土坑５は土坑17・18と異なった目的で掘削されたことになる。そして土坑５を埋める際に土師器の坏

や完形の甕、人頭大の石などが埋土に含まれたと考える。

以上より、土坑５の地点には遺構が３基重複していると考えた。土坑17と18については、出土遺物から後述する第４遺構面で述べる。

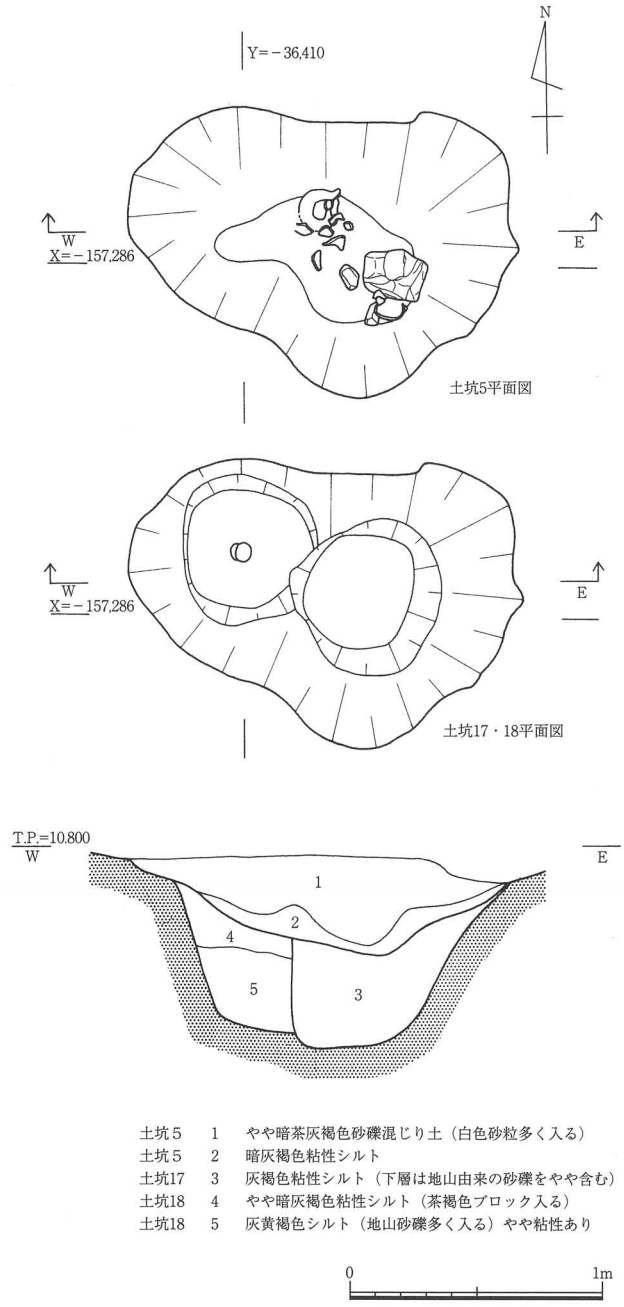
122は完形の甕で、横になった状態で出土した。土師器坏（123）や高坏（124）、須恵器の坏身（125）はいずれも人頭大の石直下で出土し、土師器坏は完形品を丁度縦に２分割したような状態である。

これらの遺物は埋土から接合できる破片が出土しなかった。そのため、他の地点で破砕された遺物が持ち運ばれ、完形の甕や人頭大の石と共に土坑５に埋められた可能性も考えられる。

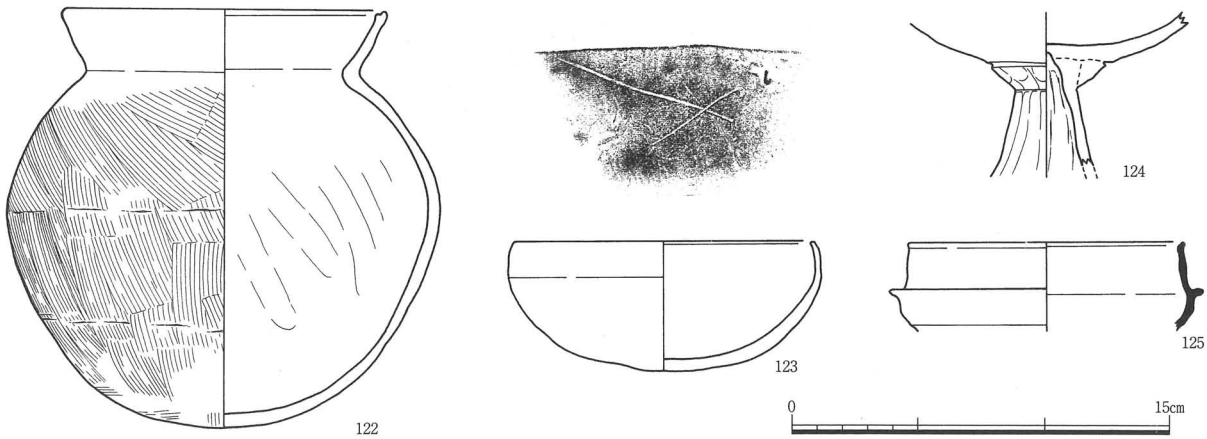
さらに、これらの遺物がほとんど磨耗していないこと、埋土の中間に位置し同一レベルで出土していることから、意図的な行為に伴った結果、このような出土状況を呈したと考える。

そのため、土坑５を埋める際に何らかの行為が行われたと想定する。

出土遺物がおおむね古墳時代中期ごろを示しているため、土坑５はその時期に廃絶したと考える。



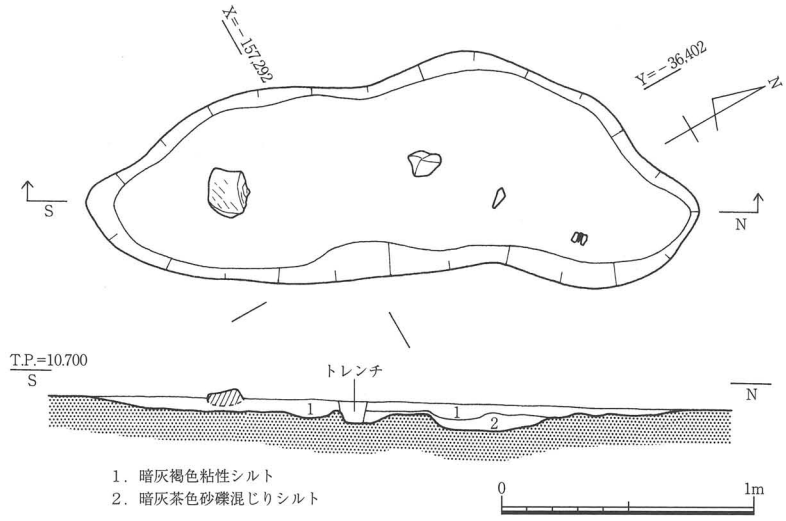
第29図　土坑５・17・18実測図（S＝1/30）



第30図　土坑５出土遺物

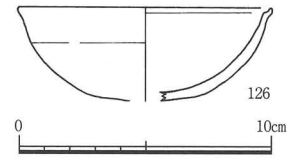
土坑６（第31・32図）

Ｉ区で確認された長軸2.4m短軸0.9mの南北に長い不整形な土坑である。非常に浅く、深さは0.1ｍにも満たない状況であった。当初、遺構内南側より平らな石が出土したため、頭石と考え土坑墓の可能性も考慮した。



第31図　土坑６実測図（S＝1/30）

しかし、土坑底の様相を観察すると非常に凹凸があり、頭石と考える石も土坑底に接しておらず、間に土が堆積していた。検出した平面形も不整形であり、木棺の痕跡もなく、単なる土坑として報告することにした。

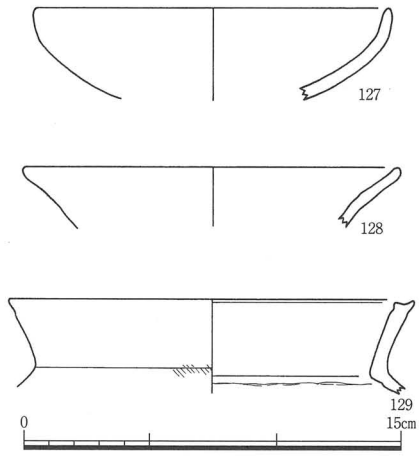


第32図　土坑６出土遺物

遺物は土器の小片であった。それらを観察すると、いずれも土師器片で、唯一器形を想定できるものに土師器坏の口縁部（126）がある。須恵器片が認められないことから、少なくとも古墳時代中期までには、埋没したものと考える。

土坑38（第21・33図）

径２ｍ・深さ0.2ｍの浅い土坑でⅡ区西端で検出された。検出時は、地山の窪みに堆積した包含層と考えていたが、その平面形が円に近く、底も平たい状況であったため、遺構と判断している。土坑の性格を示すような資料は得られていない。



第33図　土坑38出土遺物

出土遺物は土師器甕の口縁部と高坏の坏部と思われる破片等が出土している。須恵器は出土しておらず、出土した土師器から古墳時代中期の遺構と考える。

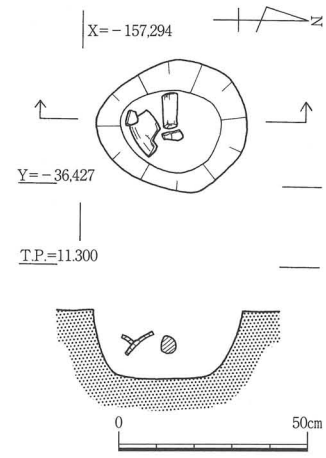
土坑44（第34図　図版１）

Ⅲ区の南端で検出された径0.4ｍのピットであり、土坑に土師器高坏脚部と甕の体部片が認められた。いずれも古墳時代中期頃の所産と思われる。その形状から土坑43と一連のものと考える。なお土坑43から出土した遺物はない。

これまで、古墳時代中期である第３遺構面の遺構について述べた。

検出された遺構のうち、協会1995の調査で検出された遺構と明確に同一であると考えられるものは認められなかった。

ただし、図面による位置関係から、今回検出した溝５・溝６と協会1995で検出されている流路131－OSが一連の流路であり、なおかつ人工的なものである可能性が高いことを指摘できた。



第34図　土坑44実測図

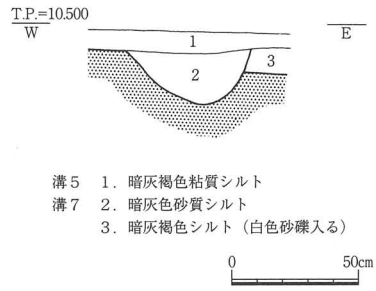
第４遺構面の遺構と遺物

第３遺構面と同じく、Ｉ区東端でのみ認められる。ベース層は暗灰褐色粘性シルト（第27層）である。検出レベルはT.P. 10.3～10.4mであり、層の厚さは約15cm程度であった。

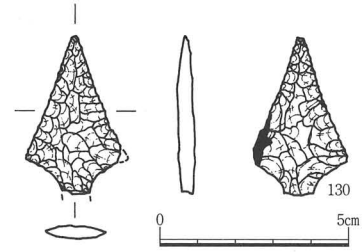
溝７（第21・35・36図　図版14）

Ｉ区東で第４遺構面から掘削された、南北方向の溝である。北端は後世の溝５により切られている。

遺物は弥生時代の石鏃（第36図）と、図化出来なかったが弥生土器の破片が一片出土している。



第35図　溝７断面図（S=1/30）



第36図　溝７出土遺物

土坑13

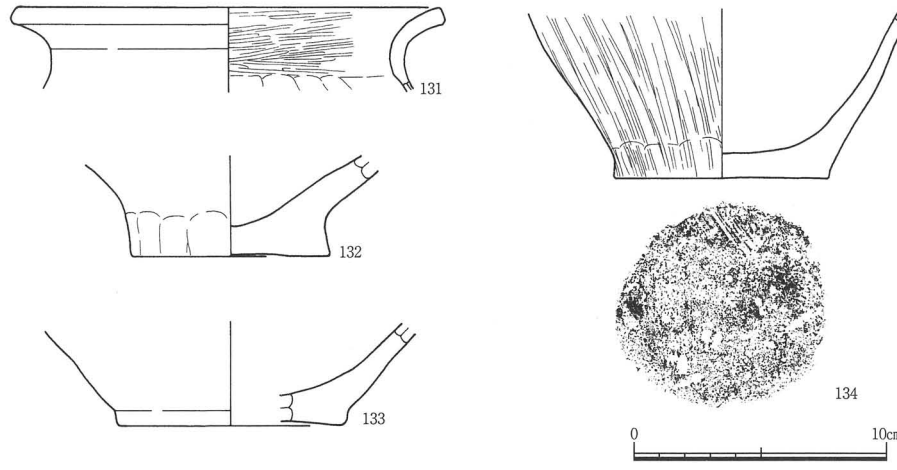
Ｉ区南東で確認された土坑で、長軸1.7ｍ短軸0.6ｍ深さ0.2mの楕円状の土坑であり、東端の側溝に一部かかっていた。遺物は出土しなかったが、第４遺構面で検出されたためここで報告した。

第４遺構面出土遺物（第37図）

第４遺構面からは、弥生時代の遺物が出土している。そのほとんどが、弥生時代前期の壺あるいは甕の底部であり、甕の口縁部（131）が弥生中期に下る可能性がある。このように、第４遺構面は弥生後期までに既に形成されていたと考えられる。

以上の様相と上層の第３遺構面が古墳時代中期までに形成されていることから、第４遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面と考えられる。

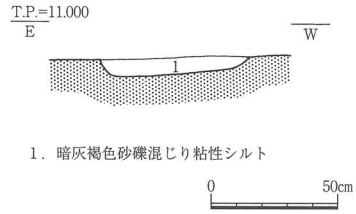
その結果、地山面で検出された遺構のうち、出土した遺物から当該時期の遺構と考えられるのは、溝２、溝３、溝25、土坑18、土坑23、土坑28である。



第37図　第４遺構面出土遺物

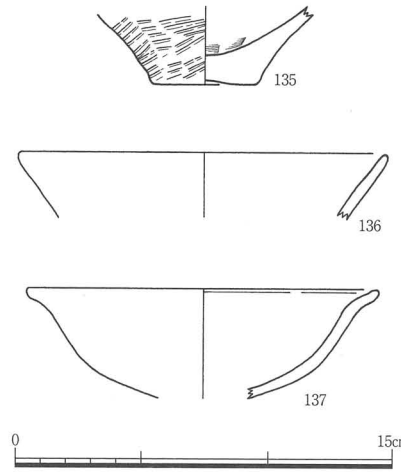
溝２（第21・38・39図　図版２・10）

後述する溝３とほぼ平行して検出された南北方向の溝であり、長さ約18ｍ、幅0.8～1.0ｍ、深さ0.1ｍを測る。やや西側に膨らみ円弧状をなして、北へ流れていたものと考える。



第38図　溝２断面図（S＝1/30）

出土遺物は少なく、溝の底から弥生Ⅴ様式の土器の底部（135）、庄内期の古段階と思われる高坏の口縁部（137）や甕の口縁部（136）などが出土した。そのため、溝２は庄内古段階頃の遺構と考える。

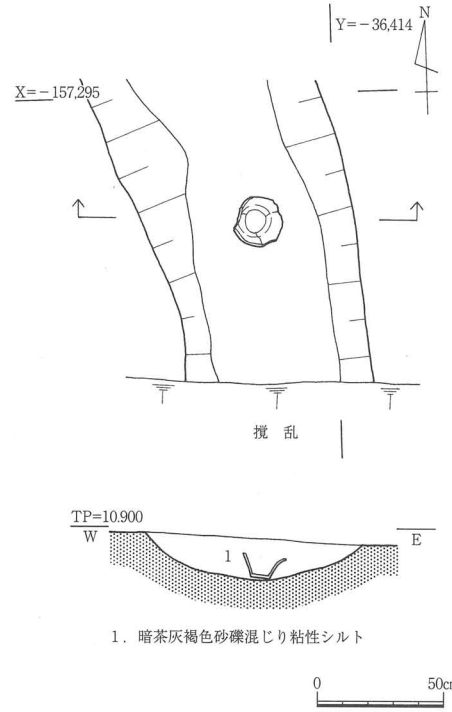


第39図　溝２出土遺物

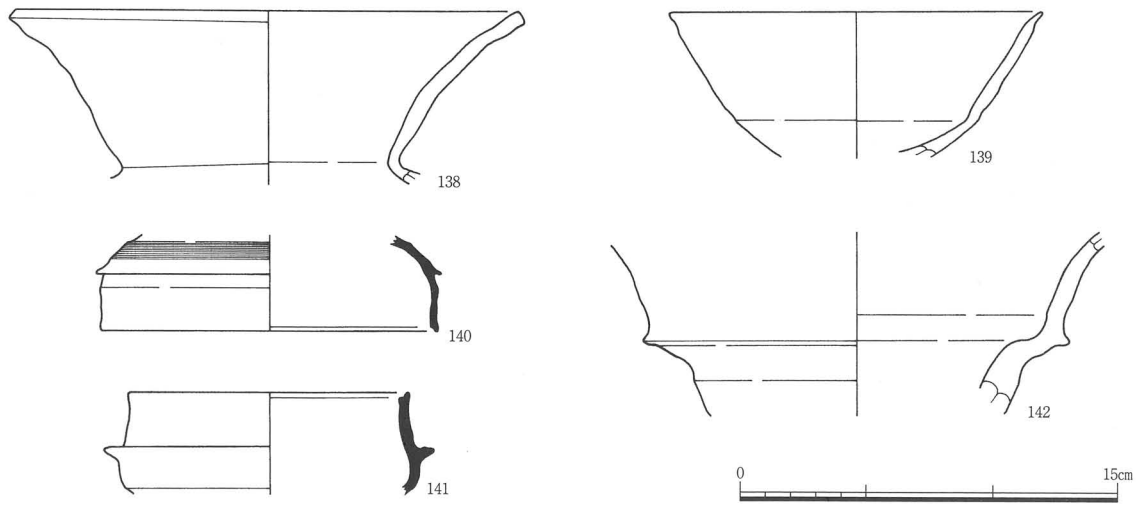
溝３（第21・40・41図　図版２・10）

溝２と平行して検出された長さ約18m、幅約１ｍ、深さ0.15ｍの溝である。形状も西へやや膨らむ。遺物量は北端で土器溜りが検出されたので多いが、溝１と重複しており、溝１の遺物と混ざって出土している。そこで、北端土器溜りから出土した遺物とそれ以外の遺物を分けて述べる。

土器溜り以外から出土した遺物を述べる。138は壺の口縁部で内外面とも磨耗が激しく調整を観察できない。139は高坏の坏部、142は二重口縁壺の口縁部である。いずれも溝３南側底から出土しており、庄内期後半から布留期古段階に該当する。140と141は須恵器坏で、遺構埋土上面から出土しており、地山直上遺物包含層に含まれていた可能性が高い。前者がTK208に、後者がTK23に該当するものと考える。



第40図　溝3遺物出土状況図（S＝1/30）



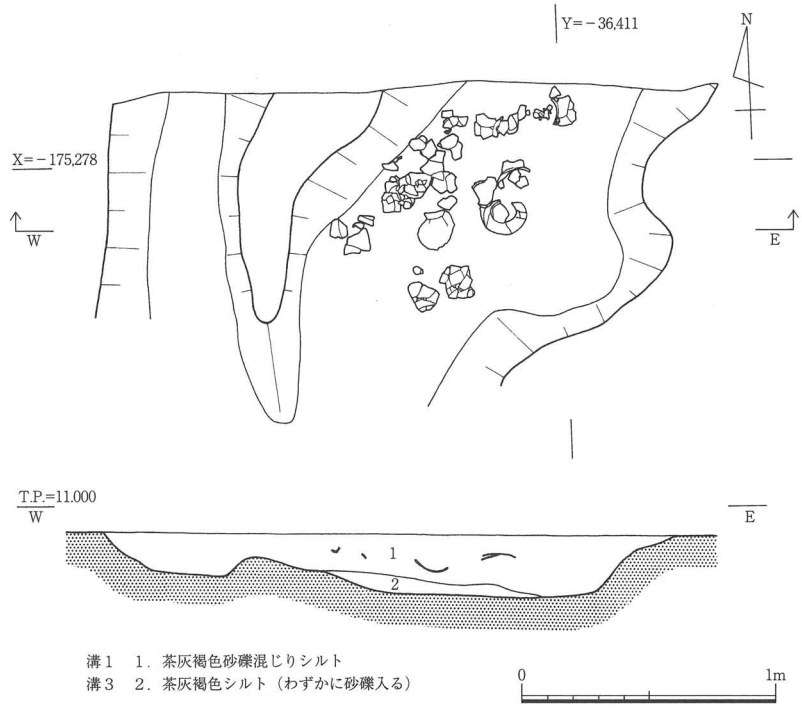
第41図　溝３出土遺物（土器溜り除く）

溝３北端土器溜りの出土遺物（第42～44図　図版２・11・12）

145は小型の丸底壺である。頸部で段を有し口縁部径は体部径より広がる。横方向のミガキが密に外面に施され煤が付着しており、内面の底には炭化物がわずかに付着している。

147は直口壺で、体部は内外面ともにハケを施す。内面上部には横方向のハケが施されるが、幅約１cmにわたりハケが観察されない箇所がある。おそらく、土器製作において壺の上部と下部を接合した際の接合部分と考えられる。

152は布留期の甕の口縁部である。外面には体部から口縁部にかけて煤が付着している。図版11 - eは直口壺の口縁部で磨耗により調整は確認できない。以上３点は、いずれも布留期の古段階に位置づけられるものと考える。



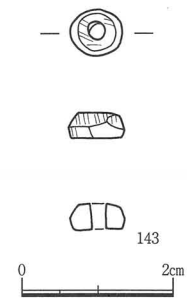
第42図　溝３土器溜り実測図（S=1/30）

148・149は口縁部から体部にかけて出土した甕で、外面に煤の付着がある。

布留期の新段階に該当すると思われる。146・150・153～156は甕や高坏、壺の口縁部などであり、布留期から古墳時代中期にかけての遺物と思われる。157は須恵器の坏蓋でTK23段階のものであろう。土器溜りの土を洗浄したところ滑石製の臼玉(143)が出土した。

北端の土器溜りからは弥生時代から古墳時代中期にかけての遺物が出土している。

一方、土器溜り以外から出土した遺物は、数が少ないもののいずれも布留期の古段階に位置づけられる。そのため、現状では溝３の時期を布留期の古段階と考えたい。

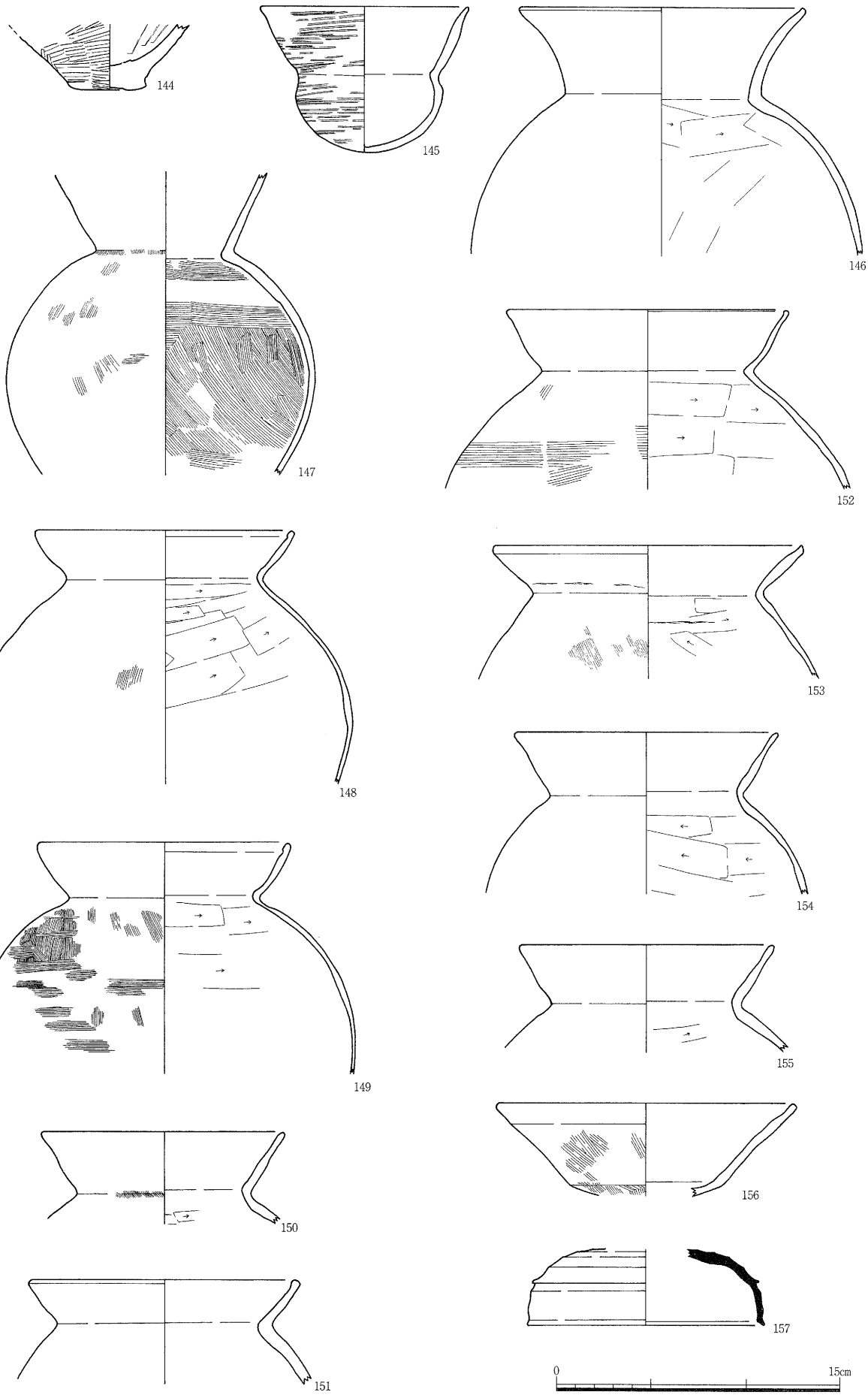


第43図　溝３出土遺物

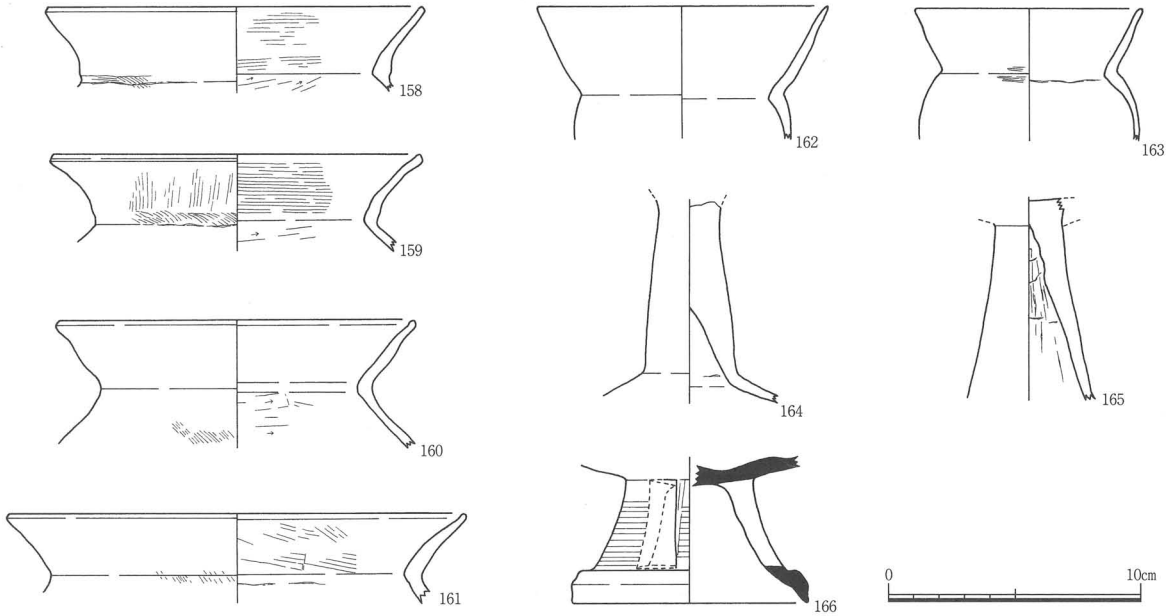
溝１及び溝３からの出土遺物（第45図　図版13）

ここでは断割の掘削中に出土し、溝１と溝３のどちらに帰属するか不明となった遺物を報告する。なお、断割を行った場所は複数あるが、報告する遺物は北端土器溜りに最も近く、溝２に及んでいない断割から出土したものである。そのため、溝２の遺物が混入している可能性はない。

158～161は庄内期中～新段階の甕の口縁部である。162・163は小型丸底壺、164・165は高坏脚部であり、いずれも布留期の古段階に該当する。166は須恵器高坏の脚部でTK23以降の時期になる。遺物の多くは溝３に帰属すると思われる。その場合、溝３に庄内期の遺物が一定量認められ、時期が庄内期新段階まで上がる可能性がある。そのため、出土遺物から時期差が存在する可能性を指摘できる一方、平行して掘削されており、時期差が存在しても、それは短期間の差と考えることもできる。



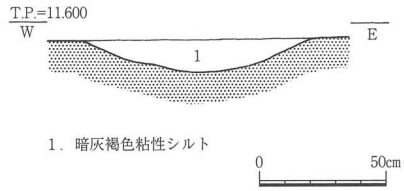
第44図　溝３土器溜り出土遺物



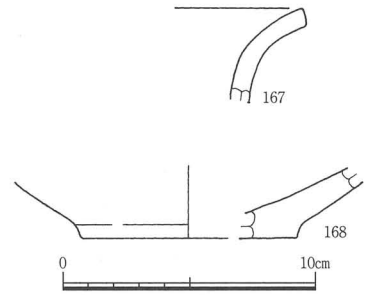
第45図　溝１・溝３出土遺物

溝25（第21･46・47図）

溝25は最も大水川に近いところで検出された、幅約１ｍ、深さ約0.15ｍの南北方向の溝である。遺物は庄内期の甕が出土しており、167は甕の口縁部、168は底部で胎土やその焼成の色調から同一固体と考える。



第46図　溝25断面図（S=1/30）



第47図　溝25出土遺物

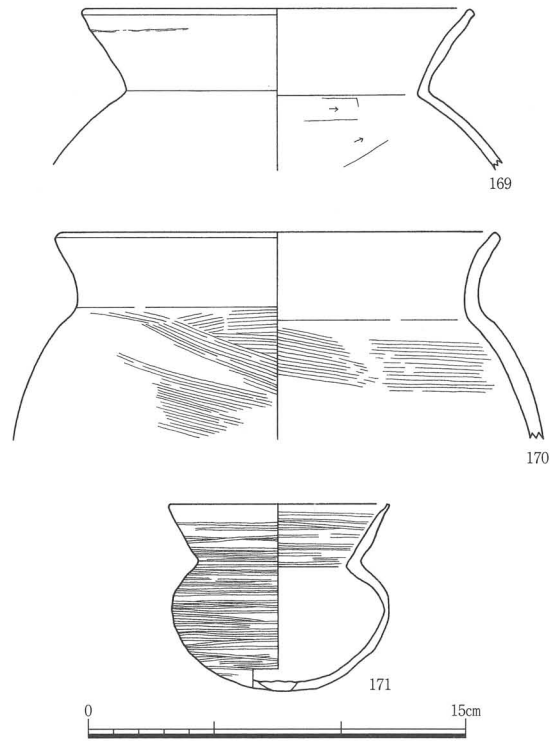
土坑17･18（第21･29・48図　図版13）

第３遺構面で述べた土坑５の下層で認められた土坑であり、土坑18は土坑17に切られている。検出された各遺構は、土坑17が径0.7ｍで深さ約0.7m、土坑18が径0.6ｍで深さ約0.6ｍを測り、ほぼ同じ大きさで平面プランもよく類似した土坑であり、同一目的で掘削されたと思われる。

調査した状況から、井戸に使用されていたと思われる。

土坑18の底から底部が穿孔された小型丸底壺の完形品（171）と庄内期の甕の口縁部が出土しており、小型丸底壺は廃絶に伴った祭祀に使用されたものであろう。

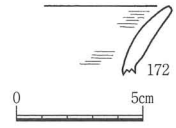
そのため、土坑18の廃絶時期を布留期の古段階と考える。また、土坑17は各遺構の切りあい関係から、古墳時代前期に掘削され廃絶したものと考える。



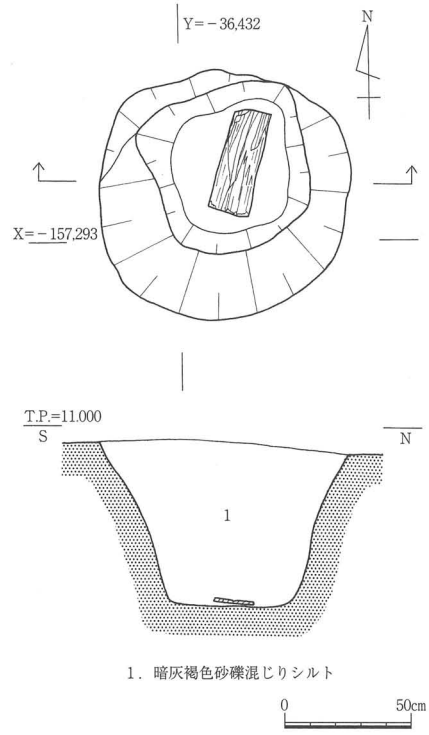
第48図　土坑17・18出土遺物

土坑23（第21・49・50図　図版３）

Ⅱ区の東で検出された径１ｍ深さ0.7ｍの土坑である。出土遺物は弥生時代後半の甕の口縁部が１片（172）と長さ0.4m幅0.15ｍ厚さ約３cmの木の板である。樹種はマツ属複維管束亜属（二葉マツ類）であった。この遺構が井戸であればその木枠の可能性が高い。



第49図　出土遺物



第50図　土坑23実測図（S=1/30）

土坑28（第55図　図版３）

Ⅱ区の溝20を掘削すると、矢板に断ち切られた状態で検出された。そのため完掘できなかった。平面は方形を呈しており一辺約0.9m、深さ0.5ｍであった。土坑23とほぼ同規模であるが、平面プランが異なるため性格が同一か判断しがたい。遺物は埋土内より、布留期の甕の胴部が出土している。

以上、第４遺構面で検出された遺構と遺物を述べた。当遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期までの遺構面であると考えられる。

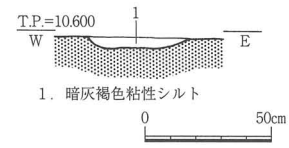
これらの遺構で、協会1995で検出された遺構と同一と考えられるものがある。その遺構は溝２と溝３であり、各々協会1995の第９遺構面で検出された710－OS、278－OSと形状や検出された位置から同一と考えられる。

協会1995の第９遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期とされ、ここで報告した第４遺構面の時期とも大きな齟齬をきたさない。これらのことより、第４遺構面と協会1995の第９遺構面は対応するものと考える。

溝４（第21・54図）

この遺構はⅠ区東で検出された長さ9.5ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍの南北方向の溝である。北端は、溝５の直前で地山が下る東方向に流れ込んで消えている。南端は調査区外へ直線的に続くと思われる。

遺構の残りが悪かったため、検出当初は遺構と認識できず、単なる自然流路であると判断していた。



第51図　溝４断面図（S=1/30）

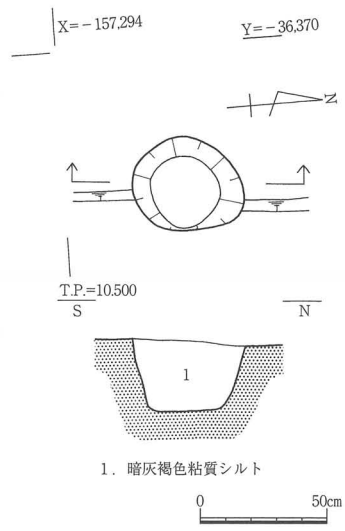
しかし、整理段階で検出された形状や位置から、協会1995の第９遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）で検出された溝（遺構名261－OS）と同一である可能性が高いことが判明した。そのため、遺構と判断し報告した。遺物は出土しなかったが、遺構の南側の続きが弥生時代後期から古墳時代前期とされる遺構面で検出されていることから、当遺構も該期と考えられる。そのため、第４遺構面の遺構として判断した。

第５遺構面の遺構と遺物（第21・52・53図）

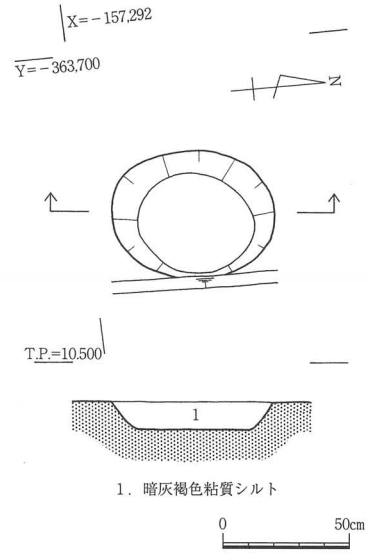
第５遺構面は、T.P. 10.2mで確認される遺構面で、ベース層が特徴的な緑灰色粘土（協会1995では「青ベルト層」と呼称）であるため、認識は容易であった。

第５遺構面の遺構などから遺物は出土せず、直接的に時期を示す資料を今回の調査では得られなかった。

隣接する協会1995の調査では、この遺構面を縄文時代晩期末～弥生時代前期頃とされており、第５遺構面も当該時期と考えられる。遺構は土坑が３基（土坑11・土坑12・土坑14）掘削されているのを確認した。



第52図 土坑11実測図（S=1/30）



第53図 土坑12実測図（S=1/30）

なお、地山面で検出した遺構で当遺構面に比定できるものは認められなかった。

第６遺構面の遺構と遺物

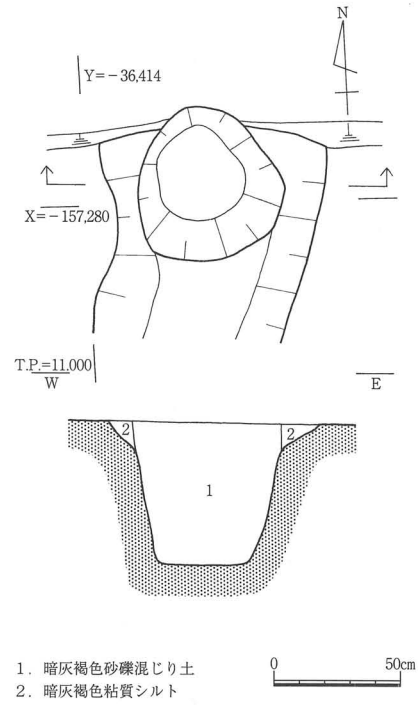
上述してきたように、今回の遺構の多くが地山面での検出となり、出土遺物などから時期が判明したものについては述べてきた。そのため、以下ではそれら以外の遺構のうち主なものについて述べる。

土坑３（第21・54図）

Ⅰ区の溝３の北端で検出された、径0.6ｍの土坑である。古墳時代前期の溝３の埋没後に掘削されており、古墳時代中期以降と考える。

土坑27・土坑30・土坑31（第21・55図　図版３）

Ⅱ区で検出された土坑であり、土坑30は溝21に、土坑31は溝20にそれぞれ切られている。検出時のプランは不整形であったが、各土坑を完掘すると下場は一辺0.5ｍの方形となり、各土坑の底のレベルもT.P. 10.8mで揃う。それらの中心間は約2.5ｍ間隔であり、直線に並ぶ。以上の様相と、他に方形となるような土坑が確認されないことから、一連の関係性のある遺構と考える。



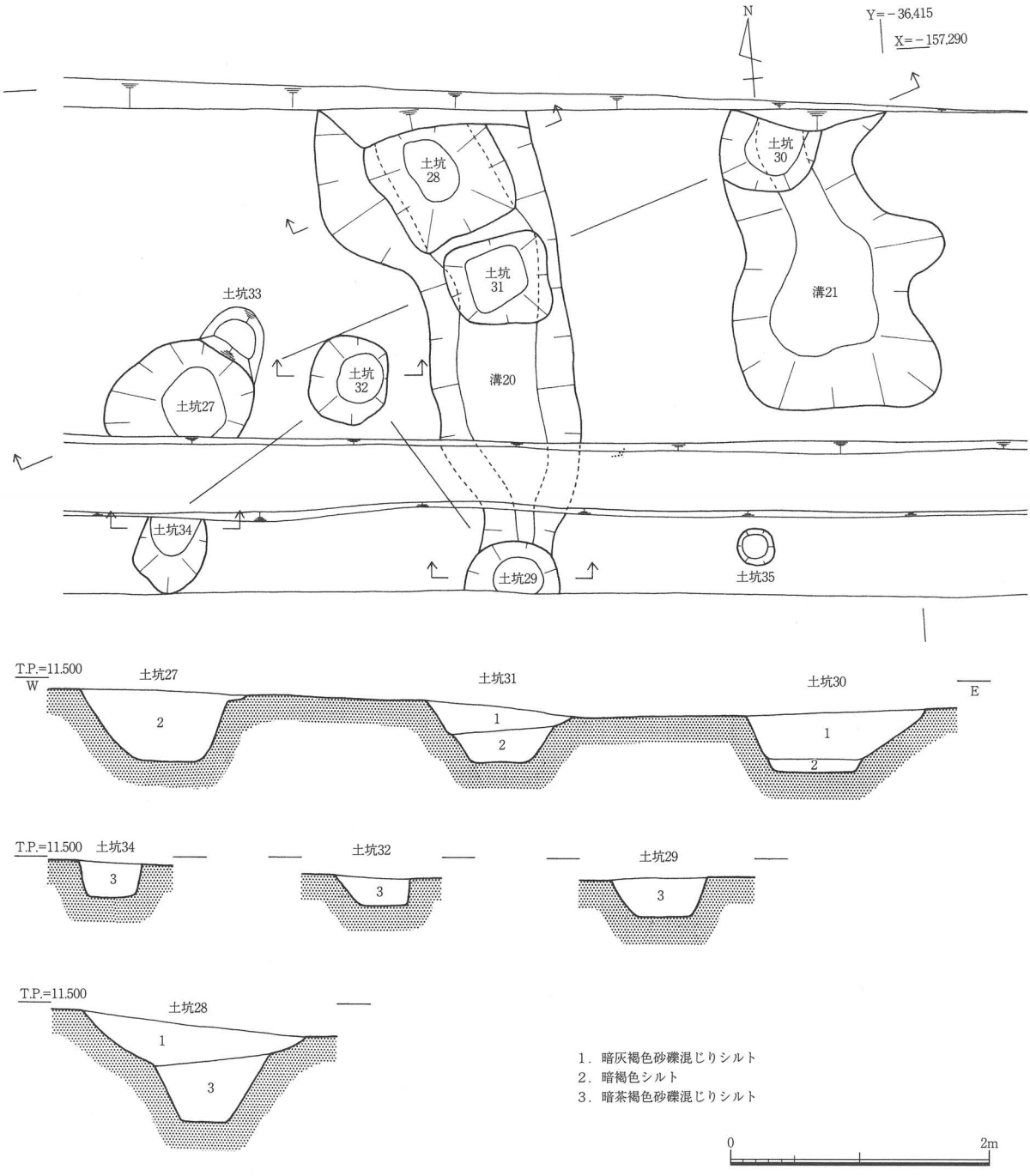
第54図　土坑３実測図（S=1/30）

掘立柱建物の柱穴痕の可能性も考慮したが、土坑の間隔が2.5mと長いことや、他方向への柱穴が確認できなかったことから断定できない。遺物は出土しなかったが、古墳時代中期の溝20に土坑31が切られていることから、古墳時代前期頃（第４遺構面）の遺構であると考える。

土坑29・土坑32・土坑34（第21・55図　図版３）

Ⅱ区で検出された３基の土坑は、発掘の結果径0.6ｍ～0.7ｍ深さ0.25ｍ～0.3ｍと規模が類似した土坑であった。さらに土坑29と土坑32、土坑32と土坑34をつなぐ線はほぼ直角に交わり、各土坑の心芯間の距離も1.9mに近い値をとるため、掘立柱建物の一隅である可能性が高いと思われる。そうすると、長軸を北西から南東方向に、あるいは北東から南西方向に有する建物の一隅であろう。

遺物は出土しなかったが、古墳時代中期の溝20の埋没後に土坑29が掘削されており、古墳時代中期以降の時期に該当すると思われる。地山直上遺物包含層が遺構埋土より上に堆積することから、第３遺構面に該当する可能性が高い。



第55図　Ⅱ区東部分遺構実測図（S=1/50）

土坑41

Ⅲ区の地山面で確認された楕円形の土坑である。土師器片がわずかに認められた。

土坑42

３区北西端の地山直上遺物包含層を掘削すると検出された。遺物は土師器の破片が出土した。

ま と め

今回の発掘調査成果について、明らかになった事実を述べる。

１：　出土遺物は、旧石器から中近世まで幅広く認められた。縄文時代には晩期の長原式土器が認められた。弥生時代前期から中期の壺あるいは甕が出土したが、底部が多く部位として偏った出土状況である。さらに弥生時代後期の土器が少数しか認められず、従来の調査に比べ異なっている。

２：　佐渡産の赤玉石が出土したことは大阪府下の遺跡を見渡しても、特筆すべき点である。出土したものは石核であり、製品を作った際にできる鋭利な石の割れ口をそのままに残して出土している。

このことからも磨耗していないことがわかり、おおよそ上流から長距離運ばれてきたものとは考えがたく、西大井遺跡周辺で石製品の製作が行われていたと推定できる。

赤玉石が使用された年代を特定できないが、他遺跡の事例から弥生時代中期頃を想定するのが妥当であると考える。

３：　出土した遺物を検討すると、古墳時代の西大井遺跡には盛衰が伴うと考えられる。古墳時代前期前半と前期後半～中期にかけての画期が認められ、特に中期後半の遺物が多い。つまり、同じ画期であっても前者の場合、比較的短期間と考えられるのに対し、後者の画期はそれよりも長期間にわたっている。しかも、TK23～47期にかけて最も遺物量が多く、その後は急速に減少してしまう。

古墳時代以外の時期については、全体の遺物量が少ないため明確にできないが、弥生時代において後期の遺物がほとんど認められなかったことが印象に残る。

４：　西大井遺跡では初めてと考えられる、古墳時代の掘立柱建物を確認できた。これは、従来の調査地の西側、つまりは地山のレベルが上がり、地形が比較的安定する場所に、人々の生活の痕跡を確認できたことになる。そのため、西大井遺跡より西側でも、人々の生活痕跡が濃厚に認められることは予想される。今後の調査の進展により、居住域・生産域など集落の構成要素や西大井遺跡の範囲を総合的に捉えることが可能になる。

５：　以上２つの成果より西大井遺跡の西側には、古墳時代の特定の時期に一定規模の集落が存在したことが予想され、それは盛衰を伴うものであった。

特に注目すべきは古墳時代前期後半から中期にかけて遺物量が次第に増え続け、古墳時代後期になると突然遺物量が減少することである。

この時期は、西大井遺跡に近接する大王墓群が築造された時期に該当する。西大井遺跡の人々は間違いなくこれら古墳の造営を見ていたか、あるいは築造に参加していた可能性もあろう。つまり、西大井遺跡の盛衰は、単なる集落の盛衰ではなく、古墳群の造営と密接な関係を有して推移するものであり、それは西大井遺跡そのものの性格をも示唆していると思われる。

6：西大井遺跡の溝について（第56図）

第４遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）で検出された溝２～４は協会1995の710－OS・278－OS・261－OSとつながることが判明した。その710－OS・278－OSは、大阪府教育委員会が1992年度に調査し、検出したSD ２と一連のものであることが協会1995の報告書で指摘されている。そこで溝２～４の全容を把握するため、過去の調査区で検出された溝２～４と同時期の図面を検討することにした。

その結果、第56図から92年度SD ２は同教育委員会が1991年度に調査し、検出したSD9・11・12・14と一連であることも判明した。つまり、今回の調査で確認された溝２と溝３は、調査毎に遺構名を710－OS・278－OS（協会1995）、SD ２（府教委92）、SD ９・11・12・14（府教委91）と変えつつも検出され続け直線距離で240mを超える溝であったことがわかる。

同じく今回検出した溝４も261－OSから府教委91のSD－４へ続き、最後は府教委98の調査区西端で検出され、埋積浅谷に流れ込んでいる。そのため溝４も直線距離で約160ｍ検出されていることになる。

そこで、遺構名の混乱を避けるため、以下では今回の遺構名である溝２～４に表現を統一する。

さらに、この作業の結果、埋積浅谷の対岸にも南北の溝が存在し、それに連なり埋積浅谷上を横断するように同規模の溝が掘削されていることが明らかとなった。

では、一体このように細長く蛇行して掘削された溝はいかなる目的を有していたのだろうか。これまでの調査から溝２～４がある遺構面はいずれの調査区でも、弥生時代後期から古墳時代前期が中心と報告されている。つまり、溝２～４は古墳時代中期には埋没し、その機能が失われていたものと考えられる。

この溝２～４の性格について協会1995の報告では、段丘と埋積浅谷の境付近に位置する溝４と溝２・３の間に墓と考えられる土坑が密集していることから、土坑群を画する遺構であることが指摘されている。

そこで、土坑群について検討したい。西大井遺跡の土坑群が最も多く検出されたのは、府教委92年度の調査である。この土坑は約5000基検出されており、いくつかの土坑からは供献とされる土器が出土している。そしてその結果、「墓」という性格が付与され、結果的に大規模な土坑群を「墓」として認識されたのである。しかし、その形態がきわめて不整形で規模の差異も大きく、全ての土坑が墓であると言い切れない。

この土坑群の北端は協会1995で検出されている。南端も大阪府教育委員会が1991年度の調査で確認しており、その長さは南北約160ｍであり、東を埋積浅谷で区切られている。西端は調査区の外側に位置し、明確にはわからないが、いずれにせよ土坑の密集地域は溝２～４付近であることに疑いがない。

ここで注目されるのは土坑群の南北端は溝などの遺構で区画がなされていないという点である。第56図を改めて観察すると、北端は等高線が深く西側へ入り込んでおり、かつて小規模な谷地形が存在したものと思われる。南端は埋積浅谷がやや西側へ膨らんでいる箇所で途切れているようである。このように、土坑群の南北端は地形を利用して、土坑群の範囲を設定しているようにも見ることができる。

さて、土坑群と溝２～４の重複に注目すると、わずかに数箇所を除き溝と土坑の切りあい関係は認められなかった。切りあい関係が認められる箇所では、いずれも土坑が溝の後に掘削されている。つまり、溝２～４は土坑群に先立って掘削され、後に土坑が築かれる時に溝を破壊していないことから、溝が意識され機能していたことは確実であろう。

溝２・３はこれら土坑群の分布域とは関係なく南北に伸びていることや、土坑群の疎密はあるが、溝２～４周辺より東西に広く土坑が分布している事実から、溝２～４が土坑群の範囲を限定するために設けられた可能性は低いと思われる。

そこで溝そのものについて検討する。まず、溝２～４はほぼ平行していることがわかる。いずれも土坑群が途切れる北端で大きく西へ迂回しており、かつて存在したであろう谷地形の影響を受けているように見える。このような類似点からも溝２・３と溝４はほぼ同じ機能を有した溝である可能性を想定できる。

さらに溝２・３より西側にも溝22・25が南北に検出されており、同様の機能を有した溝が複数存在することも想定できる。

溝２～４について当初は集落のための排水路とも考えたが、それならば地形の高い西側から、より低い東の埋積浅谷に向けて溝を設けたほうが効率的であるように思える。

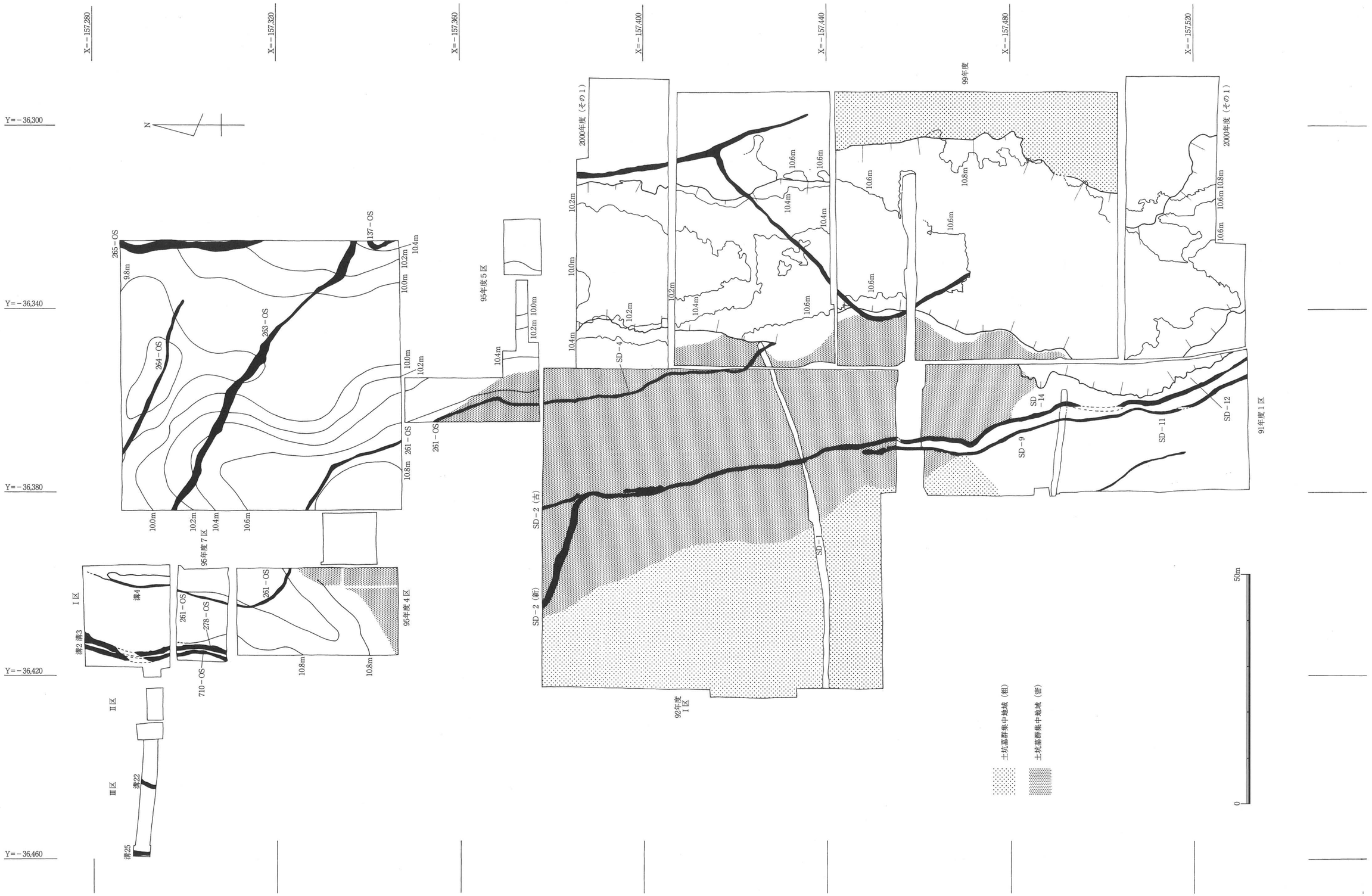
そこで、一つの考えとして挙げられるのは灌漑のための用水路である。つまり溝２・３は溝４のように、埋積浅谷の上流部とつながっており、そこが取水口となり段丘に沿って水が運ばれ溝より低い田へ、斜面を利用して給水される。そして、余分な水はより下位の溝に集められ、再び用水へ利用される。このような溝が幾重にも段丘面に掘削され、灌漑に利用されたのではないかと考える。その結果、溝２・３だけでなく、平行するように溝22・25が検出されたと考える。

同様に、埋積浅谷対岸の溝もそのように考えることができるであろう。ただし、埋積浅谷を横断する溝と連なっていることから、溝２～４のように斜面を灌漑するのではなく、埋積浅谷上に設けられた田へ給水するために設けられた可能性も有る。

さらに興味深いのは、遺物が最も多く出土し、西大井遺跡の画期ともなる５世紀後半になると、既に溝は埋没しており掘削されなかった。集落の盛期には溝が不要とされたのである。

この現象についても、これらの溝を用水路と考えれば理解できるのではないか。結論から述べると、段丘面の利用形態が大きく変化したためと考える。つまり、古墳時代初頭には水田などの生産域として利用されていた斜面が、中期頃になると、掘立柱建物の存在が示すように人々が活動する場へと変化したと考える。その結果、灌漑の用水路は不用となり、掘削されなかったのである。

このように、溝２～４・22・25を用水路と考えると、検出された状況や遺構の消長について理解しやすくなると考える。いずれにせよ、これら溝の性格について断定する資料はなく、集落に伴った遺構であると捉えることが現段階では妥当であり、何かを区画するような性格は見出しがたい。今後、集落に近く段丘面と平行して非常に長く掘削された溝については、事例を集成し検討を加えなければならない。



第56図　溝２～４と既調査区の平面図（溝・土壙墓群Ｓ＝1/800）

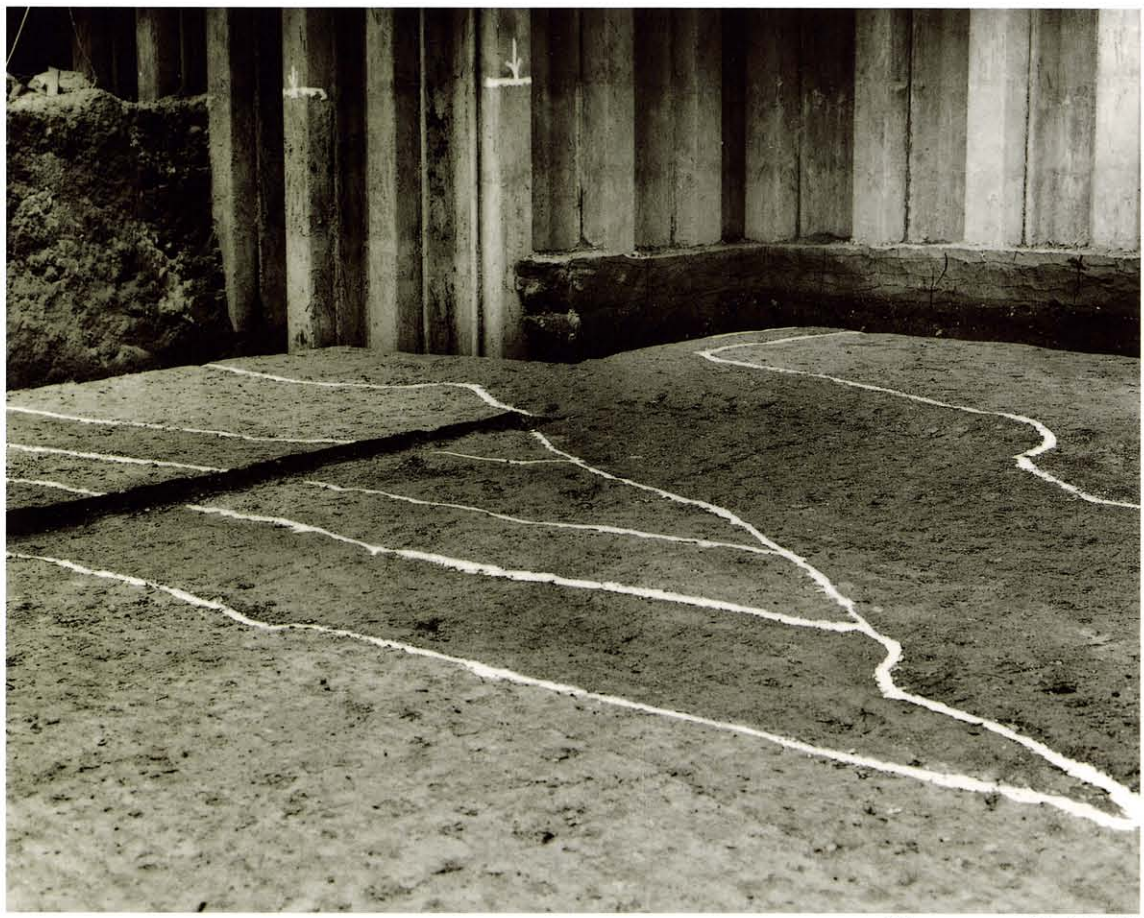
写　真　図　版

Ⅲ区　南壁土層

土坑５　遺物出土状況

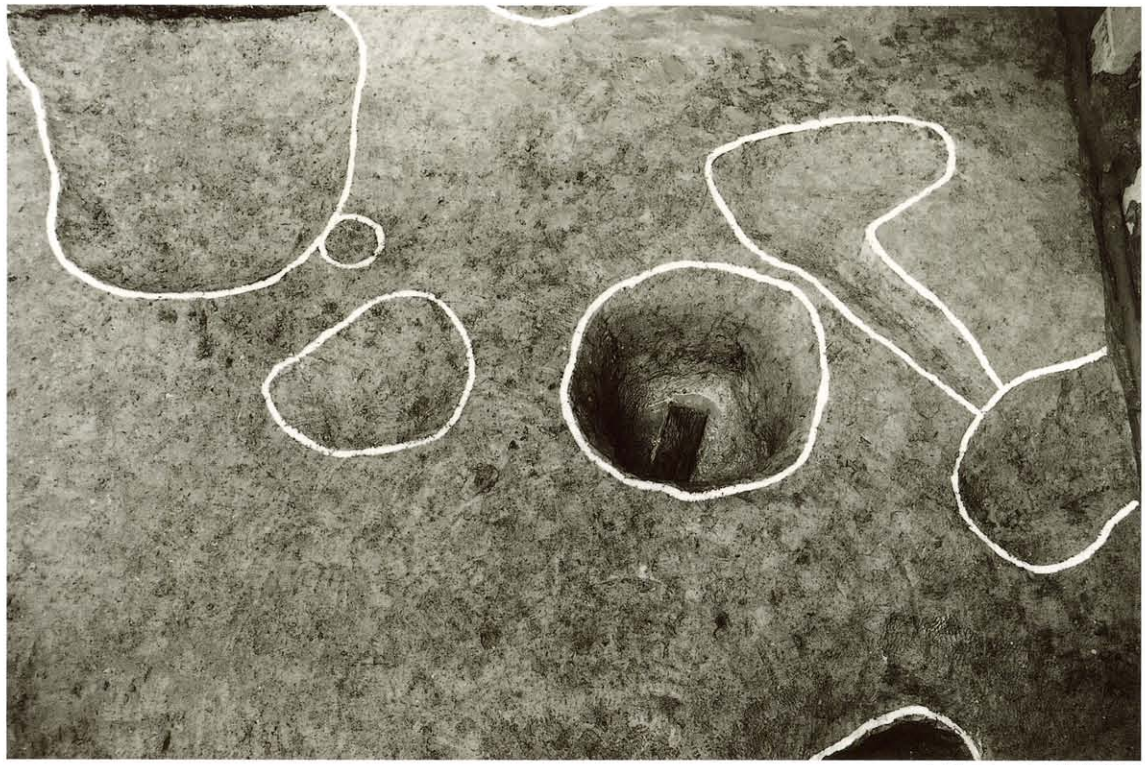
土坑18　遺物出土状況

土坑44　遺物出土状況

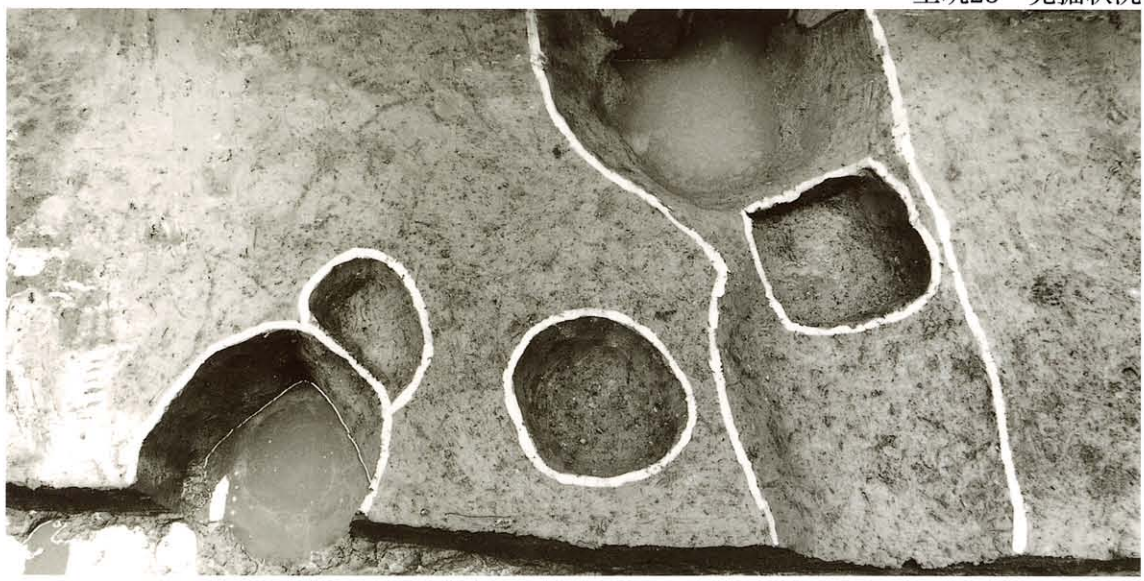


溝１～３　検出状況

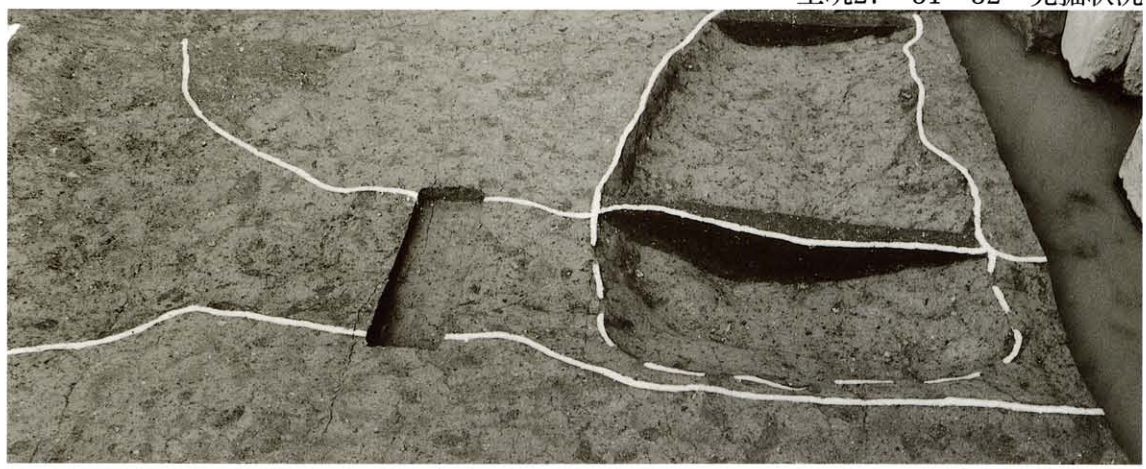
溝３　遺物出土状況



土坑23　完掘状況

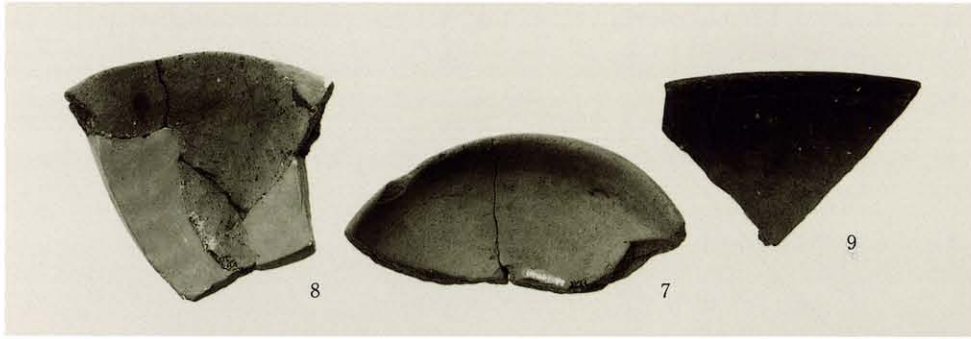


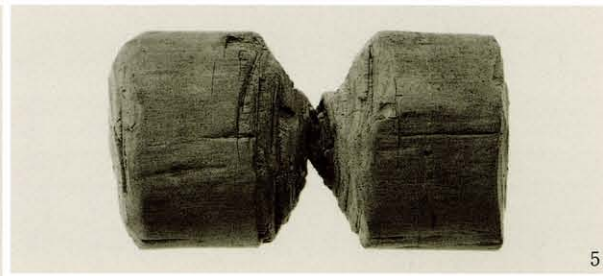
土坑27・31・32　完掘状況

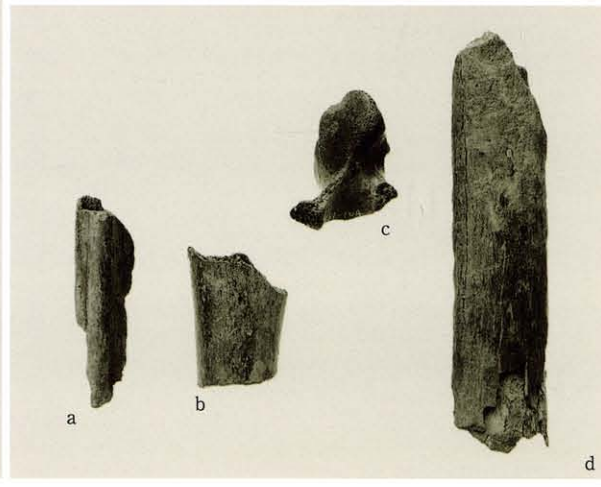


土坑41　完掘状況

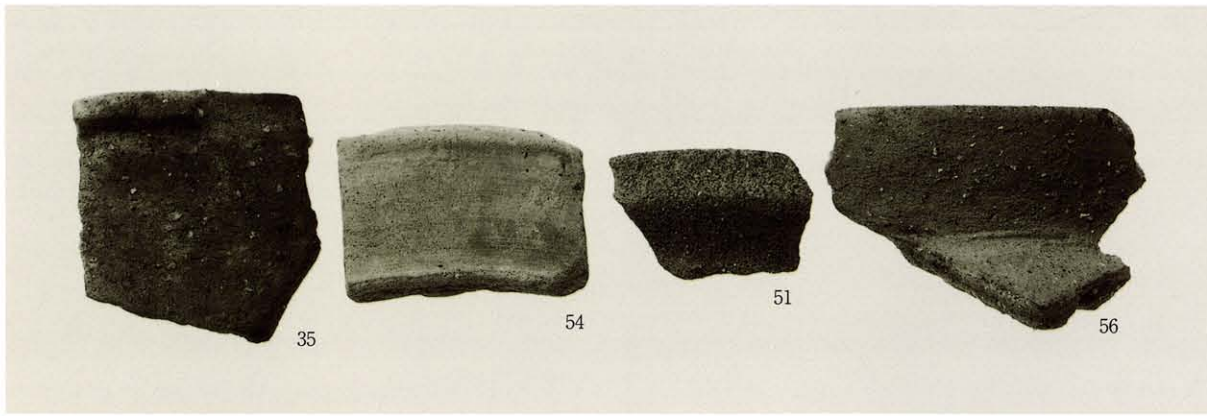
図版4　遺物（1）







a～d：9層


35
54
51
56

39

44

80
79
82
88
86
85

図版6　遺物（3）

58

68

59

64

65

60

70

66

73

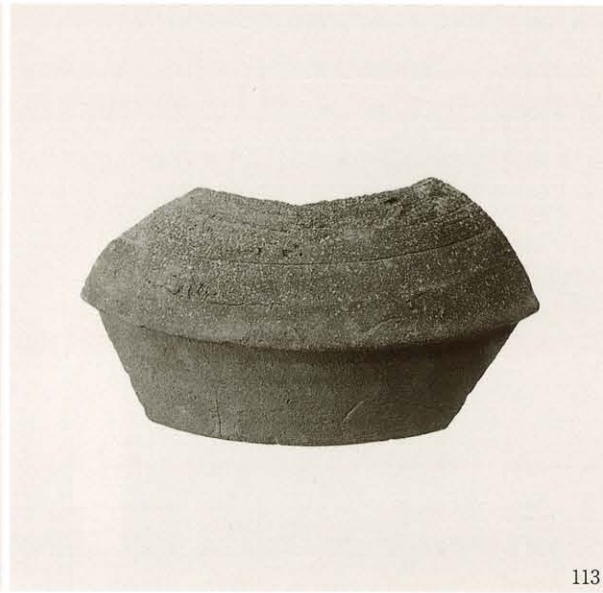
69

76

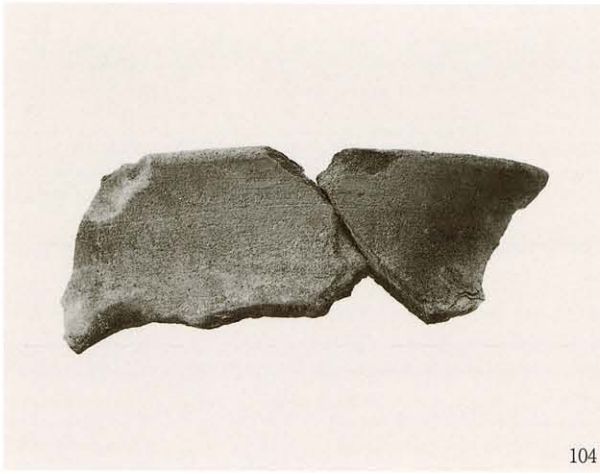
75

図版7　遺物（4）

105



113



104

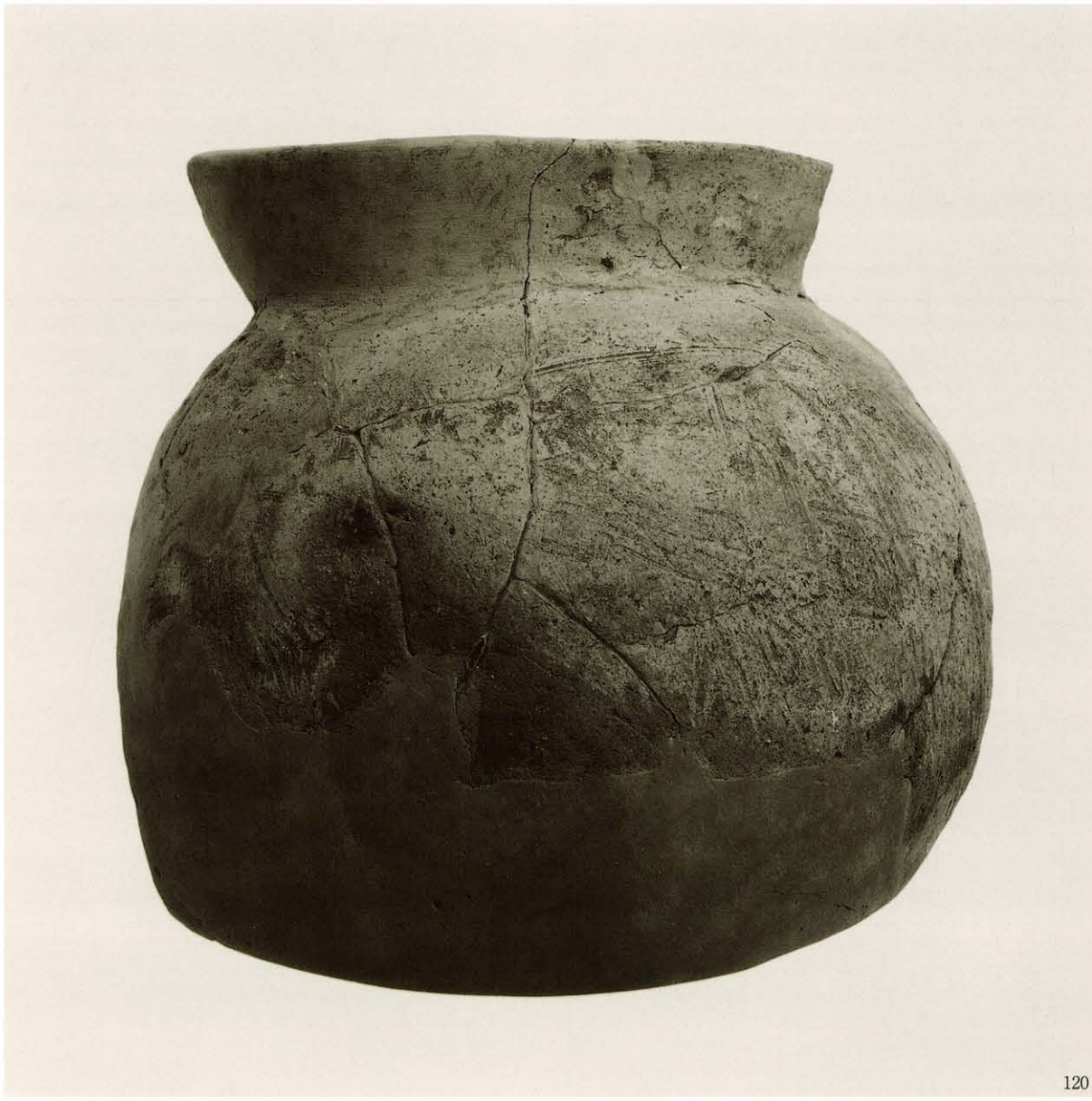
114

111

117

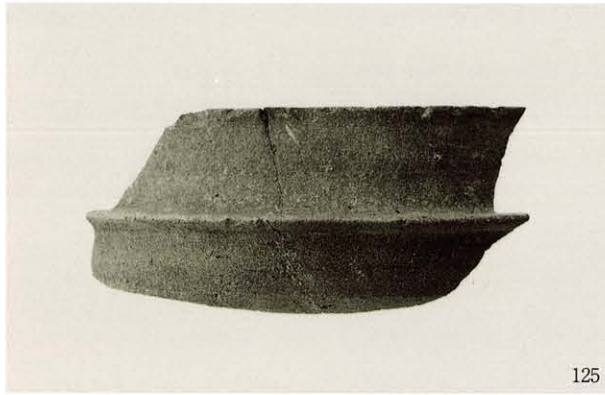
118

119



120

図版9　遺物（6）

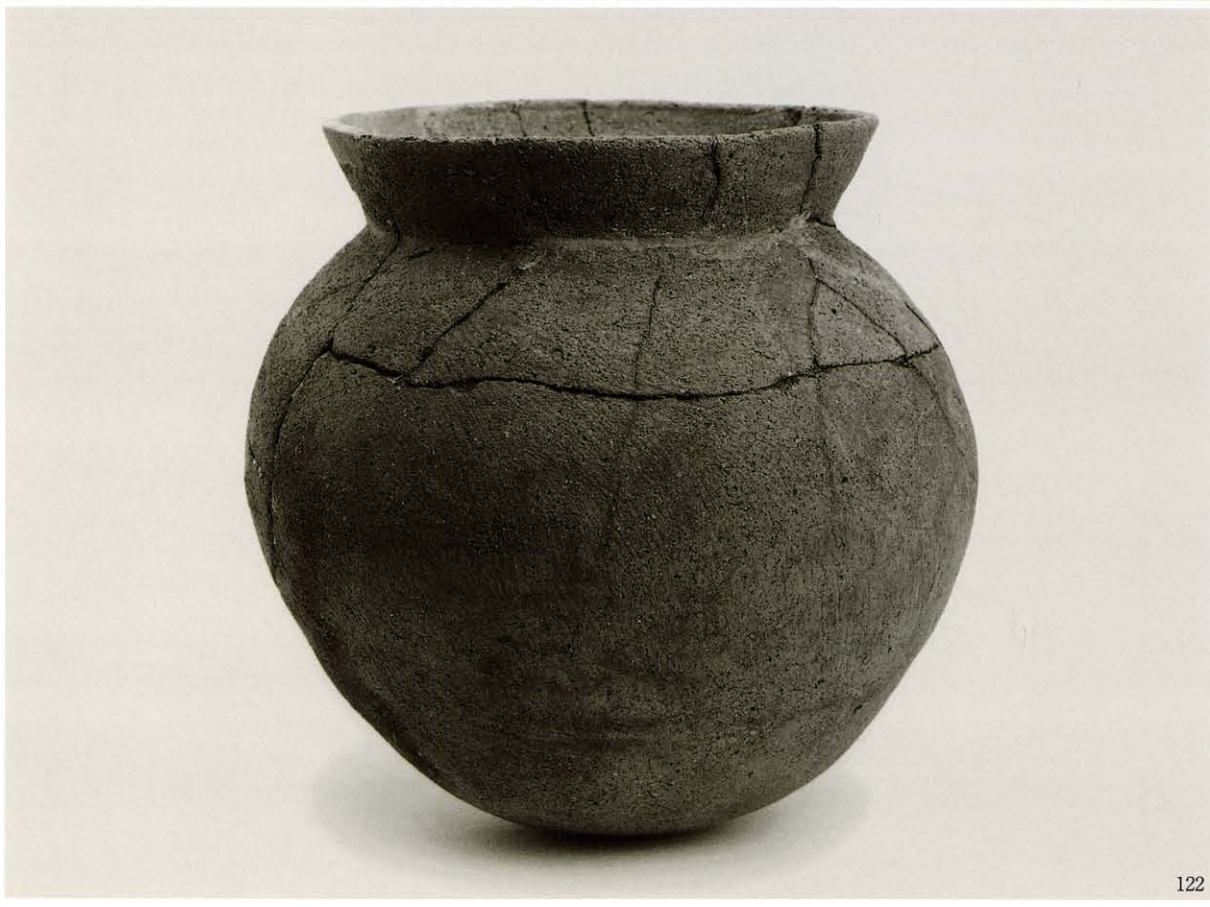


125

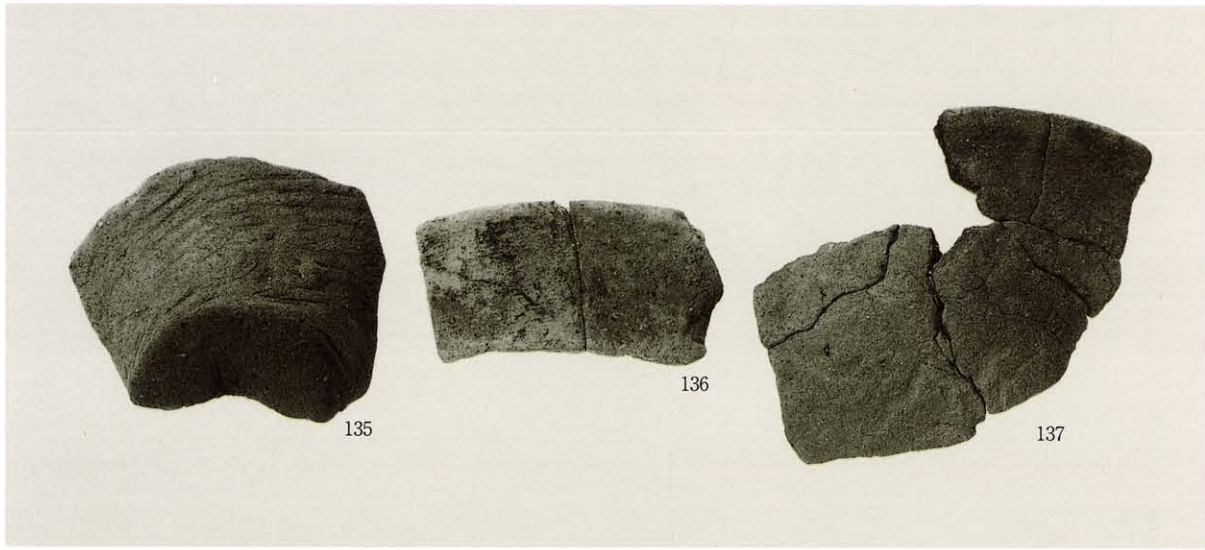
123

124

123



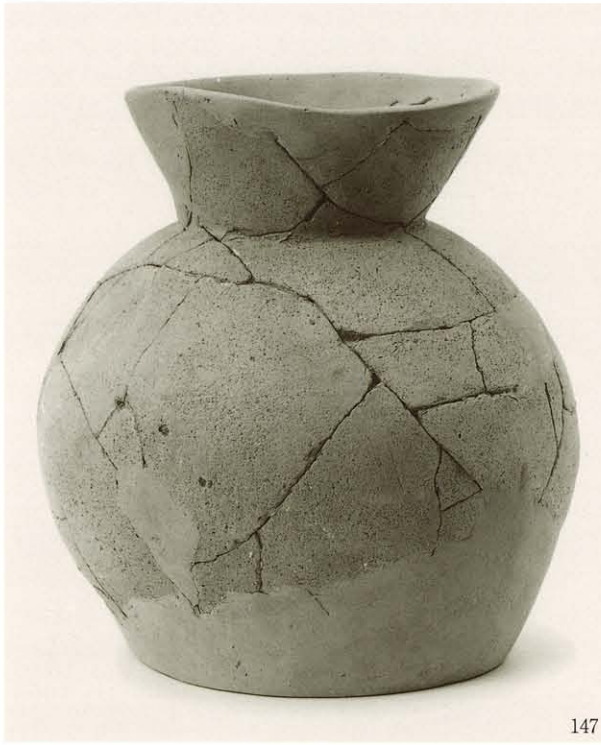
122


135
136
137

142
139

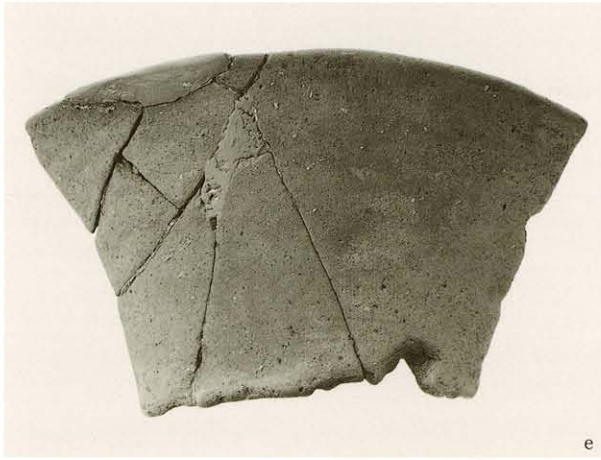
138

図版11　遺物（8）

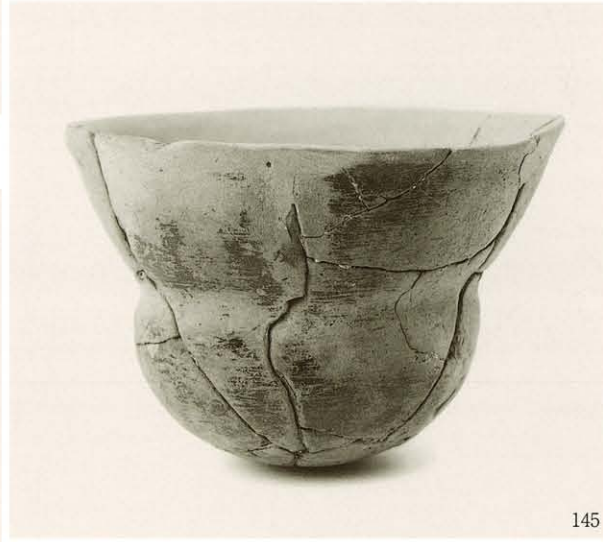


147

152

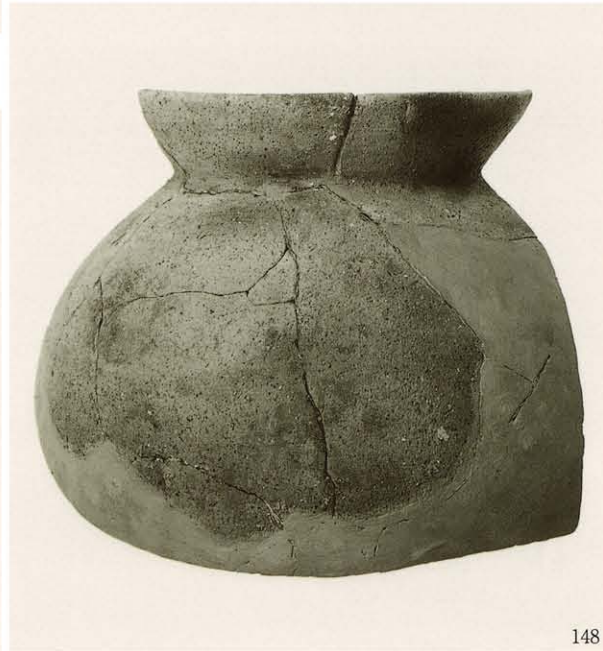


e



145

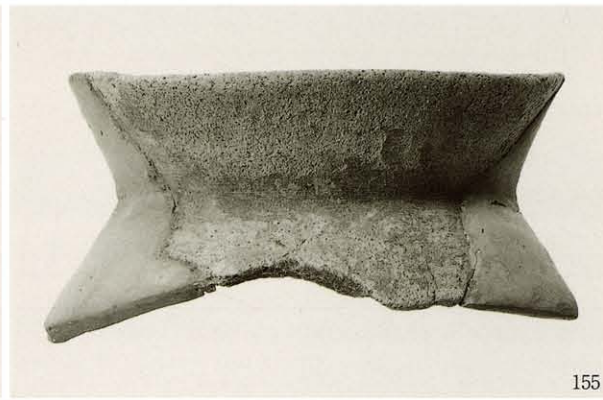
149

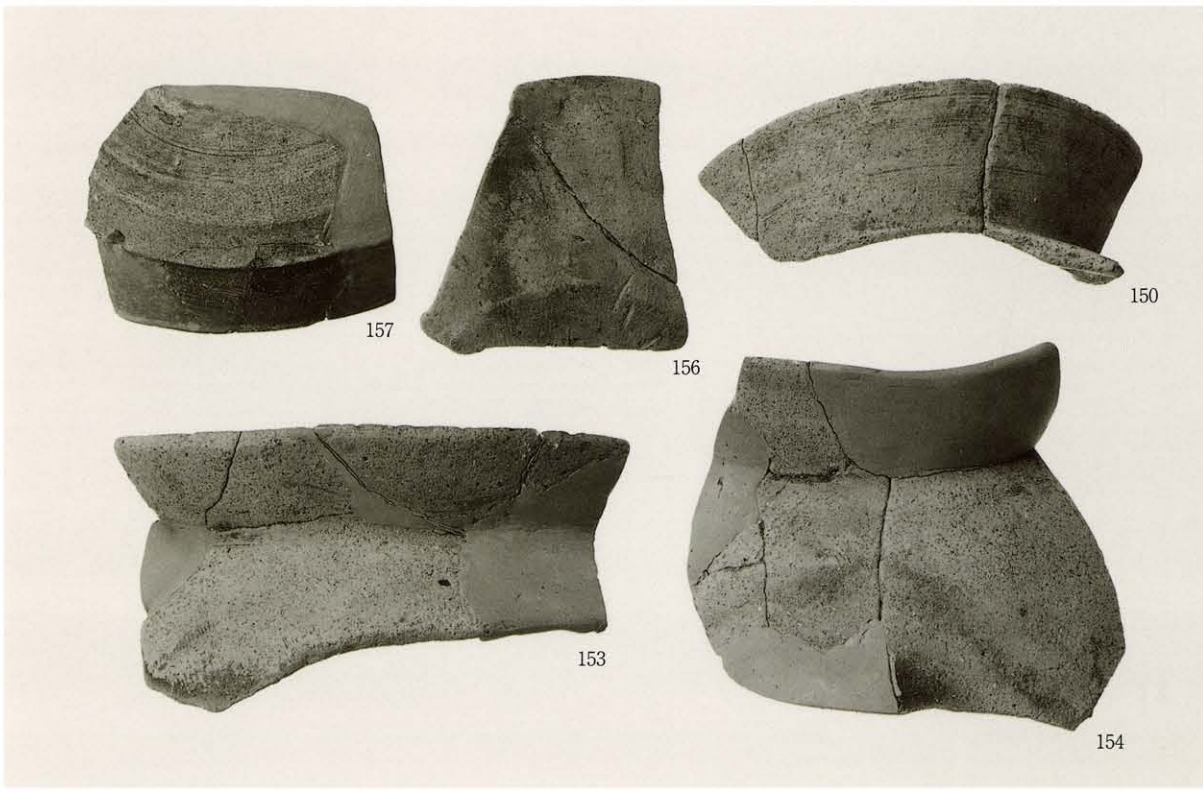


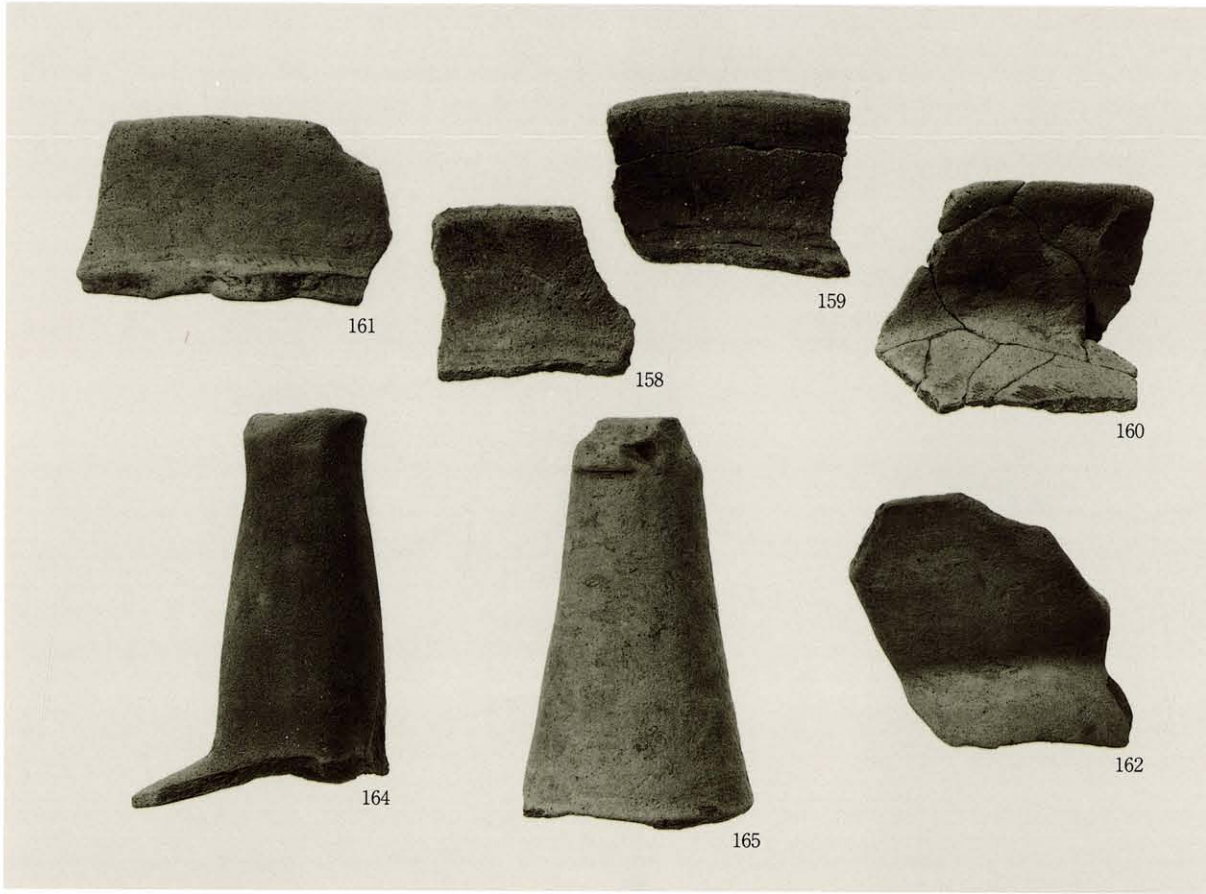
148

146

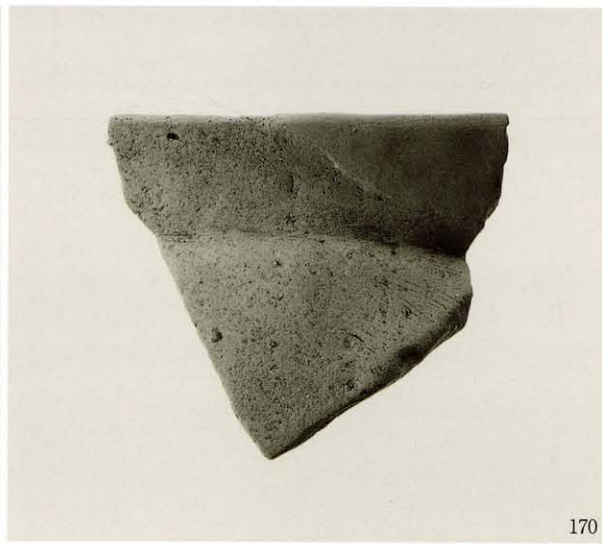
151

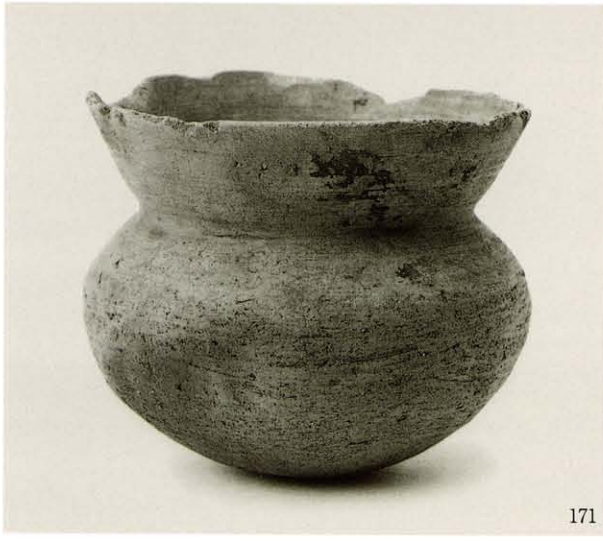

155


157
156
150
153
154

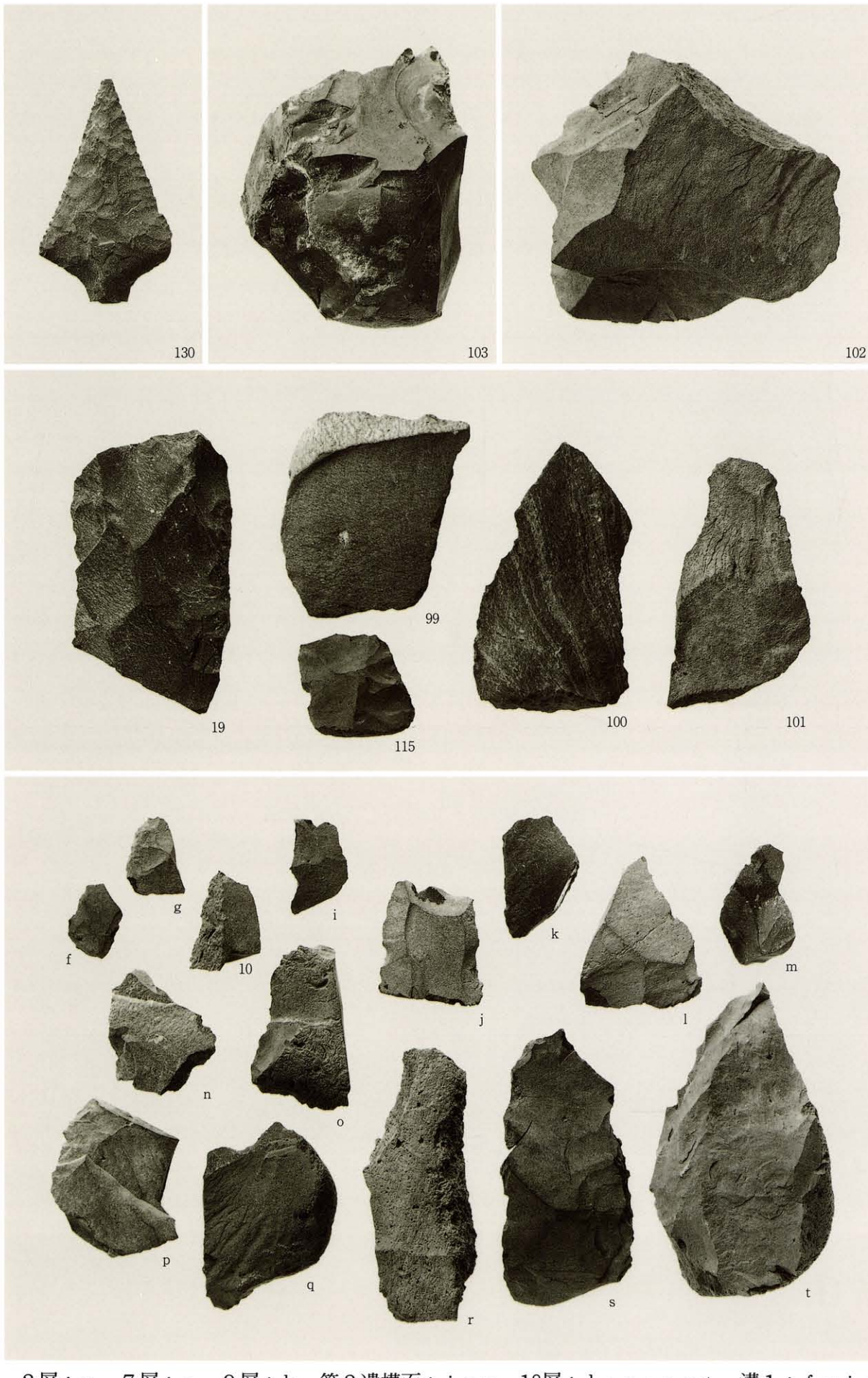

161
158
159
160
164
165
162

163


170


171

169



2層：m、7層：q、9層：k、第2遺構面：j・n、18層：l・o・s・t、溝1：f～i・r、廃土：p

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしおおいいせき
書名	西大井遺跡
副書名	大井水みらいセンター建設に伴う
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	関　真一
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－0008　大阪府大阪市中央区大手前2丁目
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
西大井遺跡（にしおおいいせき）	藤井寺市西大井（ふじいでらしにしおおい）	27226	61	34° 34′ 25″	135° 36′ 25″	2005年1月14日～ 2005年6月23日 2005年12月1日～ 2005年12月16日	840㎡	大井水みらいセンター （旧称大井処理場） 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西大井遺跡	集落	弥生時代		土器、佐渡産の鉄石英	
		古墳時代	掘立柱建物 遺跡を貫く溝	須恵器、土師器	長さ200ｍを超える南北方向の溝を確認
		鎌倉時代	畦畔 水田	瓦器、土師器	

要　約	西大井遺跡の北西部を調査し、古墳時代前期から中期にかけての土師器と須恵器が多く出土した。古墳時代前期の溝は、遺跡を南北方向に貫く200ｍ以上の溝であったことが判明した。さらに、古墳時代中期の掘建柱建物２棟も検出された。今回の成果により、西大井遺跡の西方に古墳時代の居住域が広がると思われる。

大阪府埋蔵文化財調査報告２００６－４

西　大　井　遺　跡

－大井水みらいセンター建設に伴う－

発　行　　大阪府教育委員会
〒540－0008
大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351
発行日　　2007年３月30日
印　刷　　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷５丁目６－25